茨城県行方郡玉造町

若　海　貝　塚

発掘調査報告書

1999年3月

玉造町遺跡調査会

玉造町教育委員会

序

玉造町は茨城県の南東部、霞ヶ浦の東岸に位置し、その大半は行方台地に属し、北東部一帯は標高30メートル前後のゆるやかな丘陵地になっており、傾斜地は山林、平坦部は畑作地帯である。自然条件に恵まれたこの地は、古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねてきた。

貝塚の発掘調査としてはこれまで藤井貝塚、新堀貝塚、井上貝塚の調査が行われ、玉造における縄文時代の歴史を探る上で、貴重な資料が得られております。

このたびの若海貝塚は、梶無川の上流約４kmの東へ入り込む支谷の西岸に位置し、貝殻類が広く散布しております。またこの遺跡で確認される土器から推測すると、縄文時代前期・中期・後期晩期と長い時代にわたって生活の舞台となっていたことが伺われます。

今回、町道５７号線の改良舗装工事に伴い、発掘調査による記録保存の止む無きに至った訳で、その貴重な文化遺産を失うことは誠に残念です。しかし、その反面この報告書が郷土をより深く知る上での貴重な資料として、広く一般の方々にもご活用いただければ、意義深いことと捉えることができます。

特に本調査において縄文期の人骨がほぼ完全な形で出土し、当町の歴史に新しい１頁を加えることができたのは大きな成果であります。このことは新聞各社にも大きく取り上げられ、町内はもとより県内外からも見学に訪れ、多くの方のご理解をいただいていることに当事者として大変心強く思っている次第です。

この発掘調査に当たっては、格別のご指導を賜りました茨城県教育庁文化課・茨城県鹿行教育事務所、発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました打安衛先生、人骨の鑑定にご協力をいただいた国立科学博物館の馬場悠男先生・梶ヶ山真理先生、発掘調査にご協力いただきました地元区長並びに地元関係者に心から厚く感謝を申し上げます。

結びに、町当局並びに担当の方々にご理解とご協力を頂いたことに御礼を申し上げご挨拶と致します。

平成１１年３月

玉造町遺跡調査会長
玉造町教育委員会教育長
海老澤　幸　雄

凡　　例

1　本報告書は、茨城県行方郡玉造町大字若海４５７番地他に位置する発掘調査報告書である。

2　本貝塚の調査は、町道５７号線バイパス工事に伴う事前調査であり、調査は買収、発掘調査の承諾を得た部分で、長さ１４０m、幅は約１５m前後で面積は約２，０００㎡である。

3　本貝塚の調査は、平成１０年６月３０日から同９月２０日まで現場作業を行い、同２２日から整理作業を進め、平成１１年３月３１日に終了した。一部未整理分については、今後折をみて報告したい。

4　本貝塚の調査は、鹿行文化研究所の汀安衛が担当した。
整理作業は、横田泰隆、戸島和子、前田京子、石井よし江、山野たけ、生駒清司、根本武雄
菅谷益尚、橋本好子、図表等は山野、実測は前田・戸島がトレース、貝の分類は横田が中心になり進めた。
歴史館の斎藤弘道氏には調査現場、整理分析で御教示を得た。人骨の鑑定は国立科学博物館の馬場悠男氏に分析をお願いし、玉稿をいただき掲載した。
貝は汀、骨は戸島が主体的に特定分析し、遺物の写真撮影、原稿の執筆はすべて汀が行なった。

5　本報告書の縮尺は、遺構は原則として１／１０、１／２０、１／３０とし遺物は、原則として１／３とした。水糸レベルは図面中に表示した。

6　本調査にあたり次の方々にご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
横田泰隆、前田京子、根本武雄、菅谷益尚、大川義久、清宮久、高須松男、石井よし江
（鹿行文化研究所）
原喜代子、田山松夫、原田森二、原田祐種、原田みさ、樽見フミ、斉藤とく、須貝愛子
田山万里子、岩田博司、安達絵里、斎藤薫、山口明子

7　地元若海区には集落センターの使用をお願いし快諾を得、便所、テント設置等多大な協力を受けた。また、若海区長　原田孝司氏には調査協力者の手配を頂いたり何かと配慮いただいた。畑の表土除去では、橋川英治氏に協力をお願いした。

8　調査及び報告書作成に当たっては茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、玉造町建設課、地元区長さんほか各方面の方々にご指導、ご協力を賜った。
末尾ながら記して感謝の意を表したい。

調 査 会 組 織

会　長	海老澤幸雄	（玉造町教育委員会教育長）
副会長	風間　亨夫	（玉造町文化財保護審議会長）
理　事	野原幸之助	（玉造町文化財保護審議会副会長）
	鈴木　亮然	（玉造町文化財保護審議会委員）
	森作　武夫	（玉造町文化財保護審議会委員）
	笹目　吉夫	（玉造町文化財保護審議会委員）
	成島　勗	（玉造町文化財保護審議会委員）
	小沼　政雄	（玉造町文化財保護審議会委員）
	堀田　好男	（玉造町文化財保護審議会委員）
	真家　幸治	（玉造町文化財保護審議会委員）
	汀　安衛	（調　査　主　任）
	中田　邦雄	（玉造町役場建設課長）
事務局	大森　一夫	（玉造町教育委員会生涯学習課長）
	池島　正夫	（玉造町教育委員会生涯学習課社会教育係長）
	森作　保繁	（玉造町教育委員会生涯学習課社会教育主事）

調 査 団

（敬称略）

団　　長	汀　安衛	（鹿行文化研究所長、調査主任）
調査協力員	横田　泰隆、　前田　京子、　根本　武雄、　菅谷　益尚、　大川　義久 滑宮　久、　高須　松男、　石井よし江、　原　喜代子、　田山　松夫 原田　森二、　原田　祐種、　原田　みさ、　樽見　フミ、　斉藤　とく 須貝　愛子、　田山万里子、　岩田　博司、　安達　絵里、　斎藤　薫 山口　明子	
調査協力者	原田　孝司、　樽見　章、　高埜　栄治、　橘川　英治	

目　　次

序　文
凡　例
目　次
挿図目次
表目次
図版目次
第1節　遺跡の位置と史的環境 …… 1
第2節　調査に至る経過と調査日誌 …… 1
第3節　調査の概要 …… 4
第4節　遺構と遺物 …… 6
1　住居跡 …… 6
2　土　坑 …… 9
3　ピット …… 56
4　1号溝 …… 60
5　粘土張土坑 …… 60
第5節　貝　塚 …… 64
1　貝層層序 …… 64
2　出土土器 …… 65
3　土製品 …… 73
第6節　貝類遺体 …… 74
1　種名の同定 …… 74
2　牙，貝製品 …… 77
3　貝輪 …… 78
4　石器 …… 78
5　微小貝類 …… 78
6　魚類 …… 86
7　哺乳類 …… 91
第7節　人　骨 …… 92
1　はじめに …… 92
2　出土人骨 …… 92
3　考察 …… 96
第8節　結　語 …… 106
抄　録 …… 108

挿 図 目 次

第 1図　若海貝塚と周辺遺跡 …… 3
第 2図　遺跡と調査区 …… 4
第 3図　遺構平面図 …… 5
第 4図　第1、5、9、10号住居跡、ＦＰ－1実測図 …… 7
第 5図　第5号住居跡、ＳＫ－3、Ｐ－3出土遺物実測図 …… 8
第 6図　ＳＫ－3、5号遺構と出土遺物実測図 …… 10
第 7図　ＳＫ－4、6号遺構と出土遺物実測図 …… 12
第 8図　ＳＫ－8、9、10、11号遺構と出土遺物実測図 …… 13
第 9図　ＳＫ－12、13、14、15、16号遺構と出土遺物実測図 …… 15
第１０図　ＳＫ－19、19´20´20、21、22、23、24号土坑実測図 …… 16
第１１図　ＳＫ－16、18号出土遺物実測図 …… 18
第１２図　ＳＫ－19、20´20号出土遺物実測図（表示なしはＳＫ－20） …… 19
第１３図　ＳＫ－21、22、23号出土遺物実測図 …… 21
第１４図　ＳＫ－23号出土遺物実測図 …… 22
第１５図　ＳＫ－24、25、26、27、28号出土遺物実測図 …… 24
第１６図　ＳＫ－25、26、27、29、30号実測図 …… 26
第１７図　ＳＫ－30、31号出土遺物実測図 …… 27
第１８図　ＳＫ－29´、32、33、34、35、36、37、38、39、40、42、43号実測図 …… 28
第１９図　ＳＫ－33号出土遺物実測図 …… 29
第２０図　ＳＫ－33、35号出土遺物実測図 …… 30
第２１図　ＳＫ－34、35、36号出土遺物実測図 …… 31
第２２図　ＳＫ－36、37、38、40号出土遺物実測図 …… 34
第２３図　ＳＫ－41号出土遺物実測図 …… 35
第２４図　ＳＫ－41、42、44、49、50、51、52、53号実測図 …… 37
第２５図　ＳＫ－42、43、44、45、49、50号出土遺物実測図 …… 38
第２６図　ＳＫ－50、51、52、53号出土遺物実測図 …… 40
第２７図　ＳＫ－54、55、57、58、61、62、63号実測図 …… 42
第２８図　ＳＫ－54、55、56、58、59、60、61号出土遺物実測図 …… 44
第２９図　ＳＫ－61、62、63号出土遺物実測図 …… 45
第３０図　ＳＫ－63、64、65、66、67、68、70、72号出土遺物実測図 …… 48
第３１図　ＳＫ－64、66、68、69、70、72、73、74、75、76、77号実測図 …… 49
第３２図　ＳＫ－74、79、89、90、91、92、94、96、98号出土遺物実測図 …… 50
第３３図　ＳＫ－89、90、91、92、93、94、95、95´96、97、98号実測図 …… 52
第３４図　ＳＫ－92、98、101号出土遺物実測図 …… 53
第３５図　ＳＫ－23号出土遺物実測図 …… 55
第３６図　ＳＫ－36号出土遺物実測図 …… 55

第３７図　Ｐ－1～27号実測図 …… 57
第３８図　Ｐ－2、4、6、7、8、10、11、12、13、15、31、34、37、
38、39、42、82、96、99号、ＳＫ－15号出土遺物実測図 …… 58
第３９図　Ｐ－35、36、37、38、40、40′、66、63、73、74、75、76、88、
89、94、95、96、96′、98、101号実測図 …… 59
第４０図　Ｐ－28～30、45～72、98～100号実測図 …… 61
第４１図　ＳＤ－1号出土遺物実測図 …… 62
第４２図　ＳＫ－1、2、7、71号実測図 …… 63
第４３図　貝塚層序 …… 64
第４４図　3層、4層出土土器断面図 …… 66
第４５図　5層出土土器断面図 …… 68
第４６図　6層出土土器断面図 …… 69
第４７図　7、8層出土土器断面図 …… 71
第４８図　貝塚出土骨牙製品 …… 91
第４９図　貝塚出土骨牙製品 …… 91

表　目　次

第　1表　土器片錘一覧 …… 73
第　2表　貝の生育環境 …… 76
第　3表　微小貝類一覧 …… 78
第　4表　貝類遺体一覧　1、2層 …… 80
第　5表　貝類遺体一覧　3、4層 …… 81
第　6表　貝類遺体一覧　5、6層 …… 82
第　7表　貝類遺体一覧　7、8層 …… 83
第　8表　ハマグリ，サルボウ各層出土グラフ …… 84
第　9表　シオフキ，オキシジミ，ウスハマグリ，アカニシ
ヤマトシジミ各層出土グラフ …… 85
第１０表　魚骨一覧　1、2層 …… 87
第１１表　魚骨一覧　3、4層 …… 88
第１２表　魚骨一覧　5、6層 …… 89
第１３表　魚骨一覧　7、8層 …… 90
第１４表　哺乳類骨一覧 …… 90
第１５表　若海貝塚１号人骨頭蓋計測値と比較資料 …… 98
第１６表　若海貝塚出土人骨四肢骨計測値と比較資料 …… 99
第１７表　若海貝塚出土人骨歯冠計測値と比較資料 …… 100
第１８表　若海貝塚人骨頭蓋小変異 …… 100

写真図版目次

ＰＬ－　1　調査前（上）、調査風景（中）、終了全景（中下）、
1号住（下右）、完掘と土坑 …… 109
ＰＬ－　2　ＳＫ－3、5、9、8、11、11と19、19と19′、20号完掘、遺物出土状態…… 110
ＰＬ－　3　ＳＫ－22、23、24、27、29、30、31号完掘、遺物出土状態 …… 111
ＰＬ－　4　ＳＫ－33、36、37、39、42、53、56号完掘、遺物出土状態 …… 112
ＰＬ－　5　ＳＫ－56、57、58、61と62、66、68、69と70、71号完掘、遺物出土状態 …… 113
ＰＬ－　6　ＳＫ－77、101、Ｐ－12、16、17、20、20～22号完掘 …… 114
ＰＬ－　7　Ｐ－25、26、39、40号出土土器スナップ、Ｂ地点貝塚、
同細部（下部）、同貝層、出土遺物状態 …… 115
ＰＬ－　8　ＳＫ－23、9、25、27、36号出土遺物 …… 116
ＰＬ－　9　ＳＫ－36、33、42、48号出土遺物 …… 117
ＰＬ－　10　ＳＫ出土の土器片錘、ＳＤ－1、Ｐ－3、8、42号出土遺物 …… 118
ＰＬ－　11　3層出土土器 …… 119
ＰＬ－　12　3層、4層出土土器 …… 120
ＰＬ－　13　4層出土土器 …… 121
ＰＬ－　14　5層出土土器 …… 122
ＰＬ－　15　5層出土土器 …… 123
ＰＬ－　16　5層出土土器 …… 124
ＰＬ－　17　5層、6層出土土器 …… 125
ＰＬ－　18　6層出土土器 …… 126
ＰＬ－　19　6層出土土器 …… 127
ＰＬ－　20　7層出土土器 …… 128
ＰＬ－　21　8層出土土器 …… 129
ＰＬ－　22　貝　　類 …… 130
ＰＬ－　23　イノシシ、シカ、アシカ類 …… 131
ＰＬ－　24　哺乳類、鳥類、魚類 …… 132
ＰＬ－　25　魚類、貝類、各種骨製品 …… 133
ＰＬ－　26　人骨出土状態 …… 134

第１節　遺跡の位置と史的環境

本遺跡は、茨城県行方郡玉造町大字若海４５７番地他に所在している。玉造町は茨城県の中央部やや東より、南に麻生町、東に北浦町、鉾田町、北側に小川町に境を接し、西側は洋々たる霞ケ浦に面する農村的な町である。遺跡は若海集落の東、香取神社、農村集落センターに隣接し、標高３２ｍ程の台地上に占地し、大半が畑地として利用されている。霞ケ浦の北東側に位置し、小川町に源を発する梶無川の中程の東岸、谷津の奥まった所に６ケ所の貝塚が環状に占地している。（第１図）今回、道路のバイパス工事に伴い調査を行った貝塚はＢ地点にあたり、本貝塚の極一部、東側部分が対象になった。

周辺の梶無川流域には、縄文時代から多くの遺跡が所在し（第１図）古代から恵まれた自然環境にあった。本貝塚は霞ヶ浦東岸域を代表する貝塚で、井上貝塚の数倍の規模をもち、範囲は５ｈａに及び鹿行地域では第一の規模をもつ。これに伴う遺跡も縄文前期の関山式から始まり晩期大洞式迄続き、本貝塚のもつ資料は学術的に極めて価値が高い。

弥生時代の遺跡はあまり明確ではないが次第に研究が進展し明確になるであろう。

古墳時代では金銅冠を出土した三昧塚をはじめ多くの古墳が散在し豪族の盤踞が窺われる。前方後方墳の勅使塚、猿の埴輪の大日塚等貴重な独特な古墳が、霞ケ浦を望む台地端部の各所に占地している。特に勝井古墳群、井上古墳群は注目に値する。

古代の寺院として手賀廃寺、井上廃寺等古代仏教の伝播、庇護者の研究が待たれる。また、本町の地名『玉造』の地名起源説の地を探求する研究も課題である。

鎌倉時代の遺構は、玉造氏、鳥名木氏、芹沢氏、手賀氏等多くの小豪族の形成盤踞を見る事が出来る。以後数百年安定した時代が過ぎ、やがて今日でもその嘆きぶしが聞かれる程の佐竹氏の謀略が襲う事となる。太平の世は終わりを告げ江戸時代へと入り、藩領、旗本領地となり明治維新を迎える事となる。

古代史研究には貴重な史蹟が豊富な街で、自然と調和した豊かな農村の町である。

第２節　調査に至る経過と調査日誌

１　調査に至る経過

玉造町は、主要基幹道路である国道３５５号と行方台地を縦断する主要地方道水戸神栖線に対し、国道３５４号と県道鹿田玉造線等の道路により町を横断する形で接続している。幹線道路である町道５７号線については、その県道鹿田玉造線と主要地方道水戸神栖線を結ぶ、重要生活路線として位置付けされ、交通量も増加し住民要求も高いことから道路改良工事が計画された。

今回の開発に伴い、事業主体者玉造町長から平成８年８月２９日付で，工事予定地内の埋蔵文化財の所在の有無および取り扱いについて玉造町教育委員会に照会が出された。

これを受けて玉造町教育委員会は、工事予定地及び周辺の路査を行った結果、周知の遺跡である若海貝塚（県番号1529）が所在する旨、平成８年９月１１日付で回答した。

このため玉造町教育委員会と玉造町役場建設課で、文化財保護・保存に関する事前協議を実施した。この結果を受け茨城県教育庁文化課の指導の下、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査に当たっては、鹿行文化研究所の汀安衛先生の協力を得て、１９９８年６月３０日から９月２０日期間で調査を実施することになった。

2　調査日誌　（第２図）

本遺跡は前述のとおり道路のバイパス化に伴うもので゛調査範囲は、道路敷部分のみである。平成９年１０月現地の確認を行い、予算化を待って平成１０年６月３０日より調査を開始した。貝塚、遺跡とも６月１０日に確認調査を行い、日数・費用の見積もりを行い調査に入った。

以下調査日誌を元に調査経過を箇条書きに述べる。

６月３０日　Ａ地点の確認を行う。これは、道路の下になるためサンプルの採取。

７月　１日　本日から調査区の北側の貝塚の平面図作成し明日からの本調査に備えた。遺跡部分では表土除去を開始した。かなりの密度で遺構が確認される。

７月　２日　本日より遺構確認作業を開始した。遺構は円形状が大半。

７月　３日　遺構、貝塚の調査を進める。加曽利Ｅの新しい時期の遺構が多い。近世の内耳もつ粘土張り遺構が３基程確認調査。溝？調査、蒸し暑い。

７月　６日　貝塚かなり良好な状態、円形土坑調査、溝調査続行。

７月　９日　土坑の調査順調、貝塚は２層へ進む。暑さ一休みで調査が進む。

７月１４日　撹乱多く遺構プラン把握に苦労、トレンチを入れ確認しながら進める。

７月１８日　撹乱に悩まされながら調査、貝塚は４層へ。土器、骨は少なく貝の生育は不良。

７月２２日　貝塚、６層調査。遺構は撹乱の為遺構の確認に時間かかる。

７月２６日　隣地部分は撹乱が無く調査は進む。東側は撹乱多く重機で排土を検討。

８月　１日　重機で撹乱土を除去し遺構確認作業。貝塚７層調査。　人骨出土近世？。

８月１０日　フラスコ状土坑が多く、円筒状遺構も散見する。袋状は少ない

８月１２日　明日からお盆の休みとする。貝塚は約半分、遺跡も約半分で調査は予定より
より１０日程の遅れている。

８月１７日　盆明けで調査開始、土坑、ピット、貝塚８層へ。

８月２０日　貝塚東側へ調査区移動、予想より貝が多い。建物群存在か、ピットが多い。

８月２４日　遺構調査撹乱土除去後順調、貝塚２層部分へ。

８月２６日　天候が定まらず、所によって大雨有り、貝塚、土坑調査続行

８月２８日　貝塚調査３層人骨の一部出土、人骨とは確定せず、膝部分のみ。半信半疑。

９月　２日　人骨確定丁寧に周辺土、貝を除去、文化課連絡、遺構調査。

９月　５日　歴史館斎藤氏来訪、新聞各社来訪、近隣から見学者。池島、森作氏不審番。

９月　９日　７日茨城、本日毎日、８日読売、９日朝日の各紙発表。見学者多数。
５日から見学者の応対で調査が進まず。玉造町ナイトハイキング見学。

９月１２日　人骨収納し４層調査終了し５層へ、遺構はほぼ終了に近い。測量のみ。

９月１４日　ほぼ調査終了し隣接のセンターで慰労会。残りは１０人程で残務整理。
９月２０日を以て調査を終了とした。
以上５０日間の調査作業日誌を書き出した。

第1図　若海貝塚と周辺遺跡

第３節　調査の概要

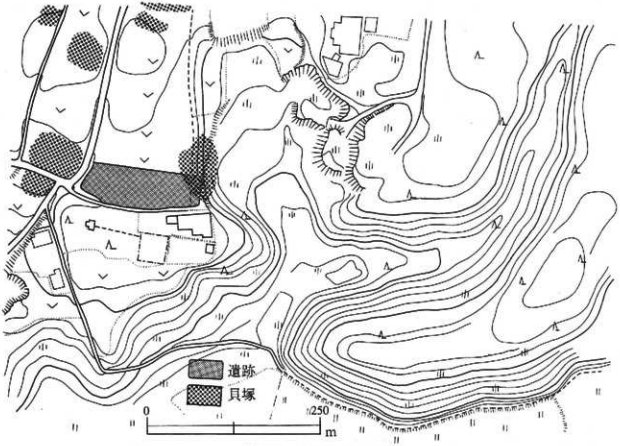
本調査は、前述のとおり町道改良工事に伴うバイパス部分にかかる若海貝塚遺跡の報告である。調査は６月３０日から９月２０日迄現地の作業を行い、９月２２日から３月３１日迄整理作業を行った。（第３図）

事前にＡ地点の道路下になる部分の確認調査を行い、貝のサンプルを採集した。土嚢袋約２０袋で分析の結果、Ｂ地点と比べ貝種、土器構成に特段の差はなかった。

調査区は、南側はＡ地点貝塚に隣接し、やや傾斜をもち遺構は検出されなかった。北側ではＢ地点貝塚が斜面部に確認され、以前に慶応義塾高校考古学会が調査したといわれている。今回の調査区域に貝塚の東端約７０㎡程がかかり調査対象となった。

調査は、貝塚班、遺跡班に分け進めた。その結果貝塚の貝は、土嚢袋１，１５０袋、住居跡４軒、土坑８５基、ＦＰ１、ピット９０基が確認された。時期は、縄文時代中期加曽利Ｉ期から晩期姥山式、平安時代の国分式、鎌倉、室町時代の墓、江戸時代の粘土張り遺構等が見られた。

遺構の大半は、縄文中期のフラスコ状土坑で大半は複雑に切り合い、又撹乱されていた。大きく北側、中央北側、中央南側、南側の４ブロックに別れ北側では円形状プラン、中央北側ではフラスコ状プラン、中央南側でもフラスコ状が多く南側には円形状、フラスコ状が相半ばする。遺跡西側部分、中央よりに円筒状の円形プランの土坑が見られた。その他、中央部には掘立状のピットが多数検出されている。

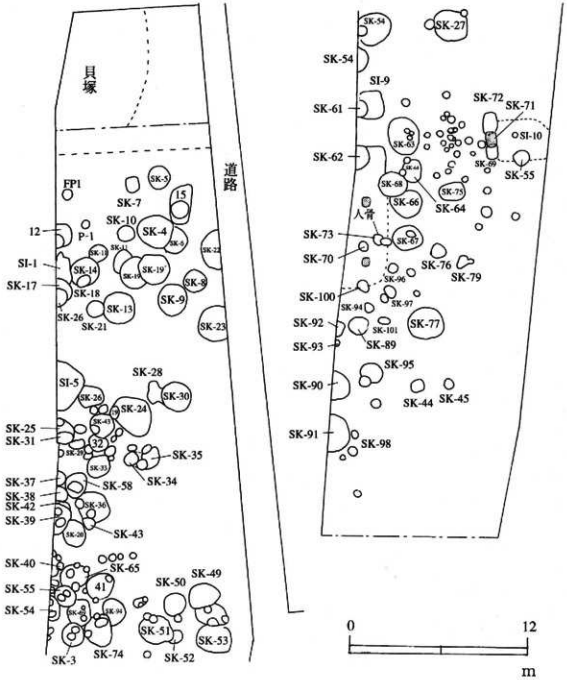


第２図　遺跡と調査区

住居跡は、４軒検出されたがすべて隣地に伸び全掘は出来なかった。３軒は、縄文時代中期の遺構で１軒は、平安時代初頭の北竈の遺構であり坏底部には糸切りが見られる。その他全体的に粘土張り土坑が４基散在し検出され、また人骨も同様に３人程検出されている。墓域に使用された時期があったと推察される。

貝塚は、東端の一部で８層に分類された。２、３、５は純貝層に近く、８層で地山に到達し、状態から斜面部に投げ捨てられた感じをもつ。下部程貝層は厚く中央東よりの３層からほぼ完全な状態の人骨がうつぶせで、足を折り曲げたような状態で検出された。壮年後半の男性であった。

以上が調査の概要である。



第３図　遺構平面図

第４節　遺構と遺物

１　住居跡

１号住居跡　（第４図）

本住居跡は、調査区北側のエリア外に約半分程を置く遺構で北側に竈をもつ。確認した東側で東西２．７ｍで竈の位置から南北に長い長方形プランを呈すると推察される。掘り込み深さは、１０ｃｍ程で耕作のため上部は欠失、南側はＳＫ－１７に掘りこまれている。床面は、中央と竈前面のみやや締りをもつ以外は全体に悪い。主軸は、ほぼ北に置く。

竈は、半円状形態で大半を住居跡外に置き、ほぼ床面の深さに火床部を置く。ほぼ中央部で円形状、袖に類する部分は存在しない。僅かに砂質粘土が認められるだけである。

遺物は、竈内部から坏、カメの破片が出土している。坏は、底部に回転糸きり痕残す。カメは、やや頸部の長い形態で底部、口縁部は検出出来なかった。これらの遺物、遺構形態から平安時代初頭国分期の住居跡と推定出来る。

５号住居跡　（第４図、５図）

本住居跡は、中央やや北よりに位置し約半分程エリア外に置く。東側は、ＳＫ－２６に掘りこまれ欠失。確認出来る範囲では南北２．５ｍ程の方形状プランを呈すると推定される。掘り込みは、確認面から２０ｃｍ程で主軸をＮ－５０°－Ｓ前後に置くと思われる。南側に薩摩芋の貯蔵穴の撹乱が認められた。

覆土は３層に分けられ中央部に焼土を含む層が見られた。３層は、褐色でローム粒子を含み粘性はややある。

床面は一部を除き全体に悪く、立ち上がりが確認出来たので一応住居跡と推定した。

炉は確認出来ず、柱穴と推定されるピットも検出できなかった。

遺物は、縄文土器が大半で中期の加曽利Ｅ式から晩期安行３式迄検出され時期の判断は多様な時期の遺物が混在し断定は無理で、一応縄文時代の遺構と推定される。床面からは加曽利Ｅ式、称名寺式などが出土している。床面の遺物からは後期初等の時期が推察される。

９号住居跡　（第４図、５図）

本住居跡は、調査区中央部西側に検出され中程をＳＫ－６１によって掘りこまれ西側の一部をエリア外に置く。長軸を東西に置き長方形のプランと推定され、南北３．６ｍを測り、掘り込み深さは、３０ｃｍ前後で中央部にやや良好な床面が見られた。

覆土は、２層で上部に撹乱層が残り切れぎれに暗褐色、褐色が縦に見られた。これらから覆土はほぼ投げ込みと推定される。１層は粘性は弱く２層は強い。

遺物は、阿玉台式、称名寺式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、安行式等が見られたがいずれも細片であった。特に加曽利Ｂ式土器が合計２７８片と卓越していた。晩期の遺物は、５片前後と少ない。時期は、後期中葉前後と推定される。

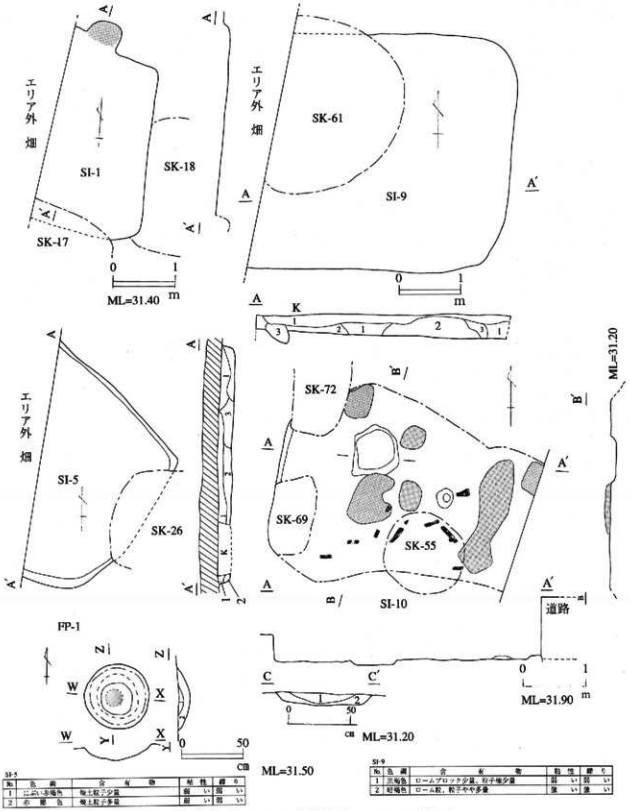
炉、柱穴は検出されなかった。

１０号住居跡　（第４図、５図）

本住居跡は、中央やや南側の東側に位置し検出された。上部は、大半が撹乱され床面が破線の状態で検出され締りはややある。東西ではＳＫ－５５、６９、７２が掘り込まれており、又現代

の撹乱が入り遺存状態は悪い。遺存状態から長方形状形態が推定される。

床面からやや浮いた状態で焼土ブロックが散在していた。炭化材もかなり検出されている。材質は、柯系の木が大半であった。　覆土は、１０ｃｍ前後で褐色層に焼土粒子、炭化粒子等が混



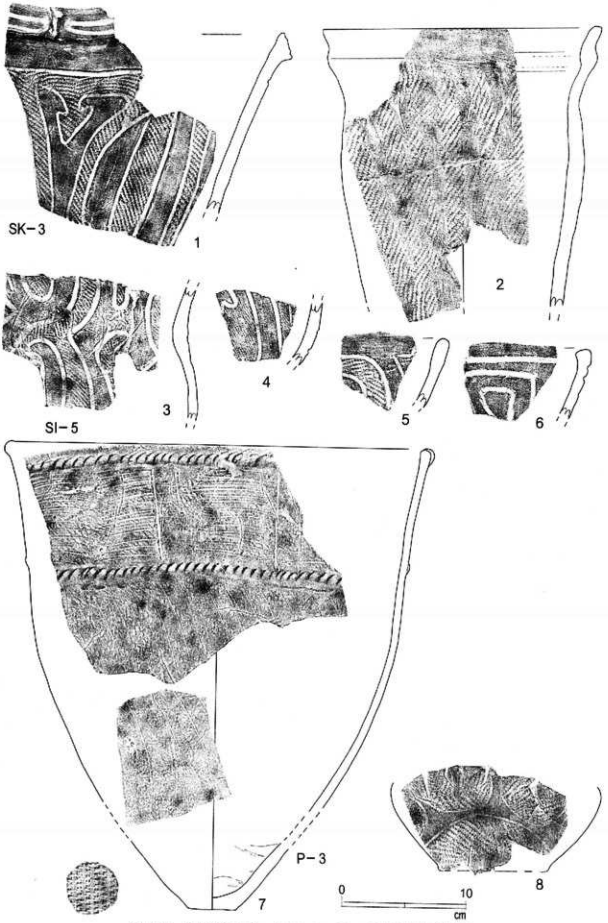
SI-7

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	にぶい赤褐色	焼土粒子少量	弱い	弱い
2	赤褐色	焼土粒子多量	弱い	弱い

SI-9

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム・ブロック少量、粒子極少量	弱い	弱い
2	暗褐色	ローム粒、粒子やや多量	強い	強い

第４図　第1･5･9･10号住居跡、ＦＰ－1実測図



第５図　第5号住居跡、ＳＫ−3、Ｐ−３出土遺物実測図

在していた。

炉は、中央西寄りに位置し検出され径８０ｃｍ程の円形状、柱穴は検出出来なかった

遺物は、加曽利ＥⅢ式から称名寺式Ｉ式が出土している。いずれも破片で図示する程のものは無かった。時期は、遺物から後期初頭が推察される。

本遺跡では、住居跡は非常に少なく、又複雑に掘りこまれ年代の特定出来たのは１軒のみで総数４軒である。いずれも遺存状態が悪く、又道路部分と言う限定されたエリアの為すべて全掘出来なかった。その結果全容を把握で来なかった。縄文時代の住居跡３、平安時代の住居跡１軒である。

その他炉が１基検出されている。径５０ｃｍで円形、深さ１０ｃｍで半円状掘り込みである。火床部は中央で径２５ｃｍの円形。土層は、１層は淡い赤褐色、２層もやや赤い赤褐色で焼土粒子を含む。粘性、締まりは弱い。住居跡に伴う屋外炉跡と推察される。

２、土　坑

◎はじめに　本遺跡では、フラスコ状、袋状、円形状、円筒状の４つの形態の土坑が検出された。その他、中世の土坑墓等調査時点の番号順に遺構の概略を後述し、粘土張り土坑のみ別扱いとし、番号順に位置、プラン、覆土、遺物の順に述べ位置関係から北、北中央、南中央、南とブロック別に分けた。

３号土坑　（第６図）

本遺構は、調査区の中央部西側に位置し検出された。ほぼ円形状で径１．６ｍ深さは６０ｃｍ前後で中央部に１．５ｍ程の長円形のピットが掘り込まれている。壁面はやや傾斜をもつが直立的、北側壁面に添って径１０～２０ｃｍ、深さ２０ｃｍ前後の小ピットが６ケ所見られ底面は、平坦でやや締まりをもつ。中央部のピットは掘立遺構の可能性が高い。

遺物は、１～２４が主なもので、底面近くから隆起線文をもち口縁部が弱いキャリパー状である２～５が本遺構の時期と思われる。その他安行式の紐線文土器、粗製土器やⅢａの胴部破片が小量出土している。土器片錘は５点程出土しているが平均２０㌘前後で軽い。

１０は、磨消された鉢状、１１は、口縁部下に円形の孔が見られる。

円形状プランの典型的土坑である。

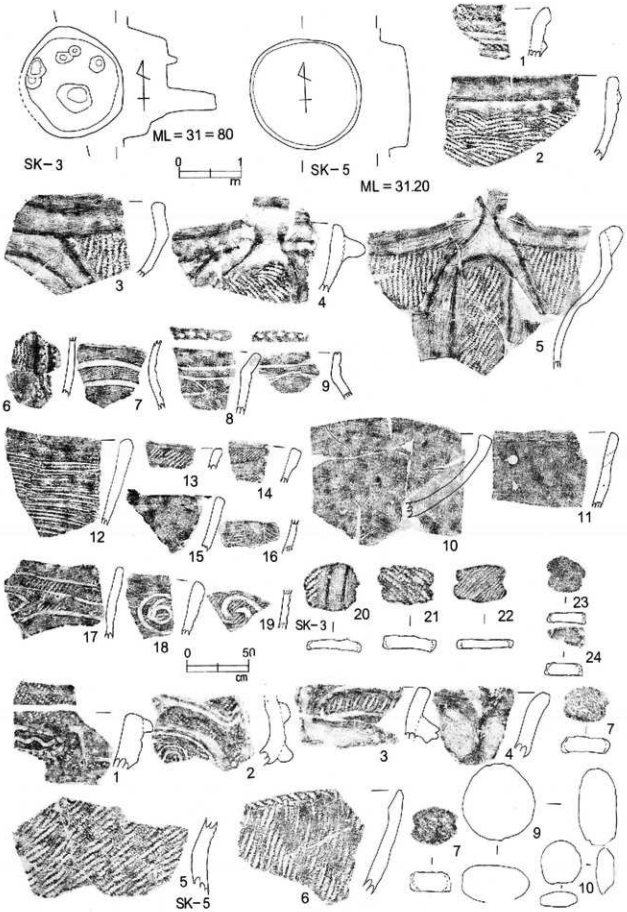
５号土坑　（第６図）

本遺構は、北側の貝塚近くに検出された径１．８ｍ程の円形プランを呈する。深さは３０ｃｍ前後で底面は、中央がやや低く締まりはややある。底面には、一切掘り込みは無くきわめて平面的な遺構である。壁面は垂直に近く立ちあがり北側は、地山が北側に傾斜している為上端は北側が低い。覆土は、レンズ状の自然堆積であった。

遺物は、第５図下二段で縄文時代中期前半の中峠式口縁部の１、胴部の２が見られ３は加曽利Ｅ１式の古手６は口唇部裏がカットされているが前述の遺物に伴う粗製土器と推察される。７は土器片錘でやはり小型である。８、９はすり石で９は、小型でいずれも安山岩製。

４号土坑　（第７図）

本遺構は、調査区北側中央部から検出され、径２．２ｍ程の円形プランを呈する。東側で６号土坑を掘り込み切り合い、新旧関係にある。底面は、弱く半円状に掘り込み袋状形態を呈し最大



第６図　ＳＫ−３、５号遺構と出土遺物実測図

２．５ｍを測る。深さは、５０ｃｍ程で平坦やや締まりをもつ。東側には小ピットが１ケ所見られ、斜めに深さ３０ｃｍ程外側に掘り込む。

覆土は黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色等の５層に分けられた。いずれも粘性、締りはややある。覆土からは人為的な埋積状態と推察出来る。

遺物は、前期関山式と諸磯式の口縁部破片が４片程検出された。その他は中期前半の中峠式４、５、６の破片と口縁部キャリパー形態の加曾利Ｅ式７～１２が見られ底面１２は典型的な円筒形の形態。そのほかやや小型の土器片錘１３～１６が出土している。

遺物から本遺構の時期は中期中葉である。形態は上端が落ちた袋状形態の土坑と推定する。

６号土坑　（第７図）

本遺構は、西側の一部を４号土坑に掘りこまれ３分１を欠失する。上端で径２．２ｍ、底面で２ｍであるが遺存部から本来は上端の小さいフラスコ状に近い土坑と推定される。底面は、平坦で南側に小ピットが認められほぼ平坦に推移する。締まりはややある。

覆土は、黒褐色、明褐色等の３層で、粘性はややある。層序からは自然埋積が推察される。

遺物は、７図下段２列で１～５は口縁部キャリパー状形態で渦文、（の）の字状文、紐線文に別れ３は、口縁部に磨消部をもつやや新しい粗製土器。７は、前者に伴う異系統の土器。８は直線と弱く曲線的な沈線を垂下している胴部破片。９は、半磨製石斧で基部を欠失する緑泥岩製。

遺物、切り合い、フラスコ状形態から４号土坑に先行する遺構である。

８号土坑　（第８図）

本遺構は、調査区北側のグループから検出された。切り合い関係は無く単独。掘り込みは南北１．６ｃｍ、東西１．４ｃｍのやや長円状形態のプランをもち深さは４０ｃｍとやや浅い。底面径も１．４ｃｍ、１．１ｃｍで壁面は傾斜気味に立ち上がる。底面は、平坦に移行しピットは確認出来ない。締まりはややある。

覆土は、５層に分けられ上部は黒褐色、中程は暗褐色層、下位は明褐色とレンズ状の自然埋積が考えられる層序を示す。粘性、締まりはややあり５層のみ強い。

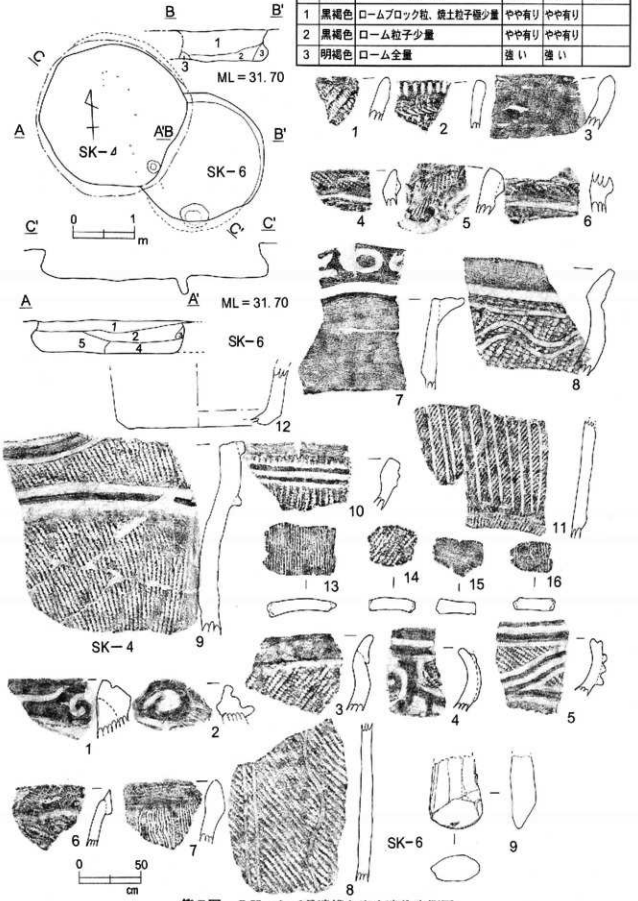
遺物は、特別に図示出来る遺物はない。総数２２片と少なく底面近くから前期後半の浮島式が２片出土している。土器は、加曾利Ｅ式が１、後期称名寺式が２、堀ノ内式が２、加曾利Ｂ式が１５片で時期は特定出来ないが前期後半の浮島式の時期の可能性もある。

９号土坑　（第８図）

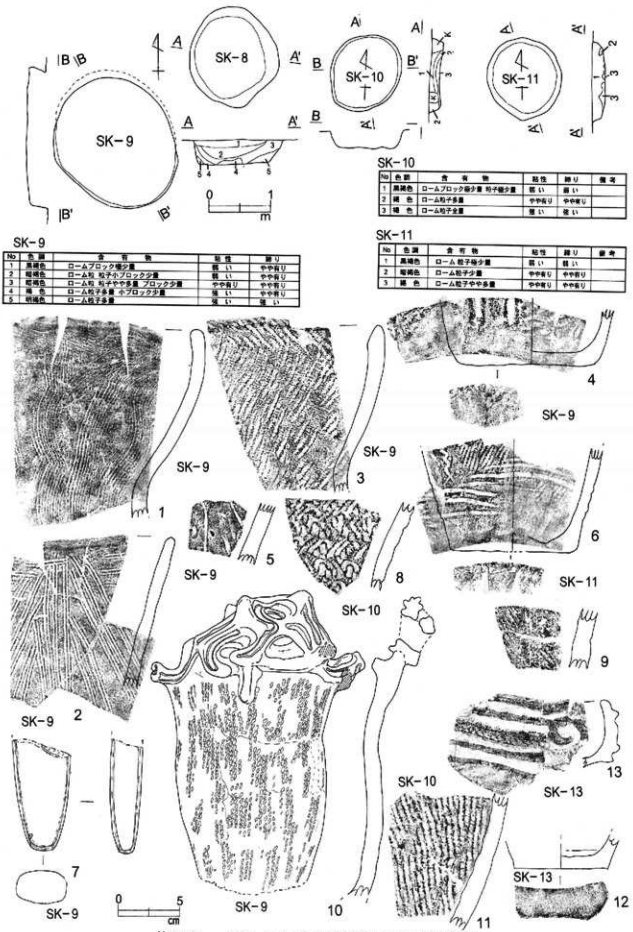
本遺構は、調査区の北側に位置して検出され切り合い関係はなく単独である。掘り込みは、東西１．９ｍ、南北２ｍ程でやや崩れた円形状プラン。掘り込みは３０ｃｍ前後で壁面は内傾部分が見られ、本来は若干内傾状形態と推定される。覆土は３層、レンズ状の自然埋積であった。底面はほぼ平坦で締まりをもつ。

遺物は、加曾利Ｅ式が大半で１０は底面から出土した。加曾利Ｅ式Ｉ式の小型の深鉢で胴部は単節の縄、口縁部は立体的な山形の吊り手突起、隆線を配し火炎土器状形態、１は櫛状工具による９本単位の曲線的沈線が配され口縁部はややキャリパー状プラン加曾利Ｅ式平行の異系統の土器。３は、中峠式？口縁部と胴部で縄を別方向に施文、口唇部内側はカット状形態。４は、加曾利Ｅ式の円筒形底面。５は称名寺式の口縁部と胴部で２は、口縁部に磨消部をもち胴部は４本単位の沈線を肋骨状に施文する堀ノ内式。５は沈線間に米粒状の刺突を施す称名寺式土器。その他

No.	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	黒褐色	ロームブロック粒、焼土粒子極少量	やや有り	やや有り	
2	黒褐色	ローム粒子少量	やや有り	やや有り	
3	明褐色	ローム全量	強い	強い	



第７図　ＳＫ－4、6号遺構と出土遺物実測図



SK-9

No	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ロームブロック微少量	粘い	やや有り
2	暗褐色	ローム粒 粒子やブロックク少量	粘い	やや有り
3	暗褐色	ローム粒 粒子やや多量 ブロックク少量	やや有り	やや有り
4	褐 色	ローム粒子多量 ※ブロックク少量	強い	やや有り
5	明褐色	ローム粒子多量	強 い	強 い

SK-10

No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	黒褐色	ロームブロック微少量 粒子微少量	粘 い	粘 い	
2	褐 色	ローム粒子多量	やや有り	やや有り	
3	褐 色	ローム粒子全量	強 い	強 い	

SK-11

No	色調	含有物	粘性	締り	備考
1	黒褐色	ローム粒子微少量	粘 い	粘 い	
2	暗褐色	ローム粒子少量	やや有り	やや有り	
3	褐 色	ローム粒子やや多量	やや有り	やや有り	

第８図　ＳＫ－8、9、10、11号遺構と出土遺物実測図

磨製石斧７があり欠失する。緑泥片岩製。

遺構形態、底面からの出土遺物の大半は加曽利Ｅ式である事から本遺構の時期は、中期後半加曽利ＥＩ式と考える。遺物は大半が壁面に並列して出土している。

１０号土坑　（第８図）

本遺構は、調査区北側やや西寄りに位置し検出された。切り合い関係はなく単独で検出された。掘り込みは径１．２ｍ程のやや不整形な円形ランを呈する。壁面は、やや傾斜をもつ。深さは３０ｃｍ前後で底面は若干凹凸をもつ遺構である。

覆土は、中央部から投げ込み状層序を示し３層に分けられた。上部１層は黒褐色、２、３は褐色でローム粒子を多量に含む。２、３層は締まり、粘性はやや有り強い。

遺物は、少なくいずれも細片で加曽利Ｅ式１２片が出土している。遺物、プランからは縄文中期後半が推察される。その他８の関山式の細片が出土している。

１１号土坑　（第８図）

本遺構は、東側で１９号土坑に大半を堀り込まれ欠失する。掘り込みは径１．２ｍ程の不整形な円形プランを呈する。壁面は、なだらかな傾斜をもち中央部が最も低くなる形態である。底面の締まりはやや弱い。

覆土は、１層が大半で自然埋積的で黒褐色、２、３層は投げ込み状で底面に張りつき凹凸をもち投げ込み的である。暗褐色、褐色。締まり、粘性はややある。

遺物は、少なくいずれも細片で図示したのは８図６の出土のみである。総数２２片の土器のうち１６片が加曽利ＥＩ式である。口縁部渦文、キャリパー形態である。
掘り込みはスリバチ状ながら中期後半の遺構と推定される。

１２号土坑　（第９図）

本遺構は、調査区北側に位置し西側の畑に半分程存在すると推察される。掘り込み径約１．９ｍ程でやや長円形プランと推察される。南側にピット１７が堀り込まれ欠失する。壁面は、緩やかな立ち上がりで深さは３０ｃｍ前後でやや南側が深い。底面は弱い凹凸があるが締まりは良い。

覆土の１、２層は、ピットの土層で３層、４層は褐色、５層は明褐色であり締まり、粘性はやや強い。層序から自然埋積と理解される。

遺物は、阿玉台式、加曽利Ｅ式、称名寺式等が見られ特に加曽利ＩＥ式が卓越している。１、２、３が大部分で形態は深鉢、口縁部キャリパー、隆帯、渦文等Ｉ式の特徴が見られる。その他の遺物も本類が大部分を占めわずかに堀ノ内の遺物がみられた。

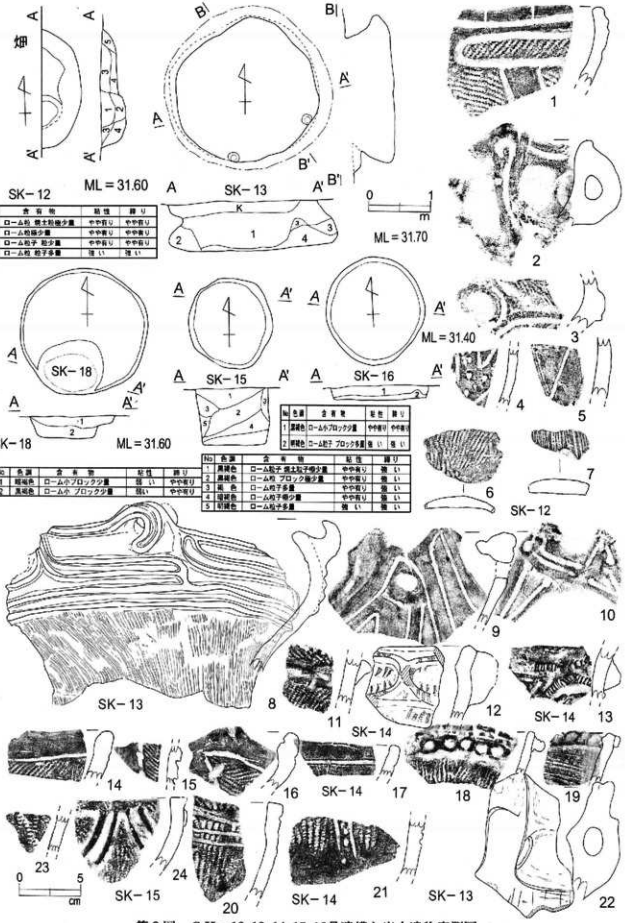
遺構形態、遺物から加曽利ＩＥ式の遺構で円形状プランと推察する。

１３号土坑　（第９図）

本遺構は、調査区北側に位置しやや西に寄った位置に検出された。西側で薩摩芋の貯蔵穴に掘られ一部欠失するがほぼ旧状を保つと推察される。東西南北２．２ｍ、底面が２．７ｍで底面は平坦に移行しフラスコ状形態底面の締りは良い。小ピットが南側に位置し、上端は５０ｃｍ前後狭くなる可能性が推察出来る。掘り込みは７０ｃｍと深くやや大型。

覆土は、４層に分類され上部は撹乱、１層が大半を占め暗褐色、２層は褐色、３層は明褐色で上部の落下の可能性が強い。粘性、締まりはややある。

遺物は、８、９、１０、１１、１３を図示した。大半は加曽利ＥＩ式、Ⅱ、Ⅲ式で口縁部キャ



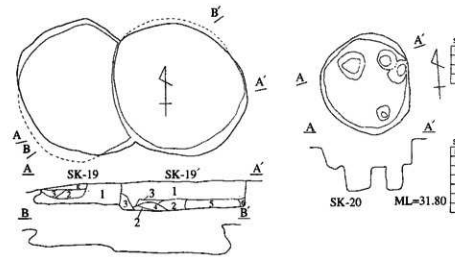
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒 焼土粒微少量	やや有り	やや有り
2	暗褐色	ローム粒微少量	やや有り	やや有り
3	褐 色	ローム粒子 粒少量	やや有り	やや有り
4	褐 色	ローム粒 粒子多量	強 い	強 い

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム小ブロック少量	強 い	やや有り
2	黒褐色	ローム小 ブロック少量	強い	やや有り

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒子 焼土粒子微少量	やや有り	強 い
2	黒褐色	ローム粒 ブロック微少量	やや有り	強 い
3	褐 色	ローム粒子多量	やや有り	強 い
4	暗褐色	ローム粒子微少量	やや有り	強 い
5	明褐色	ローム粒子多量	強 い	強 い

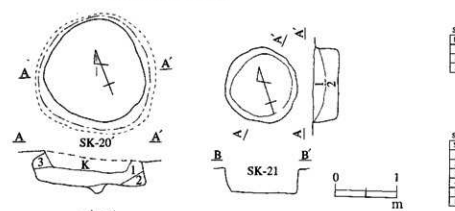
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒子微少量	やや有り	強 い
2	明褐色	ローム粒子 ブロック多量	強 い	強 い

第９図　ＳＫ－12、13、14、15、16号遺構と出土遺物実測図



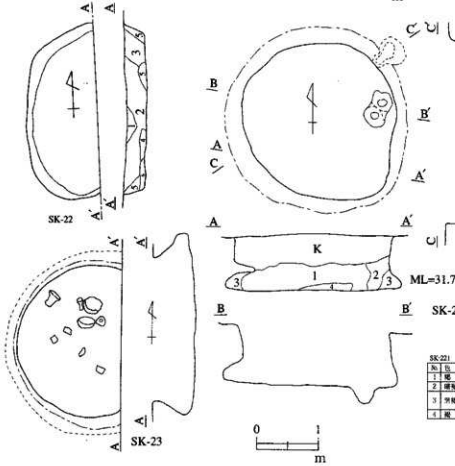
SK-19				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム ブロック多量	やや有り	強い
2	褐色	ローム ブロック・ローム粒子やや多量	やや有り	強い
3	明褐色	ローム粒子少量	やや有り	強い

SK-19′				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒子極少量焼土粒子極少量	弱い	強い
2	暗褐色	ローム粒子極少量	*	*
3	赤 色	ローム粒子多量	*	*
4	褐 色	ローム粒子少量	*	*
5	明褐色	ローム粒子少量、ブロック少量	やや有り	やや有り
6	黒褐色	ローム粒子極少量	強い	弱い



SK-20				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒、小ブロック多量	弱い	やや有り
2	黒 色	ローム粒子極少量	弱い	弱い
3	黒 色	ローム ブロック少量	強い	弱い

SK-32				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム粒小ブロック少量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒小ブロック炭化粒少量	やや有り	やや有り
3	茶褐色	ローム ブロック微少量	弱い	弱い
4	明褐色	炭化粒子極少量 ローム粒子少量	強い	強い
5	褐 色	ローム粒子少量 ブロック少量	やや有り	やや有り
6	明褐色	ローム粒子少量	強い	強い



SK-221				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	褐 色	ローム粒小ブロック多量	やや有り	強い
2	暗褐色	ローム粒、粒子多量	やや有り	やや有り
3	茶褐色	ローム粒、粒子小ブロック少量 焼土粒子微少量、炭化ヘラ状炭化粒子微少量、炭多量	強い	強い
4	褐 色	ローム粒小、焼土粒子微少量	やや強い	やや強い

第１０図　ＳＫ－19、19′、20′、20、２１、22、23、２４号土坑遺物実測図

リバーで隆帯による区画、渦文等によるモチーフをもつ。９、１０は山形部分の磨消部に沈線に遺構、掘り込みプラン、遺物から加曾利ＥⅠ式の時期が考えられる。

１４号土坑　（第９図）

本遺構は、調査区北側の西寄りに位置し検出された。南側にＳＫ-１８が掘こまれ欠失する。ほぼ円形で径２ｍの正円形で掘り込みは１５ｃｍ程の浅いもので壁面は弱くなだらかに立ち上がる。底面の締りは悪く凹凸がみられた。

覆土は、１層で暗褐色ローム小ブロック、粒子を含み粘性は弱く、締まりはややある。遺物は、総数９０片と少なくいずれも細片であった。中でも加曾利Ｅ式が約５０％を占める。その他阿玉台式、称名寺式、加曾利Ｂ式等が見られた。図示した１２、１３は古手で１４はⅣ式、１５、１６、１７、２１は称名寺Ⅰ式の口縁部で沈線を用い、口縁部は、幅の狭い磨消部が見られる。２０は堀ノ内式で口唇部迄単節の縄を施文。１８、１９は加曾利Ｂ式で口縁部に紐線が添付され指頭による押圧が加えられている。

以上の遺構、遺物、円形のプランから中期後半加曾利ＥⅣ式前後の時期の遺構と推察される。

１５号土坑　（第９図）

本遺構は、調査区の北側貝塚に最も近い位置に検出された。切り合いは無く単独で上部に浅い掘り込みが見られた。掘り込みは、径１．３５ｃｍ程のほぼ正円形に近いプランをもち深さ９０ｃｍ。円筒状形態で壁面は垂直、底面はほぼ平坦に移行しピット等は無い締まりはややある。

覆土は、５層に分けられ１層黒褐色で焼土粒子が見られる。最下層の５層は明褐色でローム粒子が多量で歯の一部が見られた。層序から人工的な埋積と推察される様相を示す。いずれも粘性、はややありまたは強い。遺物は少なく、図示した２３、２４でアナダラ属の波状貝殻文をもつ浮島式、２４は、堀ノ内式の深鉢口縁部。総体的には加曾利Ｅ式が３０片、堀ノ内式が５片、加曾利Ｂ式が１８片、安行式が２片と時期を特定出来る遺物は無い。アカニシ、オキシジミが各１点出土、他に歯（４号人骨参照）が見られた。しいて時期を推察すれば円形プランの掘り込み、井戸状形態等から後期の加曾利Ｂ式の時期が考えられ手捏状土器が出土。

１６号土坑　（第９図、１０図）

本遺構も貝塚に近い北側のゆるく傾斜する位置に検出された。切り合い関係は無く単独でほぼ正円形で径１．６５ｃｍ、掘り込みは２０ｃｍと浅く底面は平坦やや締まりをもつ。覆土は２層に分けられ黒褐色、明褐色。ともにロームブロックを含み粘性、締まりはやや有り強い。

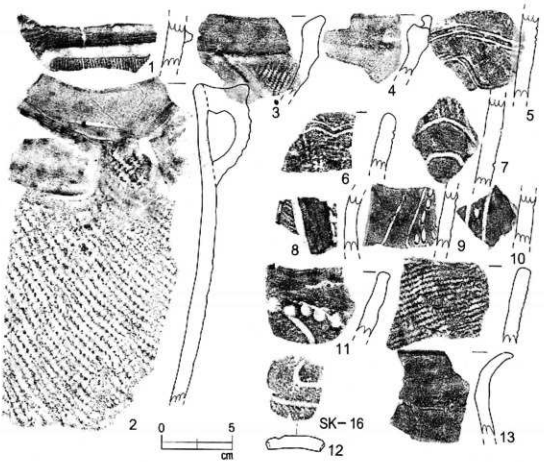
遺物は、阿玉台式から安行式まで総数４９片程出土している。時期は遺物の出土状態から特定は出来ないが全体的に後期の加曾利Ｂ式がやや多い。

１７号土坑

本遺構は、北側の一群の南よりに位置し西側の畑地と２０号土坑に大半を掘り込まれ、欠失しおり図示しなった。推定径１．５ｍ前後の円形状プランを呈すると思われる。深さは２０ｃｍ前後。覆土は、１層褐色で、粘性はややある。遺物は、総数２５片で加曾利Ⅰ、ⅡＥ式である。図示出来るものは無いがこれらから時期は中期後半の遺構と思われる。

１８号土坑　（第９図、１０図）

本遺構は、１７号遺構の東側に位置し１４号土坑に掘り込まれていた。径８０ｃｍ前後の長円形状形態で掘り込みは３５ｃｍとやや深い。覆土は、黒褐色の１層で、粘性は弱く自然埋積を示



第１１図　ＳＫ－16、18号出土遺物実測図

す。底面は平坦で締まりはややある。（ＳＫ１４の中）

遺物は、５０片程出土している。加曾利ＥⅢ式、称名寺式が大半で切り合い関係から加曾利ＥⅢ式前後の時期が推察され、遺構はピット状形態である。土師器カメ破片も出土している。

１９号土坑　（第１０図、１２図）

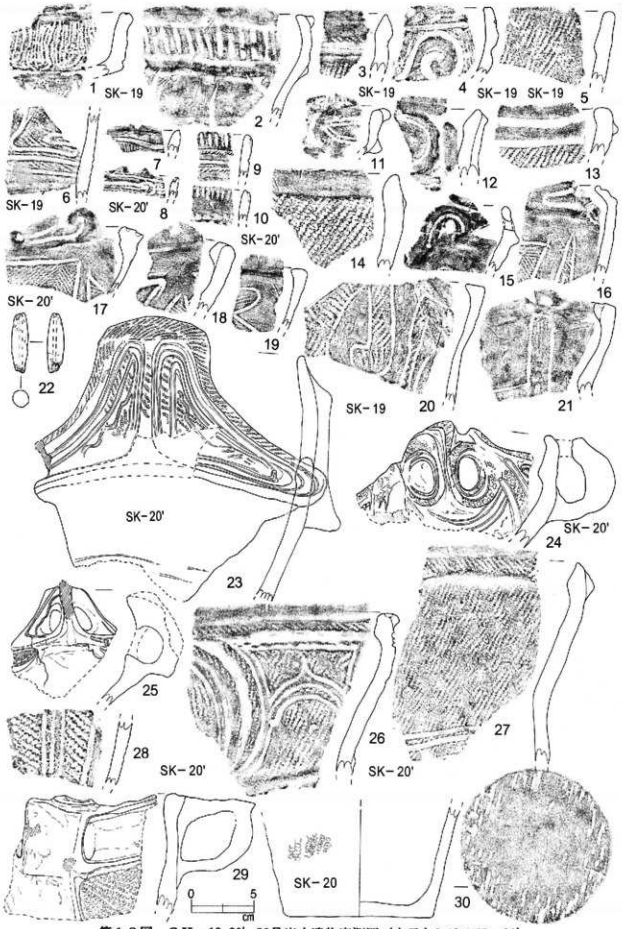
本遺構は、調査区北側の一群に位置して検出され、１１号土坑を掘り込み、１９′号に掘込まれ３分１を欠失している。掘り込みは径２ｍ程であるが本来フラスコ状のつぶれた遺構と推察される。南側の一部に掘り込みが遺存している。深さは３０ｃｍ程で浅くやや変形した形態。底面はほぼ平坦に移行し締まりをもつ。

覆土は、３層に分けら投げ込み的層序で１９′号土坑の壁面立ち上がりとして使用された可能性がある。遺物は、加曾利ＥⅢ式の細片が９０片程、後期前半の称名寺式が小量見られた。１１図６、２０。掘り込みプラン切り合い関係から中期後半の遺構と推察される。

１９′号土坑　（第１０図、１２図）

本遺構は、１９号土坑の東側の一部を掘り込み検出された。径２ｍ前後でやや袋状形態に近いの底面をもち平坦に移行し締まりをもつ。底面には、ピット等は無い。深さは４０ｃｍ前後。本遺構はフラスコより袋状に近い。底面の内湾部がやや上にあがる。

覆土は６層に分けられ１層黒褐色が大半、２～６は底面に張りつきブロック状。いずれも粘性、締まりは弱い。投げ込み的層序。遺物は、少なく加曾利ＥⅡ式が３０片程見られた。図示できる程のものは無い。時期は　形態、掘り込み、遺物から中期後半の遺構と推察される。



第１２図　ＳＫ－19、20'、20号出土遺物実測図（表示なしはＳＫ－20）

２０′号土坑　（第１０図、１２図）

本遺構は、調査区北の一群の中、西側に位置し検出された。切り合いは無く径１．６ｍ、深さ５０ｃｍ程のほぼ円形プラン。底面には小ピットが掘こまれているほかは平坦で締まりをもつ、壁面中央が膨らむ袋状形態。

覆土は、自然堆積で３層に分けられ黒褐色、黒色でローム粒子、ブロックを小量含む。粘性、締りは弱い。上部は撹乱されている。

遺物は、諸磯、浮島式７～１０が見られる。２３、２６、２７は中峠式２５、２９は加曽利Ｅ式のＩａの段階、１４はⅣ式で口縁部磨消で微隆起をもつ。その他阿玉台式や、１５、１６、２１の称名寺式、１１、１２、１３、２８のⅡ式が見られる。中峠式、加曽利ＥＩ式が底面から出土している。加曽利Ｂ式、安行式も１４０片程出土している

時期は遺物、掘り込みプランから中峠式の遺構と推定される。

２０号土坑　（第１０図、１２図）

本遺構は、調査区の北中の一群中から検出され切り合いは無く単独で検出された。径１．６ｍ程で正円形。掘り込みは、４０ｃｍと浅く底面は平坦で強く、壁面は直立気に立ち上がる。底面には、４ケ所のピット見られ西側のものは掘立遺構の柱穴の可能性が強い。径４０ｃｍ程で底面から更に４０ｃｍほど掘込む。

覆土は、４層で黒褐色、暗褐色、褐色等でレンズ状の自然堆積で粘性、締まりはややある。遺物は、２４、３０で加曽利ＥＩａ式で２４は突起部に左右２ケ所の円形の孔がある。３０は、底面で器肉は薄く僅かに単節の縄が見える。底は竹の編目が僅かに残る。

時期は遺構プラン、遺物から加曽利ＥＩ式期の遺構と推察される。

２１号土坑　（第１０図、１３図）

本遺構は、調査区の北側の一群中から検出され、東側の一部が１３号土坑と切り合い関係にある。径１．２ｍ程の円形状プランで掘り込みは４０ｃｍと浅く、壁面は直立気味で底面は平坦、締まりはややある。

覆土は、２層でレンズ状の自然堆積、色調は暗褐色、褐色で弱く薩摩芋の貯蔵穴状で遺物は、１３図１、２で口縁部はキャリパー、磨消部をもつ１と土器片錘の２がある。他に称名寺式６、加曽利Ｂ式が１０片出土している。

時期は遺物、遺構プランから後期前半の称名寺式が推察される。

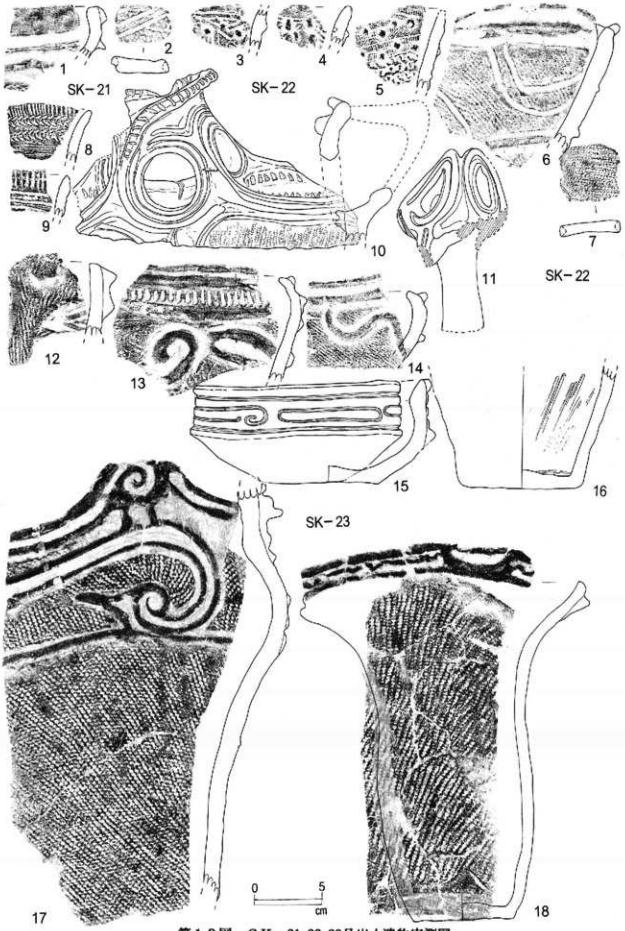
２２号土坑　（第１０図、１３図）

本遺構は、調査区の北側の一群中から検出され約半分をエリア外に置く。径２．７ｍ程の円形状プランと推定される。掘り込みは３０ｃｍと浅く、壁面は７０′前後の傾斜をもつ。底面はほぼ平坦、締まりは良く住居跡の感じをもつ。

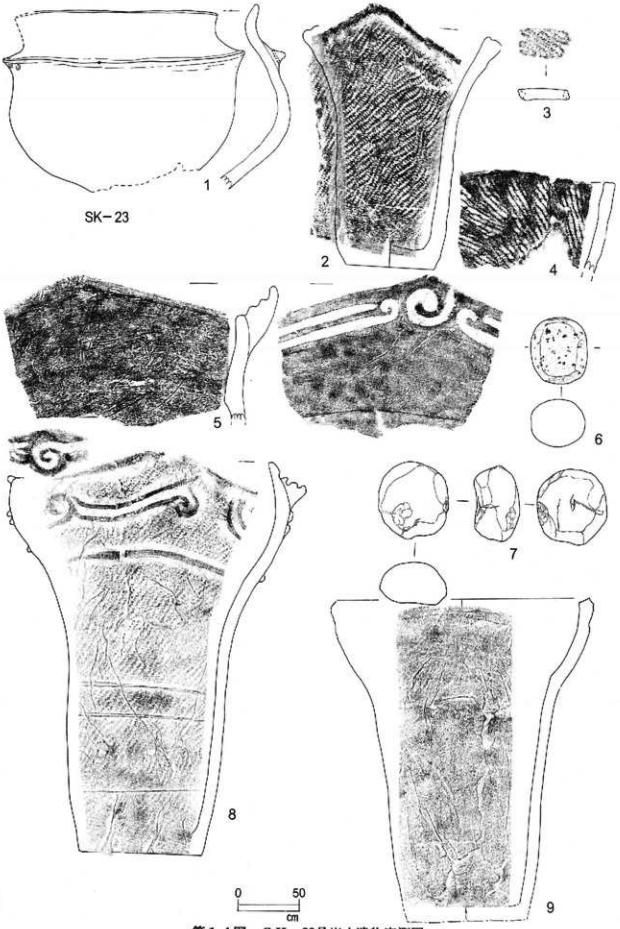
覆土は、６層に分けられ各層ともブロック化し投げ込み的で２、３、４は黒褐色層、２層、４層は炭化粒子を含む。全体に締まり、粘性は弱い。

遺物は、前期の関山式３、４、５ が数点出土している。相対的に加曽利ＥⅡ式が５０片、 称名寺式が５０、堀ノ内式が７０片、阿玉台式、中峠式が小量見られる。

出土遺物、遺構プランから称名寺式前後の時期が推察される。その他、製塩土器が３５片程出土している。遺構の中では多い部類に入る。



第１３図　ＳＫ−21、22、23号出土遺物実測図



第１４図　ＳＫ－23号出土遺物実測図

２３号土坑　（第１０図、１３図、１４図、３５図）

本遺構は、調査区の北側の一群中から検出され２２号土坑の南側に位置し、同様に約半分程がエリア外にある。径２．４ｍ程のプランと推察されフラスコ状形態をもつ。底面は、平坦で一部フラスコ部分でやや高く直線的に上端に移行する。締まりは良く住居跡状の状態、掘り込みは６０ｃｍと深く遺存状態も良い。

覆土は、５層に分けられ黒褐色、暗褐色、ロームブロック、粒子等の混入の差でレンズ状の自然埋積。締まり、粘性はやや強い。

遺物は、底面からかなりまとまって出土した。いずれも横向き、斜めの状態で検出された。１３図１０は加曾利Ｉａ式のやや古手１１、１２は中峠式の吊り手と口縁部、１８も口縁部外反し口唇部に波状の粘土紐を貼付、鉢型の１５は渦文を沈線で施文、その他は口縁部キャリパー状形態で隆線による渦文をもつ１７は大木式、１４図１は鍔もつ土器で鍔部分には穿孔が見られ使用状態は不明、５は大皿に近い形態かかなり雲母片を含む。８も同様、大木式９は器面は磨消され粗製の深鉢。２は小型の深鉢で口縁部は山形で口唇部に沈線が見られる。後期の土器。遺物の時期は遺構プラン、遺物から本遺構は中期中葉の遺構か。

２４号土坑　（第１０図、１５図、１６図）

本遺構は、調査区北側中央の一群中から検出され本ブロックは、全体に西側に寄って群衆する遺構群である。径２．５ｍを測るが土層からはかなり小さいプランが推察される。掘り込みは９０ｃｍと深く住居跡状。底面は締まりは良い。つぶれたフラスコ状プラン。

覆土は、４層に分けられ褐色、暗褐色、黒褐色、褐色で投げ込み的層序を示すが１層は自然埋積か？。粘性は強い。

遺物は、１５図の１～８までで加曾利ＥＩａ式でかなりの割合を占める。細片ながら１００片前後、阿玉台式が１０片、中峠式が５片程で後期の称名寺式、堀ノ内式、加曾利Ｂ式、安行式等も出土している。その他製塩土器が１０片程見られた。いずれも後期の土器群は投げ込みによるものと考えられる。

時期は遺構プラン、遺物から加曾利ＥＩ式の時期が推察される。

２５号土坑　（第１５図、１７図）

本遺構は、北側中央の一群中から検出されＳＫ－３１に掘込まれ一部欠失している。径１．４ｍ前後の円形プランと推察され、掘り込みは３０ｃｍ程で底面の締りは有り、壁面はやや傾斜をもつ。一部は隣地の畑に伸びる。

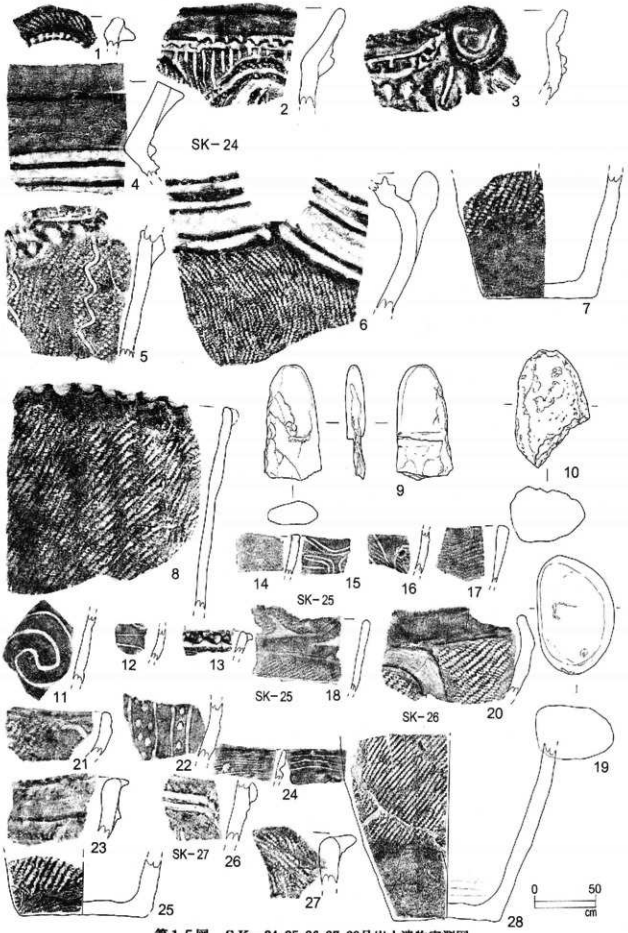
覆土は、４層で黒褐色、暗褐色、褐色等で、粘性はやや強い。

遺物は、阿玉台式、加曾利Ｅ式が４０片程出土している。図示した１４～１８は後期から晩期の遺物で３１号の遺物が混入している。

時期は遺構プラン、遺物から加曾利ⅡＥ式の前後の土坑と推察される。

２６号土坑　（第１５図、１７図）

本遺構は、北側中央の一群中から検出され一部５号住居跡に上部を掘込まれ検出された。径２．８ｍ程の円形プランを呈し底面は、袋状形態に近い掘り込みをもち、深さ７０ｃｍを測る。中央部と北西に円形のピットをもつ。覆土は５層に分けられ黒褐色、暗褐色、褐色等でロームブロック、粒子の混入差で粘性、締りは強い自然埋積状。１層は攪か。



第１５図　ＳＫ－24、25、26、27、28号出土遺物実測図

遺物は、少なく関山式、阿玉台式、加曽利E式、後期の称名寺、加曽利B、安行、晩期姥山等が出土している。時期は図示した加曽利EⅣ式前後と推察される。総数１００片。　時期は遺構プラン、遺物から中期末葉が推察される。

２７号土坑　（第１５図、１６図）

本遺構は、南側中央の一群中に位置し単独で検出され径２．２ｍ前後で掘り込みは４０ｃｍであるが確認面が表土下６０ｃｍでかなり深い遺構であった。底面の締りは良く平坦、西側、東側にピットが掘込まれている。底面近くでフラスコ状形態を示す。

覆土は、３層で褐色、暗褐色、褐色。層序から自然堆積と推察される。２層は炭化粒子を含む。粘性、締りは強い。

遺物は、少なく総数１００片ほどで、図示したのは加曽利E式の２６のみである。阿玉台式、中峠式、加曽利E式、称名寺式等が小量づつ出土している。特別時期を特定出来る遺物はない。

時期は遺物、遺構プランから加曽利E式の範疇か？。

２８号土坑　（第１５、１６図）

本遺構は、北側中央部の一群中から検出され不整形で大半を３０号土坑に掘り込まれておりプランは不明。感じからは入り口？とも思われる。深さは２０ｃｍ程で底面は凹凸があり立ち上がりは緩やか。締りは弱い。

覆土は褐色層、明褐色の２層に分けられた。いずれも自然堆積状で締りは弱い。

遺物は、２７、２８で中峠式の口縁部と胴下半部である。口縁部は粘土紐を貼付し縄を施文している。底面は安定した平底の形態で単節の縄が施文されている。

時期は、遺物からは中期前半の遺構か。

２９号土坑　（第１７図）

本遺構は、北側中央部の一群中に位置し検出され、径１ｍ程の円形状プランを呈し掘り込みは３０ｃｍと浅く壁面はなだらかで底面の締りは弱い。

覆土は、褐色層のみで投げ込み、人工的な埋積、ロームブロックを多量に含む。

遺物は内耳土器の吊り手部分が検出され、底面から人骨が出土している。人骨は遺存状態が悪く性別、年令は不明。鎌倉～室町期の遺構と推察される。（人骨を参照）

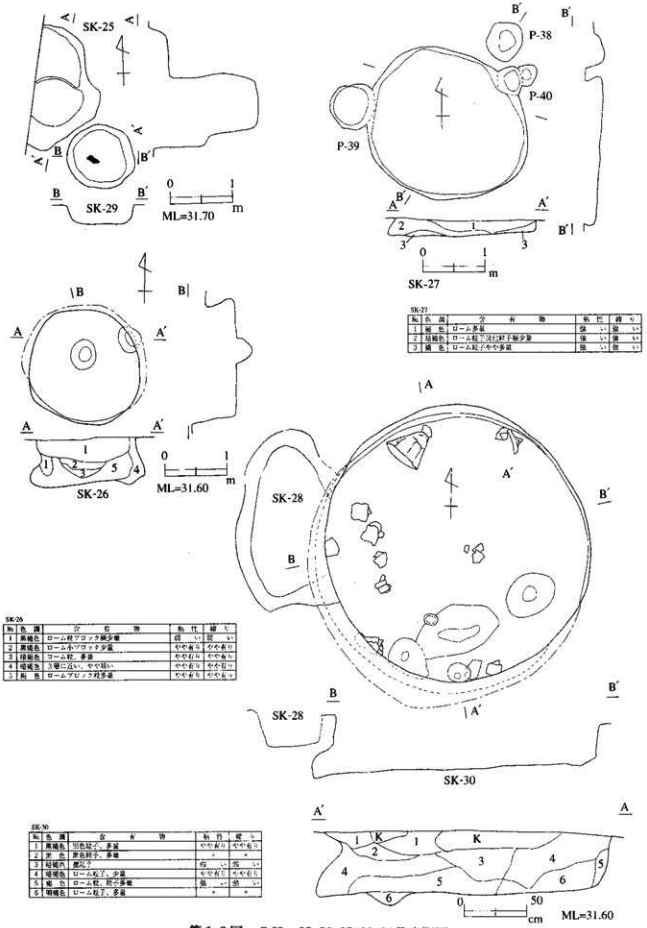
３０号土坑　（第１６図、１７図）

本遺構は、北側中央の一群中に位置し検出され径２．２ｍ程の円形状プランの遺構で典型的なフラスコ形態、底面が箱状で他は上部が崩落しているので現状と使用時のプランは差があると理解される。底面は平坦、締りは強い。底面には小ピットが２ケ所見られる。

覆土は６層で上部２層はレンズ状の自然堆積、３～６層は人工的な埋め込み的層序を示す。黒褐色、暗褐色、明褐色層で下層はロームブロックを含み粘性、締りは強い。

遺物は、底面から多量に検出されている。１～１３で加曽利ＥＩａ式の７、８、１１、１２がある。いずれも口縁部が波状部分に孔、吊り手が見られ複雑な形態で隆帯を用い変化に富んだ口縁部が見られる。その他加曽利Ｂ式、安行式等が見られる。底面出土土器の９割は中峠式であった。いずれも破片。

時期は遺構プラン、遺物から中期前半の遺構と推察される。



SK-27

No	色調	含有物	粘性	硬さ
1	褐色	ローム多量	強い	強い
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子極少量	強い	強い
3	黒色	ローム粒子やや多量	強い	強い

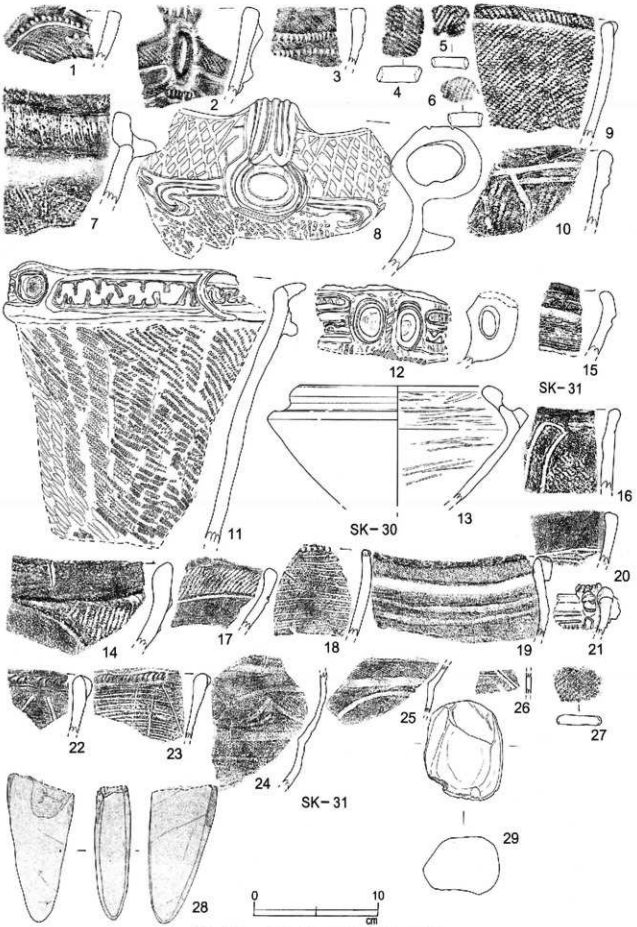
SK-26

No	色調	含有物	粘性	硬さ
1	黒褐色	ローム粒子ブロック極少量	強い	強い
2	黒褐色	ローム小ブロック少量	やや有り	やや有り
3	暗褐色	ローム粒、多量	やや有り	やや有り
4	暗褐色	3層に近い、やや硬い	やや有り	やや有り
5	褐色	ロームブロック粒多量	やや有り	やや有り

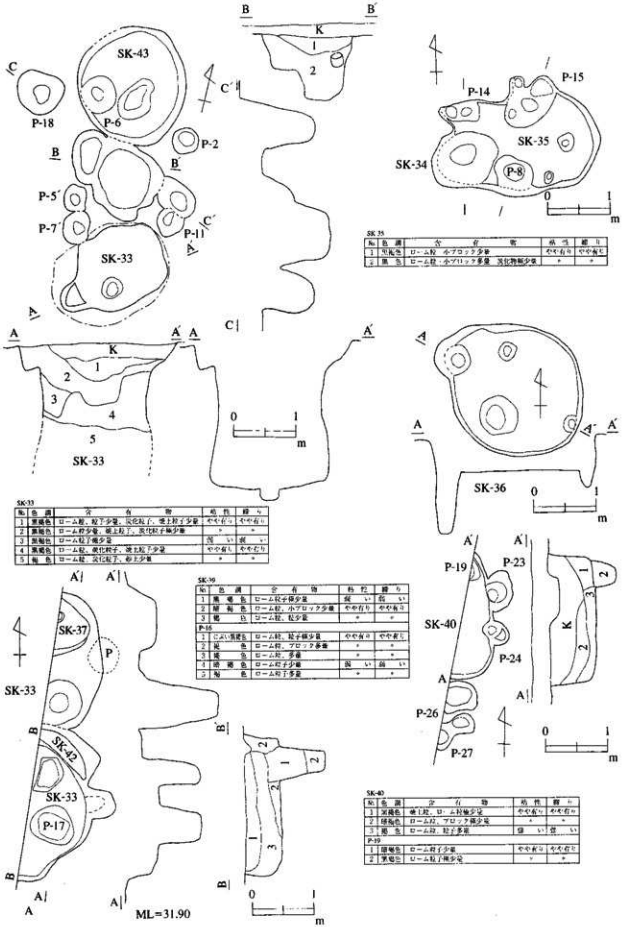
SK-30

No	色調	含有物	粘性	硬さ
1	黒褐色	焼土粒子、多量	やや有り	やや有り
2	灰色	黒色粒子、多量	+	+
3	暗褐色	焼土?	有り	強い
4	暗褐色	ローム粒子、少量	やや有り	やや有り
5	褐色	ローム粒、粒子多量	強い	強い
6	明褐色	ローム粒子、多量	+	+

第１６図　ＳＫ－25, 26, 27, 29, 30号実測図



第１７図　ＳＫ－30、31号出土遺物実測図



SK-35				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒・小ブロック少量	やや有り	やや有り
2	黒色	ローム粒・小ブロック多量　炭化物粒少量	+	+

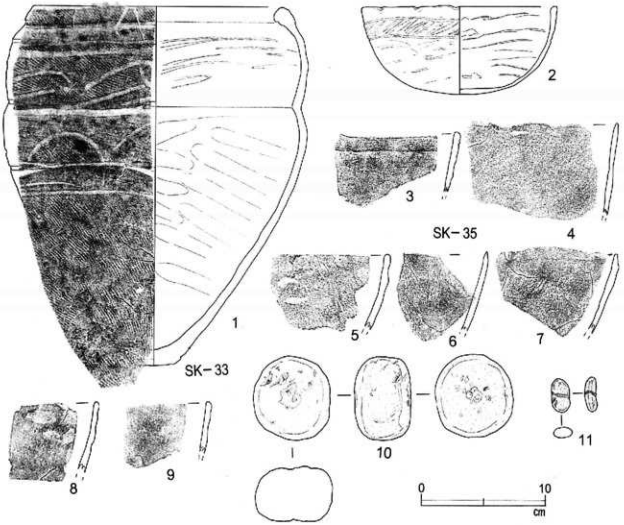
SK-33				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒、粒子少量、炭化粒子、焼土粒子少量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒少量、焼土粒子、炭化粒子極少量	+	+
3	黒褐色	ローム粒子極少量	強い	強い
4	黒褐色	ローム粒、炭化粒子、焼土粒子少量	やや有り	やや有り
5	褐色	ローム粒、炭化粒子、砂土少量	+	+

SK-39				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒や砂少量	強い	強い
2	暗褐色	ローム粒、小ブロック少量	やや有り	やや有り
3	褐色	ローム粒、粒少量	+	+
P-16				
1	にぶい黒褐色	ローム粒、粒子極少量	やや有り	やや有り
2	灰色	ローム粒、ブロック多量	+	+
3	褐色	ローム粒、多量	+	+
4	暗褐色	ローム粒子少量	強い	強い
5	褐色	ローム粒子多量	+	+

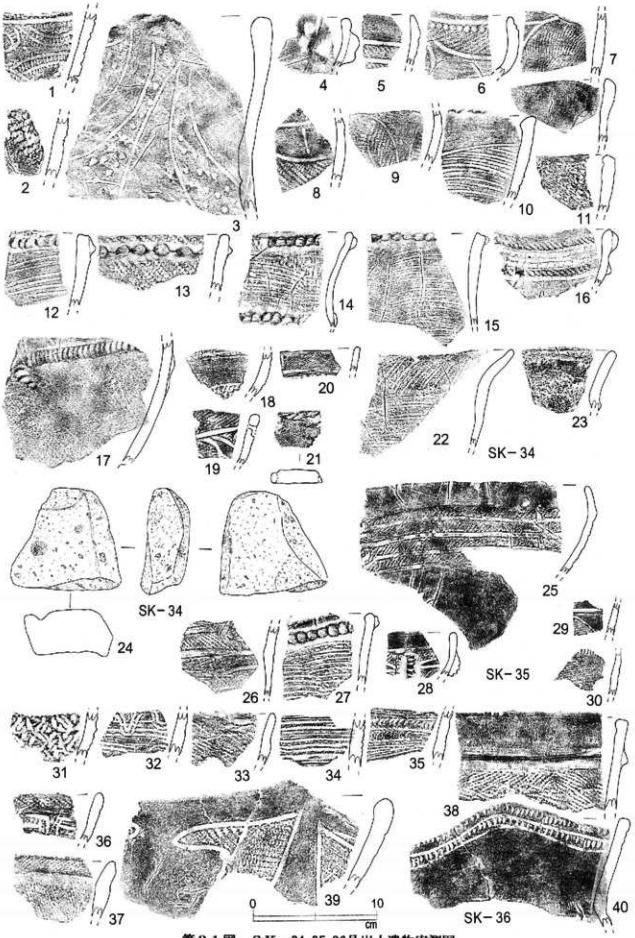
SK-40				
No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	礫1粒、ローム粒極少量	やや有り	やや有り
2	褐色	ローム粒、ブロック極少量	+	+
3	暗色	ローム粒、粒子多量	強い	強い
P-19				
1	暗褐色	ローム粒子少量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒子極少量	+	+

第１８図ＳＫ－29′、32、33、34、35、36、37、38、39、40、42、43号実測図

第１９図　ＳＫ－33号出土遺物実測図



第２０図　ＳＫ−33、35号出土遺物実測図



第２１図　ＳＫ－34、35、36号出土遺物実測図

３１号土坑　（第１７図、１８図）

本遺構は、北側中央部の一群中に位置し検出され一部をエリア外に置く、径１．２ｍ程の円形で掘り込みは１．７ｍと深く円筒状形態で壁面は垂直に近い。底面の締りは悪く砂質粘土層の上端で止めている。

覆土は、５層まで確認したが下位は狭く調査が出来ない為観察しながら調査を進めた。上部からいずれも投げ込み的でロームブロツクが各層に認められ、締りはやや弱い。

遺物は安行系統の土器で占められ、いずれも底面から出土している。姥山式の細密沈線をもつものも２片、微隆起の加曽利ＥⅣ式、加曽利Ｂ式精製、粗製、安行Ⅱ式等が見られ、又紐線文土器が見られる。その他磨製の石斧が出土している。半分程欠失している。

時期は遺構プラン、遺物から晩期前半の遺構と推定される。

３２号土坑　（第１９図）

本遺構は、北側中央部の一群中に位置し検出され東西には３基ずつのピット群がみられ、南北には３３、４３号土坑が位置する。径１．２ｍ程の円形状プランで掘り込みは１．１ｍ程で底面はやや丸みをもち締りは良い。壁面は開き気味に立ち上がる。

覆土は、２層で黒褐色、黒色、上部は撹乱層、ローム粒子、ブロックの混入の差で締まりはやや強い。層序はレンズ状の自然埋積状を示す。

遺物は、底面から加曽利Ｂ式、安行Ⅰ、Ⅱ式が１００片程出土している。晩期の遺物は少なく製塩土器が２５片、土師器坏が１片見られた。

時期は遺構プラン、遺物から後期の加曽利Ｂ式の遺構と推察される。

３３号土坑　（第１８図、１９図、２０図）

本遺構は、北側中央部の一群中に位置し３２号土坑の南側に検出された。長径１．５ｃｍ、短径１．２ｍの不整形状形態で底面はやや広くなり中央部に小ピットが掘り込まれていた。形態的には円筒状プラン。

覆土は５層まで調査したが、下部は調査不可能のため観察に留め完掘に努めた。黒褐色、褐色等でローム粒子、ブロック、炭化粒子、砂質粘土等の混入が有り、下部は投げ込み状層序を示す。

遺物は、底面、覆土から阿玉台式、加曽利Ｅ式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、曽谷式、安行式、安行Ⅲａ式、前浦式、姥山式等が出土している。主体は後期末から晩期前半で加曽利Ｂ式、安行Ⅰ、Ⅱ式が見られ４００片程出土している。２０図下段５列は晩期安行Ⅲａ式、Ⅲｃ式細密沈線の姥山式等がかなり検出されている。いずれも投げ込み的土層から出土時期は遺構プラン、遺物から晩期前半の遺構と推察される。２２図１がほぼ完形で上部から出土。

３４号土坑　（第１８図、２１図）

本遺構は、北側中央部の一群中に位置し３５号土坑を掘り込み検出された。径９０ｃｍで掘り込みは深さ４０ｃｍで壁面はなだらかな面をもつ。底面は平坦、締りは弱い。

覆土は３層に分けられレンズ状の自然埋積状態で黒褐色、暗褐色、明褐色でローム粒、粒子の混入の差である。粘性、締りはやや有る。

遺物は、小型の遺構ながらかなり出土している。芽山、関山、阿玉台、加曽利Ｅ、称名寺、堀ノ内、加曽利Ｂ、安行の中期、後期の遺物が見られ主体を占めるものは２００片程検出された加曽利Ｂ式である。図示した１は関山、２は芽山、３、４は称名寺、７、９曽谷式で胴部が弱く括

れる。その他加曾利B式、安行式の粗製、精製土器が出土している　時期は遺構プラン、遺物から後期中葉の加曾利B式が推察される。

３５号土坑　（第１８図、２１図）

本遺構は、北側中央の一群中の東側に位置し検出された。東西南北に土坑、ピットが掘込まれ遺存状態は悪い。長径２・３ｍ、短径１・５ｍ程の長円形状プラン。掘り込みは直立気味、深さは３５ｃｍを測る。底面は平坦で締りは良い。

覆土は、３層で黒褐色、暗褐色、褐色でレンズ状の自然埋積、一部焼土粒子が混入されていたが相対的に締まり、粘性はややある。

遺物は、総数５０片程と少なく２５から３０が図示したもので加曾利B式、安行式の土器が出土している。第２２図１はほぼ完形の安行Ⅲ式である。

時期は、前述の３４号土坑と大差のないと推察される。

３６号土坑　（第１８図、２１図、２２図、３５図、３６図）

本遺構は、北側中央の一群の西側に位置し検出され、他の土坑との切り合い関係はない。径２．１ｍ程の不整形な円形を呈し西東に４ケ所のピットが掘込まれている。東側のピットは、１．６ｍと深く掘立遺構の可能性がある。底面は平坦で締まりは強く掘り込みは６０ｃｍ程を測り壁面は直立気味。

覆土は、４層に分けられ黒褐色、暗褐色、褐色等でロームブロック、粒子の混入の差でレンズ状の自然埋積を呈する。粘性、締まりはややある。

遺物は、前期の関山、浮島、諸磯６片、中期の中峠式８、阿玉台式１１、加曾利E式７４片、後期の加曾利B式、堀ノ内式、称名寺式、曽谷式、安行式、晩期姥山式等が見られ、その他製塩土器が１個体分出土している。総数２１０片程である。

時期は遺構プラン、遺物から加曾利EⅣ式前後が推察される。

３７号土坑　（第１８図、２２図）

本遺構は、北側中央の一群の西側に位置し検出され３８号土坑に掘り込まれている。径１ｍ程の円形状プランと推察する。掘り込み深さは、５０ｃｍ程で底面は平坦で締りをもち壁面はだれ気味。一部畑地のエリア外に存在する。

覆土は黒褐色、暗褐色、褐色の３層でロームブロック、粒、粒子の混入の差で、粘性はややある。レンズ状の自然埋積を示す。

遺物は、称名寺式４０片、加曾利B式が２０片程出土している。９～１２は沈線区画と米粒状刺突をもつ一群でこれらが本遺構の時期と推察される。手捏土器が出土している。

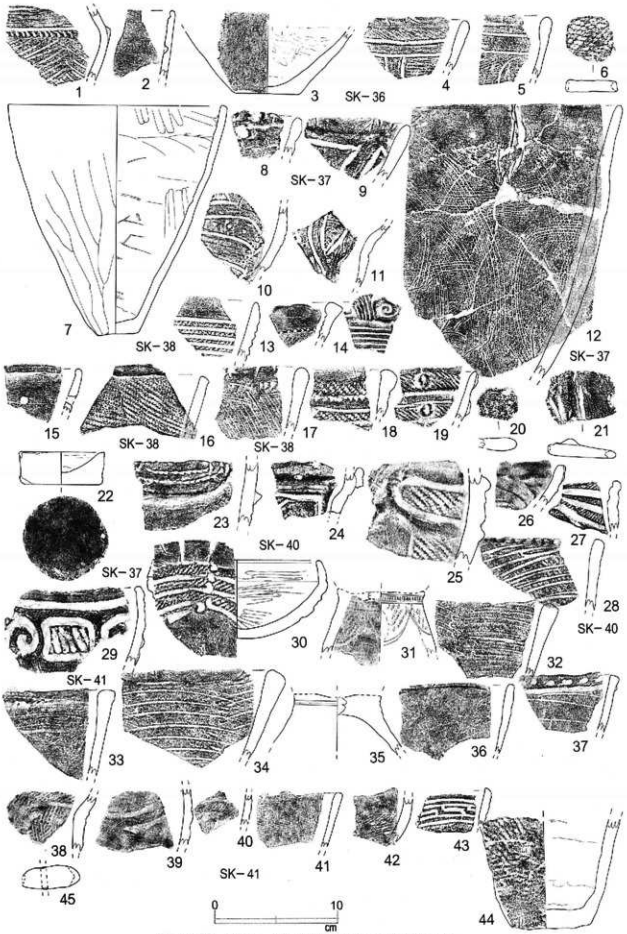
３８号土坑　（第２２図、２４図）

本遺構は、北側中央の一群で西側に位置し一部エリア外にある。径１．１ｍ程の円形状形態で掘り込みは１．５ｍと深くピット状プラン。底面径は４０ｃｍと半分以下で掘立の柱穴状。締まりはある。

覆土は、黒褐色、暗褐色の２層で下部でやや明るくなる。締り、粘性は弱い。

遺物は、総数３０片と少なく加曾利B式が主体で加曾利E式、堀ノ内式、安行式が数点みられた。１７、１８は安行式、その他土器片錘が２点出土している。

遺物、遺構プランから時期は加曾利B式と推察する。



第２２図　ＳＫ－36, 37、38、40号出土遺物実測図

３９号土坑　（第１８図）

本遺構は、北側中央の一群で西側から検出された。約半分をエリア外に置く。底面には２ケ所ピットが掘り込まれている。底面は平坦で締まりをもつ。壁面はややだれ気味で深さ５０ｃｍを測る。

覆土は３層で黒褐色、暗褐色、明褐色でローム粒子、粒の混入の差、特別なものはない、粘性、締りは弱い。遺物は加曽利Ｂ式、安行式等が小量出土しているにすぎないが、これらから遺構の時期は後期と推察される。

４０号土坑　（第１８図、２２図）

本遺構は、南側中央の一群で西側から検出され２分１程をエリア外に置く。底面にはＰ１９が存在しこれに掘込まれている。平坦で締まりは良い。壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は黒褐色、暗褐色、褐色等の３層でレンズ状の自然埋積状。各層共、粘性、締りはやや強い。径２ｍ前後の遺構か？。

遺物は、中期の阿玉台式から後期の安行式迄検出されている。中でも加曽利Ｅ式、加曽利Ｂ式が２０片前後と多い。２３は阿玉台式、２４～２６は加曽利Ｅ式、２７は安行Ⅲａ式、２８は加曽利Ｂ式と多彩な遺物が出土している。総数６０片である。

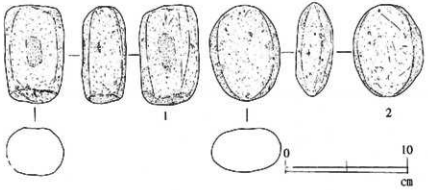
遺構プラン、遺物等から時期は加曽利ＥⅢ式前後と推察される。

４１号土坑　（第２３図、２４図）

本遺構は北側中央の西寄りに位置し検出された。径１．５ｍ程の円形状プランを呈し掘り込みは１ｍとやや深く底面に小ピットが掘込まれているほかは平坦、締りは強い。

覆土は、６層に分けられ各層共ブロック状で黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色等がみられ焼土粒子を含む。粘性はやや有り、締まりは強い。

遺物は３００片程出土している。圧倒的なものは加曽利Ｂ式で１００片、堀ノ内式が１１５片、安行式が８０片程が主な割合である。３０は加曽利Ｂ式の浅鉢で２割程欠失、３１は台付き鉢、その他安行の粗製土器が見られる。３８～４２は安行Ⅲａ、４３は安行Ⅲｃの口縁部。３０は底面から出土。遺構プラン、遺物から加曽利Ｂ式が安行式の時期が推察される。



第２３図　ＳＫ－41号出遺物実測図

４２号土坑　（第２４図、２５図）

本遺構は、北側中央の西側に位置し検出された。大半を３９号土坑に掘込まれプランは不明に近い。遺存部から円形状プランの住居跡の可能性も考えられる。掘り込みは２０ｃｍと浅く底面の締りは良い。

覆土は前述のとおりで褐色、明褐色の２層で、粘性、締りはややある。

遺物は、遺存していた部分から堀ノ内式の粗製深鉢、又やや大型の深鉢の胴下半部が出土している。その他５片程破片が混在して見られた。

出土遺物、遺構から住居跡の可能性も推察される遺構で時期は堀ノ内Ⅱ式であろう。

４３号土坑　（第１８図、３５図）

本遺構は、北側中央の一群から検出された。南側は３２号土坑と切り合い関係にある。径２ｍでほぼ円形プラン。掘り込みは１ｍ程で中央部、西側にピットが見られ掘立て遺構の一部か？。底面は弱い内湾気味で締まりはややある。

覆土は３層で黒褐色、暗褐色、褐色層で撹乱が一部見られた。特別な混入物はない。粘性、締りはややある。

遺物は、加曽利Ｅ式から姥山式まで多様な遺物が出土している。総数２２片と加曽利Ｂ式が多い。安行Ⅲａ、姥山等が本遺構の時期と思われる。１５は石棒形態。その他土器片錘が３点見られた。

４４号土坑　（第２４図、２５図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出された。本遺構より南側は弱い傾斜を呈して遺構の南限にあたる。径１．３ｍ程の円形プランで掘り込みは１５ｃｍと浅く底面もやや凹凸をもつ。立ち上がりも緩やかで落ち込み状形態。覆土は黒褐色、褐色の２層で粘性、締りはやや強い。

遺物は総数２５片と少なく、いずれも細片で１６～２５が図示した一部である。１６、１７は堀ノ内式、１８、２２は加曽利Ｂ式、他は安行Ⅲａ式。

これらの遺物、遺構プランから後期末から晩期初頭の遺構と推察され。

４５号土坑　（第２４図、２５図）

本遺構は、調査区の南側４４号土坑の東から検出された。径８５ｃｍ程のほぼ円形プランで掘り込みは３０ｃｍと浅い。鍋底状形態。底面は締まりはややある。

覆土は暗褐色、褐色の２層でレンズ状の自然堆積、粘性、締まりは強い。

遺物は堀ノ内式９、加曽利Ｂ式４、安行式４の総数１６片である。その他２６は石器。

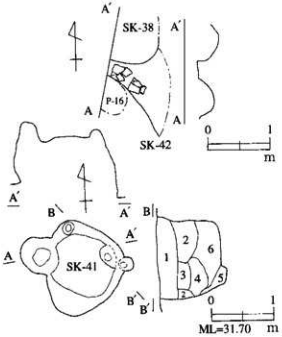
これらの遺物、遺構プランから時期は後期後半安行式前後と推察される。

４９号土坑　（第２４図、２５図）

本遺構は、調査区の南側中央の一群に位置し検出された。南側で５２号土坑を掘り込み、長径２．１ｍ、短径１．５ｍの長円形プラン。掘り込みは４０ｃｍ、底面は中央部がやや高い。締まりは良い。壁面は垂直に立ち上がる。

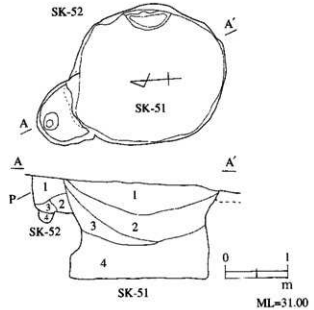
覆土は黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色の４層に分けられレンズ状の自然埋積を示していた。粘性、締まりはややある。　遺物は総数７０片で諸磯式、阿玉台式、加曽利Ｅ式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、安行式、安行Ⅲａ式、姥山式等が出土した。その他２７の石器が出土している。

遺物からは時期は特定出来ないが掘り方プラン等から後期加曽利Ｂ式前後が推察される。



SK-41

No.	色調	土質	粘性	締り
1	黒 色	ローム小ブロック、焼き粒極少量	強 い	強 い
2	灰褐色	ローム小ブロック、粒子少量	強 い	強 い
3	暗褐色	ローム粒子、焼土粒やや多量	やや有り	強 い
4	褐 色	ローム粒がやや多量	やや有り	強 い
5	暗褐色	ローム小ブロック、焼き粒子少量	やや有り	強 い
6	暗褐色	ローム小ブロックやや多量粒子少量	やや有り	強 い



SK-51

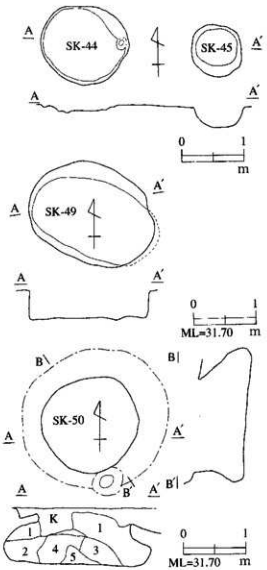
No.	色調	土質	粘性	締り
1	黒 色	ローム粒極少量	弱 い	弱 い
2	灰褐色	ローム粒子極少量	弱 い	弱 い
3	暗褐色	ローム粒子、粒子少量	やや有り	やや有り
4	褐 色	ローム粒子少量	強 い	強 い

SK-52

No.	色調	土質	粘性	締り
1	暗褐色	ローム小ブロック極少量	やや有り	やや有り
2	褐 色	ローム粒子多量	強 い	強 い
3	暗褐色	ローム粒粒子極少量	強 い	強 い

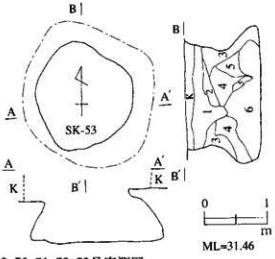
SK-53

No.	色調	土質	粘性	締り
1	黒 色	焼土粒、粒子ローム粒粒子少量	強 い	強 い
2	灰褐色	ローム粒子、粒、焼き粒子極少量	*	*
3	黒褐色	ローム粒子小ブロック極少量	*	*
4	暗褐色	ローム粒子やや多量、焼土粒子極少量	*	*
5	暗褐色	ローム粒子やや多量、焼き粒子極少量	やや有り	やや有り
6	褐 色	ローム粒子多量、ブロック少量	強 い	強 い

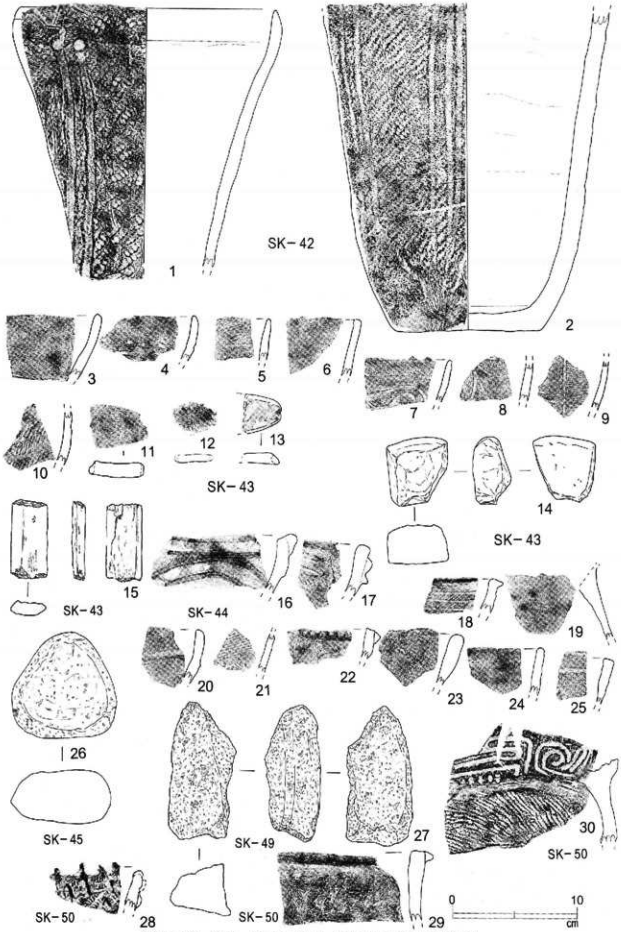


SK-50

No.	色調	土質	粘性	締り
1	灰褐色	ローム小ブロックやや多量・粒子少量	強 い	やや有り
2	黒褐色	ローム小ブロック	弱 い	強 い
3	暗褐色	ローム粒、小ブロック少量	やや有り	やや有り
4	褐 色	ローム粒子多量	やや有り	強 い
5	褐 色	ローム粒交量	強 い	弱 い



第２４図　ＳＫ－41、42、44、49、50、51、52、53号実測図



第２５図　ＳＫ－42、43、44、45、49、50号出土遺物実測図

５０号土坑　（第２４図、２５図）

本遺構は、調査区の南側中央の一群に位置し検出された。径１．５ｍ程の円形状プランで底面はフラスコ状形態。平坦、締まりは強い。掘り込みは１ｍとやや深い。

覆土は黒褐色、暗褐色、褐色等の５層に分けられたがロームブロック、粒、粒子の混入の差で上部は近世の撹乱層が存在する。下部は投げ込み的、１層は自然堆積か。締まり、粘性は５層を除いて弱い。遺物は、中峠式、加曽利Ｅ式、安行Ⅲａ、姥山式を図示した。

時期は底面から出土している阿玉台式、中峠式、加曽利ＥⅠ式で有り遺構の掘り込みプランから中期後半加曽利ＥⅠ式が推察される。土器片錘が２点出土している。やや大型。

５１号土坑　（第２４図、２６図）

本遺構は、調査区の南側中央に位置し検出された。径２．２ｍの円形状形態で掘り込みは、１．５ｍと深い。東側の５１号土坑を切り込む。底面は平坦締まりは強い。壁面は垂直気味で弱いフラスコ状プランを呈する。上端が崩壊した可能性がある。

覆土は、黒色、黒褐色、暗褐色、褐色の４層であるがローム粒子、粒の混入の差。粘性、締まりは５層を除き弱い。

遺物は、総数の７割りを後期の称名寺式が占める。他に関山、諸磯、浮島、阿玉台、中峠、加曽利Ｅ、加曽利Ｂ、安行式等が見られた。図示した１９～３３が遺物の一部で浮島式のハマグリを用いた波状文、２１～２５は称名寺Ⅰ、Ⅱ式で沈線区画に米粒状の刺突、又は縄文の充填が見られる。その他２６～３４は土器片錘で多量に出土している。

出土遺物、遺構プランから後期前半の称名寺式の遺構である。

５２号土坑　（第２４図）

本遺構は、調査区の南側中央に位置し検出され大半を５１号土坑に掘込まれ一部しか遺存しない。径１ｍ前後の円形状遺構と推察される。掘り込みは６０ｃｍ前後で底面は凹凸があり締りは悪い。ピット状。

覆土は暗褐色、褐色等３層に分けられローム粒子、粒の混入の差で締まりは弱い。

遺物は、総数８片で加曽利Ｅ式、加曽利Ｂ式、安行式の細片が出土している。図示出来る物は無いが切り合いから中期後半と推察される。

５３号土坑　（第２４図、（第２６図）

本遺構は、調査区の南側中央に位置し検出された。径１．５ｍ程の円形のフラスコ状プランで掘り込みは９５ｃｍでやや深い。（上部は撹乱）底面は平坦、締りは良い。

覆土は６層で黒色、黒褐色、暗褐色、褐色等で焼土粒子を含む。粘性、締まりは各層とも強い。

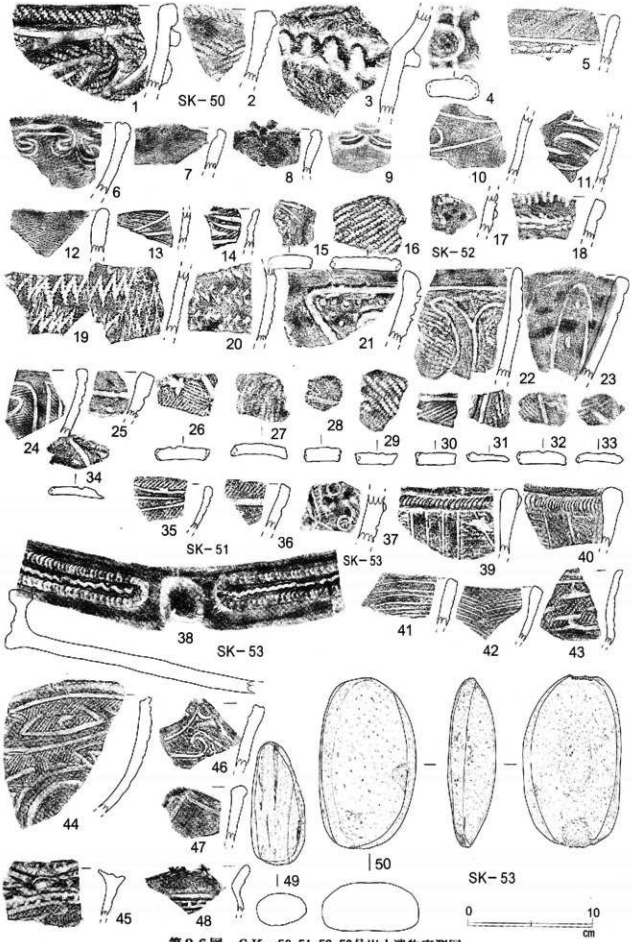
遺物は３７～５０で関山式３７、阿玉台式３８、安行式の粗製、晩期安行Ⅲａ式、Ⅲｃ式が出土している。その他石器が見られる。底面からは阿玉台式が出土している。

遺物、遺構プランから阿玉台式期の遺構と推察出来る。

５４号土坑　（第２７図、２８図）

本遺構は、調査区の南側中央西側に位置し検出された。３分の１程をエリア外に置く。

径２．５ｍ程のやや長円形状プランを呈すると思われる掘り込みは、４０ｃｍ程と浅く底面には３基の小ピットとＰ６４が西側に位置していた。平坦で締りはあり、壁面は開き気味。覆土は２層で黒褐色、暗褐色でローム粒子の混入の差、締り、粘性はやや弱い。



第２６図　ＳＫ－50、51、52、53号出土遺物実測図

遺物は、１２０片程と少なく図示できるものは少ない。底面からは加曽利ＥⅢ式が出土し後期称名寺式が半数を占める。２８図１～３が遺物で３は土器片錘。

遺物、遺構プランからは後期称名寺式期の遺構と推察される。

５５号土坑　（第２７図、２８図）

本遺構は、調査区南側中央部の東よりに位置し検出され１０住居跡を掘り込む。径１．３ｍ程の円形で深さは２．８ｍと円筒状プランで壁面は垂直、砂質粘土層迄掘り込む。底面は水分を多量に含む。遺構の性格等は不明。

覆土は暗褐色、褐色等の４層に分けられいずれも投げ込み状層序を示す。粘性、締まりは弱い。

遺物は図示した加曽利Ｂ式が多量に出土したが、いずれも細片で図示出来る物は少ない。１は称名寺式、２、３は加曽利Ｂ式の粗製、土器片錘４、５がある。加曽利Ｂ式が７割。これらの遺構プラン、遺物から後期加曽利Ｂ式期の遺構と推察される。

５６号土坑は遺構として把握出来ず、若干の掘り込みで遺構として番号を付して調査をしたが明確な遺構として捉えられなかった。

遺物は、５６号が２０片、阿玉台式、加曽利Ｅ式、称名寺式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式が出土している。図示したのは浮島式のハマグリの波状文である。

時期はこれらの遺物の時期が推察される。

５７号土坑　（第２７図）

本遺構は、径１．８ｍで調査区の南側中央西寄りに位置し検出された。切り合い関係は無く単独で検出された。掘り込みは５０ｃｍやや深く半分程エリア外に位置する。壁面はやや開き気味で底面は平坦、締りは弱い。

覆土は黒褐色、黒色、暗褐色、褐色の５層に分けられたが粘性、締りはやや強い。

遺物は総数２２片で堀ノ内式土器が、本遺構の時期と推察される。

５８号土坑　（第２７図、２８図）

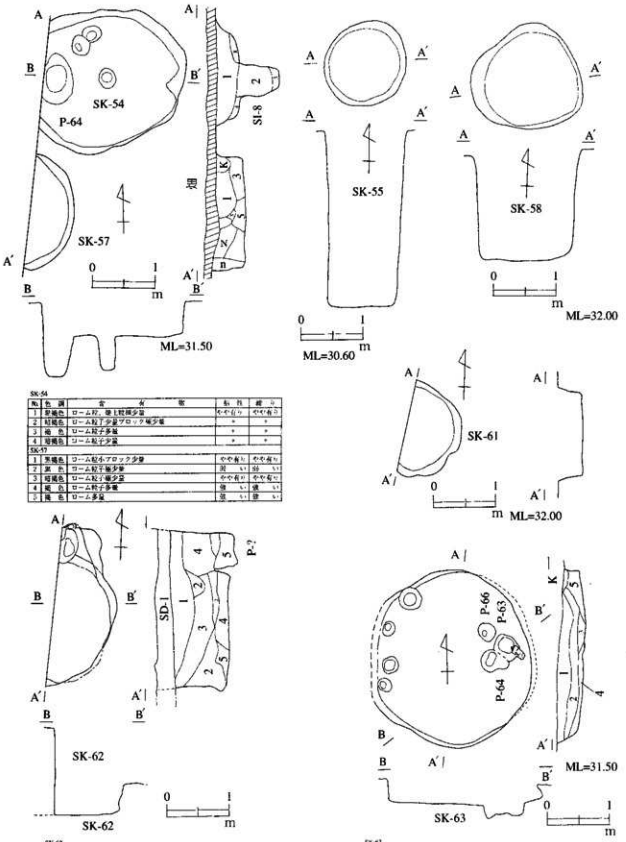
本遺構は、調査区の南側中央西側に位置し検出された。約半分をエリア外に置き径１．７ｍ程の円形プランを呈すると推察される。底面は、平坦で締まりはある。壁面は垂直に近く掘り込みは７０ｃｍと深い。円筒状プランを呈する。

覆土は５層で黒色、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色で炭化粒子、焼土粒子を小量含む。層序的には投げ込み的な感じ。締り、粘性はやや強い。

遺物は加曽利Ｂ式が圧倒的で次に安行式が続く。９～１３で９は安行式、１０は加曽利Ｂ式の浅鉢で器面磨消、１１、１２、１３は安行Ⅲａ、１５は磨り石。総数８０片程出土している。

５９号土坑　（第２８図）

本遺構は、調査区の南側中央西よりに位置し検出された。南側、北側はそれぞれ切り合い関係にあり遺存状態は悪い。平面図は図示しなかったがおよそ径１．５ｍ程のプランをもつ遺構と推察され深さは２０ｃｍ程であまり明確ではない。底面もピットが２基掘込まれ攪乱が多い。凹凸が多く締まりは悪い。覆土は黒色、暗褐色、褐色層でローム粒子の混入の差、粘性締りはややある。遺物は加曽利Ｂ式が多数で６０片、その他３５片で図示出来る物は少なく１４の安行Ｉ式１５の石器、磨り石である。遺物、遺構形態から加曽利Ｂ式期の遺構？と推察される。



SK-54

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム粒、焼土粒子少量	やや有り	やや有り
2	暗褐色	ローム粒子少量ブロック粒少量	+	+
3	褐色	ローム粒子多量	+	+
4	暗褐色	ローム粒子少量	+	+

SK-57

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒子ブロック少量	やや有り	やや有り
2	黒色	ローム粒子極少量	強い	強い
3	暗褐色	ローム粒子極少量	やや有り	やや有り
4	褐色	ローム粒子多量	強い	強い
5	褐色	ローム多量	強い	強い

SK-62

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	暗褐色	ローム粒子ブロック粒子少量	やや有り	やや有り
2	褐色	ローム粒子多量、4層に近い	やや弱い	やや弱い
3	褐色	ローム粒、粒子少量	やや強い	やや強い
4	褐色	ローム粒子多量	やや強い	やや強い
5	暗褐色	ローム粒子少量、ブロック少量	やや強い	やや強い

SK-63

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ローム粒焼土粒子極少量	強い	やや有り
2	暗褐色	ローム粒焼土ブロック粒少量	やや強い	強い
3	褐色	ローム粒ブロック粒子極少量	強い	強い
4	褐色	ローム粒子多量	強い	強い
5	褐色	ローム粒子焼土粒子少量	強い	強い

第２７図　ＳＫ－54、55、57、58、61、62、63号実測図

６０号土坑　（第２８図）

本遺構は、調査区の南側中央の西よりに位置し検出された。径１ｍ前後で形態、プランから遺構になるか疑わしいが一応落ち込みが見られた。これを６０号土坑としたが縄文時代の遺構とは疑わしい。掘り込みは２０ｃｍで緩やかな落ち込み。覆土は褐色層、締りは弱い。

遺物は１６～２４で前期諸磯、中期加曽利Ｅ式、後期称名寺式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、安行式、晩期安行Ⅲａ、姥山等１５０片程出土している。捨て場的感じであった。新しい？。

６１号土坑　（第２７図、２８図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出された。９号住居跡に掘込まれて上部欠失している。径１．５ｍ程のプランを呈する遺構と推察され約２分１を西側の畑、エリア外に置く。掘り込みは４０ｃｍと上部を欠失している為やや浅い。円形プランを呈する。

覆土は３層で黒色、黒褐色、褐色でレンズ状の自然堆積。粘性、締まりはやや強い。

遺物は、底面では加曽利Ｅ式の胴部が２０片程出土している。又軽石、石皿が出土している。その他称名寺式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、安行式が６０片程出土している。

遺構プラン、遺物出土状態から中期加曽利ＥⅡ式の時期が推察される。

６２号土坑　（第２７図、２８図、２９図）

本遺構は南側の一群に位置し検出され大型の掘立遺構と思われる落ち込みの端から検出された。径２ｍ程の円形プランを呈すると推察される。２分１程西側の畑、エリア外に置く。掘り込みは９０ｃｍと深く、底面は平坦で締りをもつ。北側の一部にはピットが位置。

覆土は、レンズ状の自然堆積で暗褐色、褐色、暗褐色の５層に分けられた。いずれもロームブロックの混入の差で締まりはやや弱い。

遺物は、底面近くから阿玉台式、中峠式が多く出土している。３～１１で中峠式の４、加曽利ＥＩ式の３と円筒状胴下半部の８がある。その他磨り石等が出土している。

遺構プラン、遺物から阿玉台式から加曽利ＥＩ式の時期が推察出来る。

６３号土坑　（第２７図、２９図、３０図）

本遺構は、南側の一群に位置し検出され上部は赤土採取の為かなり欠失している。径２．６ｍ程の円形プランを呈する。西側、東側にピットが７基程位置する。掘り込みは４０ｃｍ程で中央部がやや低くなる形態で底面の締まりは良く床面状。

覆土は、黒褐色、暗褐色、褐色等の５層に分けられたがいずれもローム粒子、ブロックの混入の差で締まり、粘性は強い。レンズ状の自然堆積。

遺物は、底面から中峠式、阿玉台式、加曽利Ｅ式等が出土している。１４は中峠式の胴下半部で隆帯に縄が見られる。加曽利Ｂ式、安行Ⅲａ等が出土している。

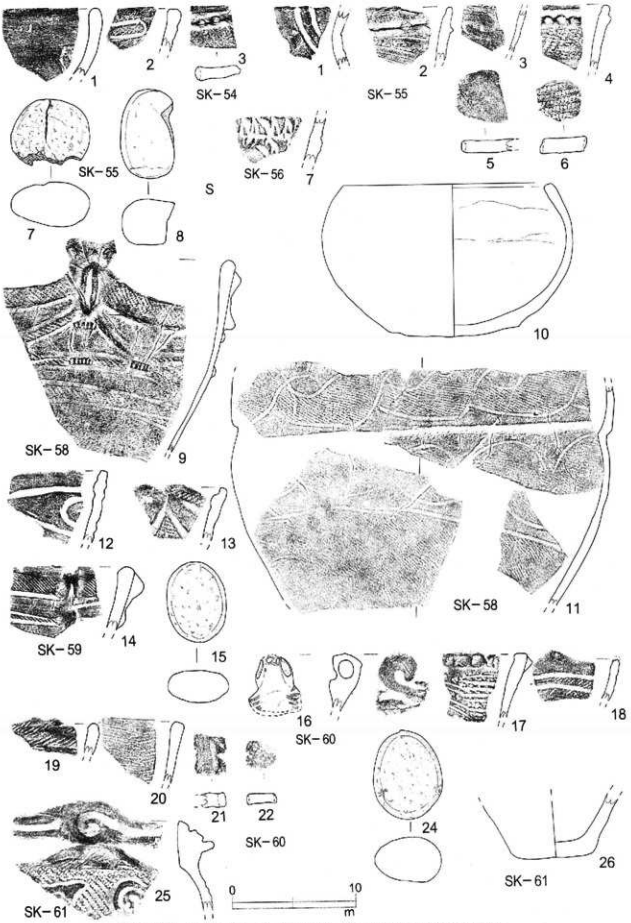
遺物、遺構プランから中峠式の時期が推察される。

６４号土坑　（第３０図、第３１図）

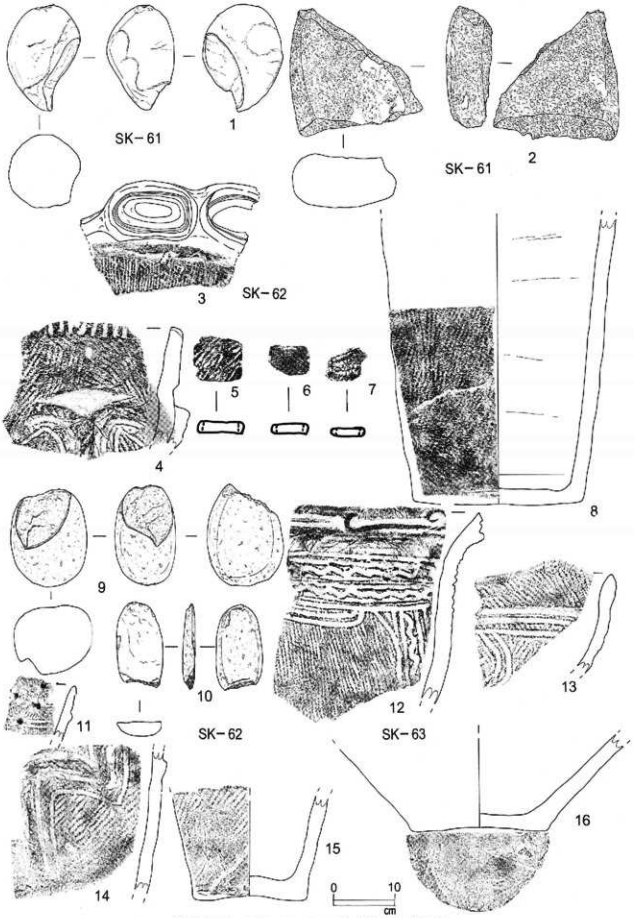
本遺構は、南側の一群に位置し６３号土坑南側に位置し検出された。長径２ｍ、短径１．５ｍの長円形状プランで掘り込みは３０ｃｍと浅い。（上部は赤土採取）撹乱のため遺構形態は不明。感じからは円形状で弱く底部が張るか？。底面の締まりは良い。フラスコ状？。

覆土は２層で暗褐色、褐色で締りは強くレンズ状の自然堆積。

遺物は、中期の阿玉台式、中峠式、加曽利Ｅ式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式、安行式が見られた。



第２８図　ＳＫ－５４、55、56、57、58、59、60、61号出土遺物実測図



第２９図　ＳＫ－61、62、63号出土遺物実測図

大多数は堀ノ内式、加曾利B式で８、９は堀ノ内式で口縁部磨消と沈線区画の９がある。

遺構プラン、遺物等から時期は後期の堀ノ内式期と考えられる。

６５号土坑　（第３０図）

本遺構は、調査区の南側西寄りに位置し検出された。長径１．５ｍ程の倒卵形状のプランを呈していた。底面には３ケ所のピットが掘り込まれ撹乱層が上部に有り（上部は赤土採取の為撹乱）底面のみの遺存であった。締まりはやや良い。

覆土は、大半が撹乱層で一部に遺存部も見られたが状態は悪い。よって締りは悪い。

遺物は、１０～２６で後期後半の遺物が撹乱土から出土している。加曾利Ｂ式の台付き土器１０と安行式の粗製土器、Ⅲａの肉彫り的な口縁部、口縁部に蟹の目状に小突起を貼付する物が見られる。又細密沈線、顔の部分の土偶２５が撹乱層から出土している。

遺物、遺構プランから晩期安行Ⅲａ式の時期が推察される。

６６号土坑　（第３０図、３１図）

本遺構は、南側の一群に位置し検出された。６４号の南側に位置し６８号に北側の一部が掘込まれている。長径２．４ｍ、短径２．１ｍの不整形プランを呈する。掘り込みは（上部は赤土採取の為撹乱）３５ｃｍとやや深い。底面は平坦で締まりは強い。東側の立ち上がりは欠失し５ｃｍ程。壁面は垂直？。

覆土は、暗褐色、褐色の２層で締まりは強い自然埋積状。上部欠失。

遺物は、２７から３２で中峠式、安行式、姥山式等が出土している。総数１４０片程で底面から時期の目安になる遺物は定かでない。遺物の割合からは堀ノ内式３２片、加曾利Ｂ式６０片である。

遺構プラン、遺物の出土割合から後期の加曾利Ｂ式期の遺構と推察される。

６７号土坑　（第３０図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出され（上部は赤土採取）の為底面のみの確認で径１．５ｍ前後の円形状プランを呈すると推察される。底面は平坦で締まりをもつ。

覆土は５ｃｍ程で褐色層のみ、粘性、締りはある。

遺物は、３２、３３で堀ノ内式の粗製深鉢と安行Ⅲａ式の口縁部で総数は、加曾利Ｅ式２６、堀ノ内式１７、称名寺式１、加曾利Ｂ式１５、安行式Ⅲａ３、平安時代国分式１、内耳土器１が出土している。これらの出土遺物、遺構プランから後期加曾利Ｂ式期の遺構？と思われる。

６８号土坑　（第３０図、３１図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出され（上部は赤土採取の為撹乱）の為西側のみ覆土が存在。径１．８ｍ程の倒卵形プランを呈する。壁面は垂直、深さ３０ｃｍと西側のみ遺存状態は撹乱のため悪い。

覆土は遺存部２層で暗褐色、褐色層で締り、粘性は強い。

遺物は加曾利Ｅ式から安行式迄検出された。堀ノ内式１９、加曾利Ｂ式１７片が主体であり、時期は３４の時期、後期加曾利Ｂ式期が推察される。３５は土器片錘。

６９号土坑　（第３１図）

本遺構は、南側の調査区東側に位置し検出された。北側を７１号土坑に掘込まれ東側は１０号住居跡の一部を掘込む。長軸１．１ｍ、幅８０ｃｍ程の長円形状プランで掘り込みは４０ｃｍと

浅い。東側では２０ｃｍである。底面は締まりをもつ。

覆土は変速的な層序で（上部は赤土採取の為撹乱）僅かに西側に暗褐色、褐色、明褐色が見られる。粘性、締まりはやや有る。

遺物は、加曾利Ｂ式が８片出土しているに過ぎず図示出来る物はない。

時期を判断する材料はないが、しいて推定すれば出土遺物から加曾利Ｂ式期の遺構か？。

７０号土坑　（第３０図、３１図）

本遺構は、調査区南側の一群に位置し検出された。切り合い関係は無く単独である。長径１ｍ、短径８０ｃｍの倒卵形プランで掘り込みは３５ｃｍと浅い。壁面はやや傾斜をもつ。底面の締まりは良い。３６～３８で土器片錘等も見られる。

遺物は、加曾利Ｂ式１８片を主体に堀ノ内式、加曾利Ｅ式等が１０片程見られた。

遺物、遺構プラン等から後期加曾利Ｂ式前後の遺構か？。

７２号土坑　（第３４図）

本遺構は、調査区の南側に位置し１０号住居跡の一部と切り合い関係にある。（上部は赤土採取の為撹乱）され遺存部長軸１．８ｍ、短軸１ｍの不整形な三角形状形態で掘り込みは２０ｃｍ程遺存していた。壁面はやや角度をもつ。底面は締まりは良い。

覆土は黒褐色、暗褐色、褐色でローム粒子、ブロックの混入の差で粘性、締まりは強い。堆積状態から投げ込み的層序を示す。

遺物は、前期の諸磯式、阿玉台式、加曾利Ｅ式、堀ノ内式、加曾利Ｂ式、安行式、が見られ主体は加曾利Ｅ式で１３片、底面からは加曾利Ｂ式が３片出土している。（３９、４０）

遺物、遺構プラン、切り合いから後期中葉の時期か？。

７３号土坑　（第３１図）

本遺構は調査区の南側から検出された遺構で確認が（上部は赤土採取の為撹乱）遅かった為遺構の全容は解明出来なかった。一部東側に近世の撹乱が存在している。本遺構は内耳式土器を伴う墓坑で頭蓋、頭頂骨、右側頭蓋錘体と歯、右大腿骨が検出された。（人骨参照）

鑑定所見によれば年令は歯の咬耗度からⅠ～Ⅱに相当し壮年初期と推定されている。

頭蓋の矢状縫合は開いている。その他は保存が悪く不明。

歯の状態は上下の前歯が欠失している点は本人骨の生活環境、言い換えれば身分的性格等種々想定されよう。

遺物は内耳土器破片３が見られ形態から江戸時代初頭前後の時期である。これが人骨の埋葬年代と同一とは断定しかねるが大差が無いと思考する。六文銭は検出出来ない。

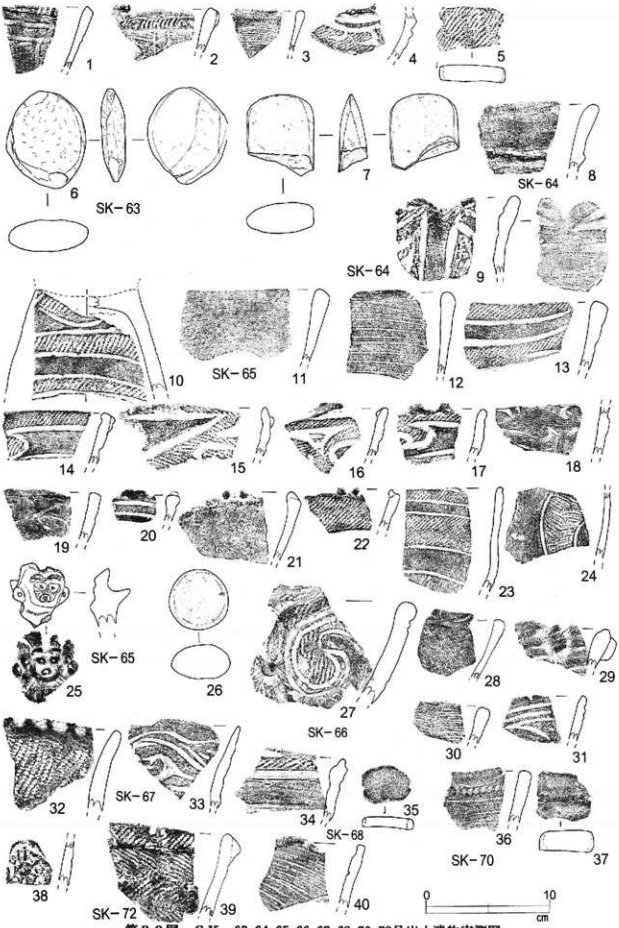
掘り込みは長円形で２．２×１．９ｃｍ深さは確認面から６０ｃｍであった。（おけ？）

７４号土坑　（第３１図、３２図）

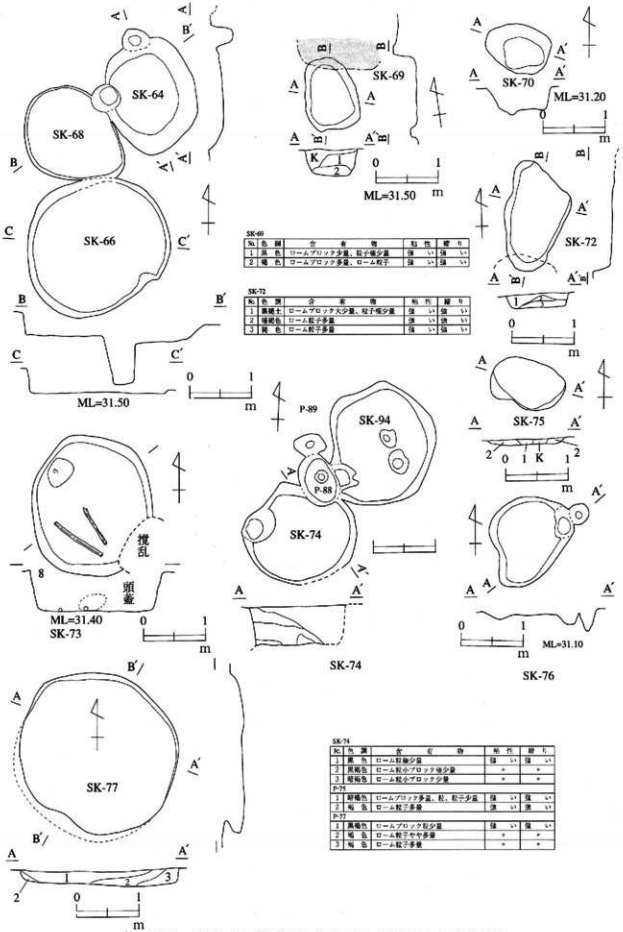
本遺構は、調査区の南側中央部西寄りに位置し検出された。北側で９４号土坑と切り合い関係にある。上部は（赤土採取の為撹乱）され２０ｃｍ前後欠失。径１．６ｍ程の円形プランで掘り込みは６０ｃｍ、東側は前述の撹乱。底面は比較的締まりは良い。

覆土は暗褐色、褐色、明褐色の３層で層序は投げ込み的感じである。締まり、粘性はややある。

遺物は少なく総数５４片で加曾利Ｅ式２３片、加曾利Ｂ式２２片、安行式９片で時期は遺物から見れば後期加曾利Ｂ式の時期が推察される。（１～９）



第３０図　ＳＫ－63、64、65、66、67、68、70、72号出土遺物実測図



SK-69

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒色	ロームブロック少量、粒子極少量	強 いい	強 いい
2	暗色	ロームブロック多量、ローム粒子	強 いい	強 いい

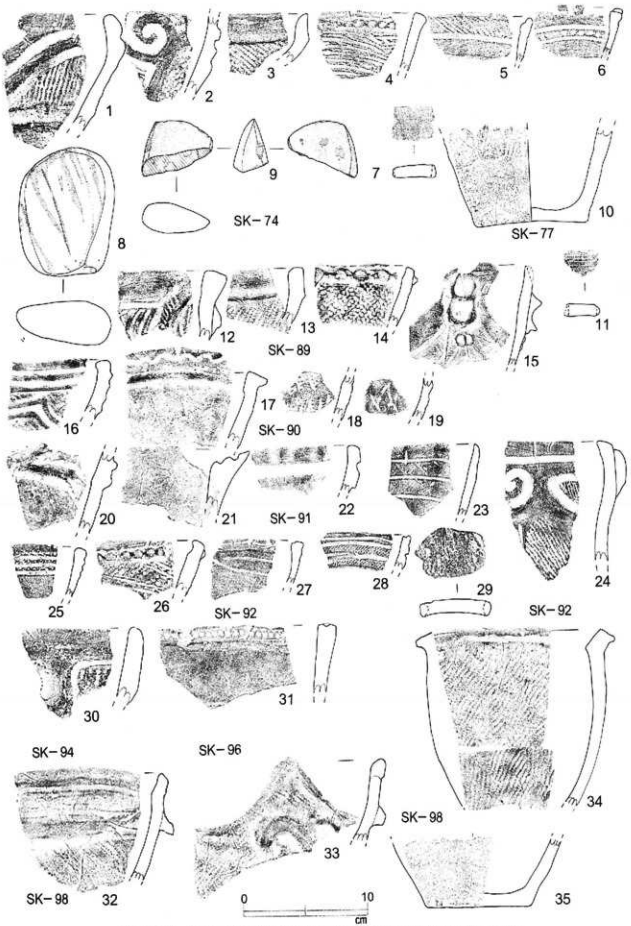
SK-72

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	ロームブロック大少量、粒子極少量	強 いい	強 いい
2	暗褐色	ローム粒子多量	強 いい	強 いい
3	黒色	ローム粒子多量	強 いい	強 いい

SK-74

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒色	ローム粒極少量	強 いい	強 いい
2	黒褐色	ローム粒小ブロック極少量	+	+
3	暗褐色	ローム粒小ブロック少量	+	+
P-75				
1	暗褐色	ロームブロック多量、粒、粒子少量	強 いい	強 いい
2	褐色	ローム粒子多量	強 いい	強 いい
P-77				
1	黒褐色	ロームブロック粒少量	強 いい	強 いい
2	褐色	ローム粒子やや多量	+	+
3	褐色	ローム粒子多量	+	+

第３１図　ＳＫ－64、66、68、69、70、72、73、74、75、76、77号実測図



第３２図　ＳＫ－74、79、89、90、91、92、94、96、98号出土遺物実測図

７５号土坑　（第３１図）

本遺構は、調査区南側に位置し検出された。切り合い関係は無く単独。倒卵形形態で長径１．２ｍ（上部は赤土採取の為撹乱）の為浅く底面のみで土層は投げ込み的の感じである。底面はやや中央が高い感じの土坑であるが大半を前述の為欠失し子細は不明。

覆土は暗褐色、褐色でブロック状層序。投げ込み的埋積、締り粘性はある。

遺物は、加曽利Ｅ式１４、加曽利Ｂ式７、安行式が６片で図示出来るものは無い。

時期は遺物、遺構プランからは特定出来ないが遺物から縄文後期後半が推察される。

７６号土坑　（第３１図）

本遺構は、調査区の南側から検出されたが（上部は赤土採取の為撹乱）底面のみの確認でプラン、規模は特定出来ない。遺存部は東西１、４ｍ程の不整形な円形を呈する。底面は凹凸があり締りは悪い。遺物は皆無で時期は不明。東側に小ピットが２基掘込まれている。

７７号土坑　（第３１図、３２図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出された。切り合い関係は無く単独で有りこの部分から上部の赤土採取の為撹乱は薄くなる。地形状南側にゆるく傾斜を示す。径２．５ｍの円形プランで本来はフラスコ状プランと推察され、掘り込みは２５ｃｍで有る。底面は平坦で良好な締りをもつ。覆土は、暗褐色、褐色等の３層に分けられ層序はレンズ状の自然堆積。締り粘性は強い。

遺物は８片程底面から出土している。総数４５片程で中峠式、阿玉台式が８割りで１０、１１が図示した遺物で中峠式の底部と口縁部である。

出土遺物、遺構プランから縄文中期中峠式の範疇のフラスコ形土坑と推察する。

７９号土坑

本遺構は、調査区の南側に位置し検出された不整形な遺構で、落ち込み状遺構として認定すべきか一考の余地のある掘り込みである。覆土は一層で暗褐色、締りはややある。ここの部分も（上部は赤土採取の為撹乱）でこの時の掘り込み部か？、遺物は皆無で時期は特定出来ない。遺構は図示しなかった。

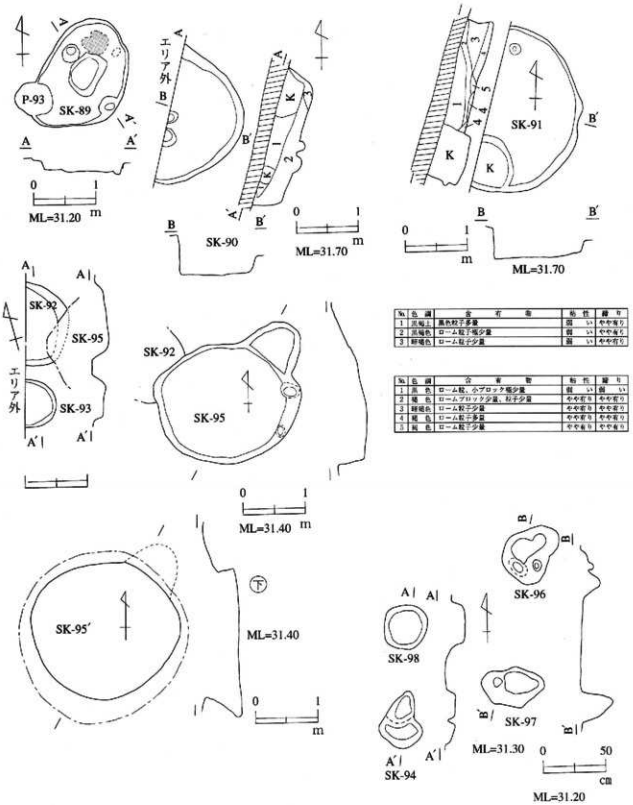
８９号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は、調査区の南側に位置し検出された。倒卵形プランで長径２ｍ、短径１．４ｍを測る。掘り込みは２０ｃｍで壁面は直立状で底面は平坦締りはやや悪い。覆土は暗褐色層、褐色層の２層で共に締りは強い。浮いて焼土ブロックがが見られた。遺物は、浮島式、中峠式、加曽利Ｅ式、称名寺式、加曽利Ｂ式、安行式等が出土している。総数７０片で覆土中では土師器カメ１５片、安行式が出土、底面からは加曽利Ｂ式が出土。時期は後期加曽利Ｂ式期が推察される。

９０号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は調査区の南、西よりに位置し検出され半分程エリア外にある。径２．３ｍで円形状プランと推察される。壁面はやや傾斜をもつ。掘り込みは５０ｃｍ程で底面は中央部がやや深くなる。締りは良い。中央部に小ピットが２ケ所見られる。

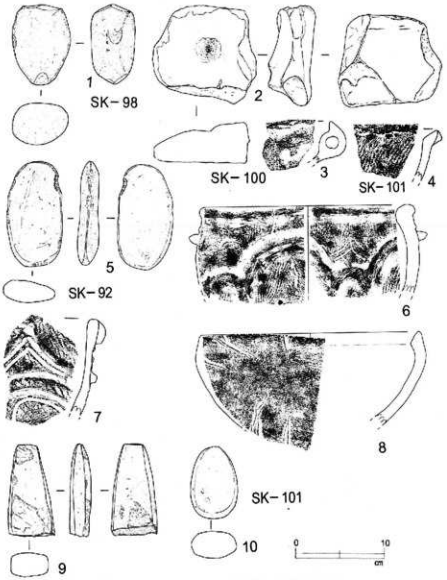
覆土は黒色、黒褐色、暗褐色の３層で粘性は弱く、締りはややある。全体的には自然堆積に近い層序を示す。遺物は、阿玉台式が主体で中峠式、加曽利Ｅ式、堀ノ内式、加曽利Ｂ式等が出土した。総数５０片、底面から出土した１６、１７の時期が推察される。１８、１９は浮島式のアナダラ属とハマグリを用いた波状貝殻文で９片出土している。



No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒褐色	黒色粒子多量	強い	やや強い
2	黒褐色	ローム粒子微少量	強い	やや強い
3	暗褐色	ローム粒子少量	強い	やや強い

No.	色調	含有物	粘性	締り
1	黒色	ローム粒、小ブロック微少量	強い	強い
2	暗色	ローム粒子少量、粒子少量	やや強い	やや強い
3	暗褐色	ローム粒子少量	やや強い	やや強い
4	暗色	ローム粒子多量	やや強い	やや強い
5	黒色	ローム粒子少量	やや強い	やや強い

第３３図　ＳＫ－89、90、91、92、93、94、95、95′、96、97、98号実測図



第３４図　ＳＫ－92、98、101号出土遺物実測図

９１号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は、調査区の南端に位置し検出された。約２分１をエリア外に置く。径２．７ｍ程の円形プランで掘り込みは５０ｃｍとやや深く東側は（上部は赤土採取の為撹乱）層で欠失している。南側端に薩摩芋の貯蔵穴と思われる撹乱部が掘込まれている。底面はほぼ平坦で締りはある。壁面は垂直に近い掘り込み。

覆土は地形的に高い北側からの自然埋積状態が見られる。黒色、褐色、暗褐色等５層が確認された。粘性、締りはややある。

遺物は、総数７１片で加曽利Ｅ式が主体を占める。２０～２３で加曽利ＥＩ式が底面から出土している。２５片出土した。

遺構プラン、遺物から加曽利ＥＩ式の遺構と推察出来る。

９２号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は、調査区の南側の西よりに位置し検出された。約半分程をエリア外に置き径１．３ｍ程の円形プランと推察される。掘り込み深さは２０ｃｍと浅い。底面は平坦に移行し締りはある。

覆土は、２層で層序は黒褐色、褐色レンズ状の自然埋積。締り、粘性はややある。

遺物は、底面から加曽利E式が出土している。総数８０片程で堀ノ内式、加曽利B式、安行式等が見られた。図示した２４のほかは加曽利B式の口縁部。３５図の石器がある。遺構プラン、遺物から時期は加曽利E式期と推察される。

９３号土坑　（第３３図）

本遺構は、調査区の南側の西よりに位置し検出された。切り合い関係はなく単独で検出された。径８０ｃｍ程でピット状形態。掘り込みは１５ｃｍと浅く壁面は開き気味。底面は平坦で中央がやや高く締りはある。

覆土は、黒褐色、褐色の２層で締りはややある。遺物は皆無で時期、性格は不明。

９４号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は、９２号土坑の東側に位置し単独で検出され、長径９０ｃｍ程で掘り込みは１５ｃｍと浅く、ピット状形態である。底面は２段になり締りはある。

覆土は暗褐色、褐色の２層でレンズ状の自然堆積を示す。

遺物は加曽利E式３、加曽利B式１１片が出土し、しいて時期を位置づければ後期加曽利B式期の土坑？。

９５号土坑、９５´号土坑　（第３１図、３３図）

本遺構は、南側の西よりに位置し検出された。径１．９ｍ程の不整形プランを呈する。北東側に入り口状の掘り込みが見られる。本遺構は上の張り底の遺構と下部の９５´がある 。上の遺構はなだらかな傾斜を以て南側の底面に移行し深さは４０ｃｍである。

覆土は、黒色、暗褐色、褐色の３層で粘性、締りはやや強い。

遺物は上下共阿玉台式のみで時期は大差が無い。プランでは下部は径２．２ｍでフラスコ状プランで６０ｃｍと深くなる。総数２１片と少ない。その他雲母片岩、小さい川原石が２０個程出土している。同遺構を２回使用した例はない。

上下、９５、９５´共阿玉台式の時期が推察される。

９６号土坑　（第３２図、３３図）

本遺構は、調査区南側の一群の中に位置し単独で検出された。ピット状形態で（上部は赤土採取の為撹乱）不明であり。長径１ｍ、短７０ｃｍと不整形なプランを呈している。掘り込みは、３０ｃｍで底面は凹凸が多く不規則である。

覆土は褐色、暗褐色の２層で遺構の性格は不明に近い。遺物は少なく３１が図示した１点のみである。堀ノ内式の口縁部か？。

９７号土坑　（第３２図）

本遺構は、調査区の南側に位置し単独で検出された。長円形プランで長径１ｍ、短径６０ｃｍと不整形プランでピット状。底面は三角形状形態で深さは５０ｃｍ本地区も（上部は赤土採取の為撹乱）の為上部の状態は不明。

覆土は暗褐色層のみではややある。遺物は皆無で時期は不明。

９８号土坑　（第３２図、３３図、３４図）

本遺構は、調査区南側の西よりに位置し単独で検出された。径７０ｃｍの円形プランで掘り込みは２０ｃｍと浅い。壁面、底面は鍋底状形態。

覆土は、３層で黒褐色、暗褐色、褐色で粘性はややある。

遺物は内耳が出土している中世の遺構である。土器形態から時期は江戸時代初期が推定される。３４図の打製石器がある

１００号土坑　（第３４図）

本遺構は、調査区の南側中央部西よりに位置し検出された。径１．５ｍ程の不整形プランで掘り込みは３０ｃｍと浅いが上部は溝状（掘立遺構の可能性有り）で掘られ遺存部から推定すれば８０ｃｍ程の深さが想定出来る。底面は平坦、締りはある。壁面は垂直に近い。当初攪乱と考えて調査をためらった為上部は欠失。

覆土は、暗褐色、褐色層で粘性は弱い。

遺物は内耳土器鍋の口縁部が出土、形態からは江戸時代が推察される。その他３片程破片が出土している。

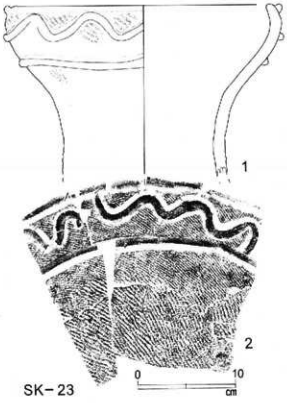
時期は、遺物、土層、遺構プラン等から江戸時代の遺構と推察される。

１０１号土坑　（第３４図）

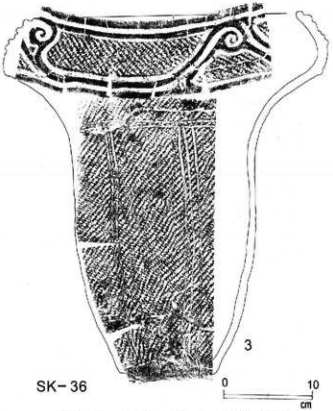
本遺構は、調査区の南側中央に位置し検出された。（上部は赤土採取の為攪乱）為遺存部は図示出来る状態ではないが確認されたものは長さ１、５ｍ、幅１ｍ程の長円形状プランを示す。掘り込みは１５ｃｍ程で底面は平坦、締りはある。

覆土は暗褐色、褐色の２層で自然埋積状層序を示す。

遺物は、口縁部キャリパー状の中峠式の口縁部６と山形突起の７が見られ隆帯部分には単節、無節？の縄が施文されている。その他浅鉢で磨消された８がある。その他磨製石器、打製石器が見られた。遺構プラン、遺物から中期中峠式期の遺構と推察される。



第３５図　ＳＫ－23、36号出土遺物実測図



第３６図　ＳＫ－36号出土遺物実測図

3　ピット（第３７図、３８図、３９図、４０図）

本遺跡からは１００基前後の遺構が確認されたが直接的に江戸時代前後と推察されるものを含めて図示し概要を述べる。各遺構共遺物は皆無に近い。プランは円形状が大半を占める。ここでは各遺構をまとめて延べ各ピット毎の説明は省く。

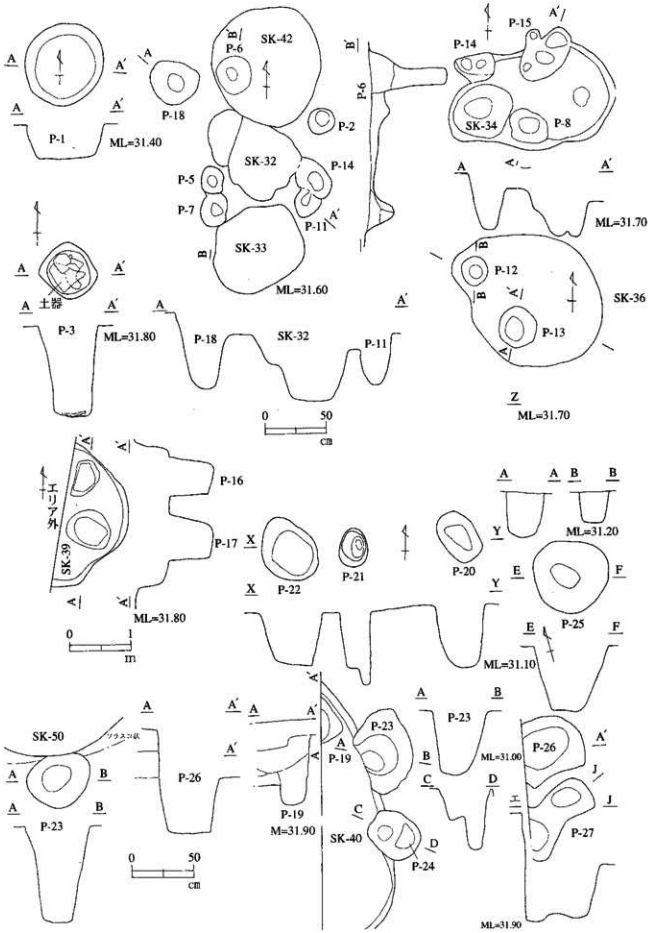
ほぼ円形状プランは１、２２、３２、３７、３８、６２、６３、７５、７６、８８が見られ、この中でも鍋底状掘り込みのもの１、３２、６２、６３、７５、７６が有り大小の差はあるが、掘り込みプラン、形態は類似する。これらは全体的に規則的な配列、位置関係は認められなかった。しいてあげれば単独的位置と土坑に近接し掘込まれるものが見られる。

次に円形で柱穴状のもの、径が３０ｃｍ以下で掘り込みが３０ｃｍ前後のものとかなり深いものとに別れる。

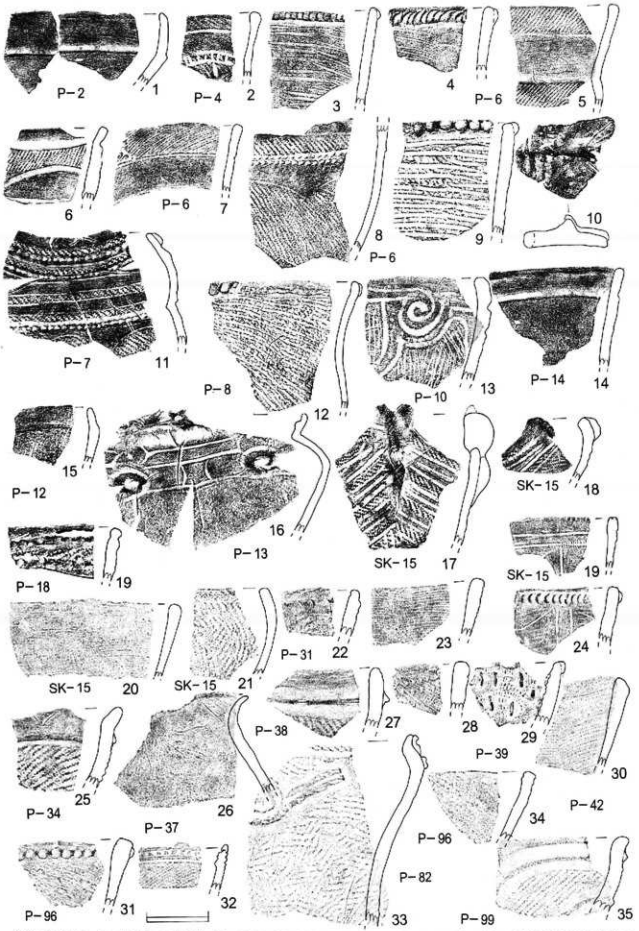
柱穴状のものは３、６、１１、１４、１６、１７、１８、２０、２１、２２、２３、２３´２５、２８、２９、３０、７３がみられる。その他（上部は赤土採取の為攪乱）の南側中央側部分に掘立遺構と思われる柱穴群が見られた。（４５から７０）柱穴状のプランには垂直に掘込むものと底部近くでやや狭くなるものとが見られる。Ｐ３、１６、１７、２３、７３等が見られ深いものは１ｍ以上のものも見られる。底部に向かって狭くなるものには６、１８、１１、１４、１９、２４、７４、９７で中には三角形状に近いものもみられる。これらは掘立遺構の一部の柱穴が推察され少なくとも数軒、または縄文時代の櫓的遺構が存在したと考えられる。

その他は、浅く小型のプランのものが２０基程存在してが時代的に特定出来ないものも多い。

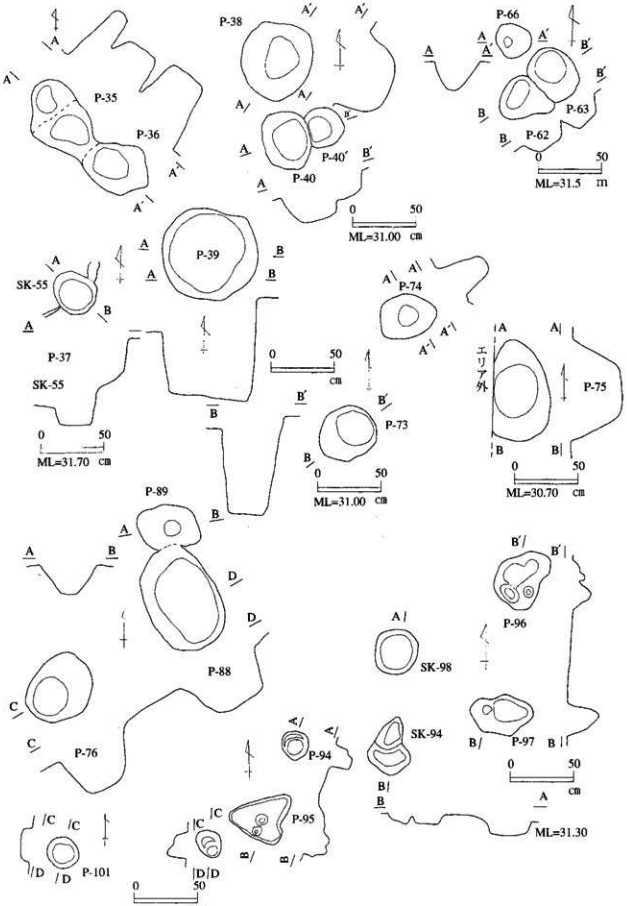
遺物は２０点程出土するものと皆無に近いものが見られた。Ｐ２は５０片で加曽利Ｅ式、加曽利Ｂ式が出土している。Ｐ３は底部から安行式３片と鳥類の骨？が見られた。Ｐ４は加曽利Ｂ式１６片出土している２～４、Ｐ５は加曽利Ｂ式が１８片、安行式９、製塩土器３が出土している。Ｐ６は阿玉台式５、加曽利Ｂ式１２片が出土している。４～１０。Ｐ７は加曽利Ｂ式２片、１１。Ｐ８は加曽利Ｂ式１００片、鳥の骨が見られた。１２。Ｐ８は安行式１片。Ｐ１０は加曽利Ｂ式が１８、安行式が９片。Ｐ１１は堀ノ内式が１０、加曽利Ｂ式が３３片、第３８図１３。Ｐ１２は加曽利Ｂ式が１６片で第３８図１５。Ｐ１３は加曽利Ｅ式１０片、堀ノ内式１０片、加曽利Ｂ式２０片で第３８図１６。Ｐ１５は加曽利Ｂ式が３０片で第３８図１７～２１。Ｐ１６は加曽利Ｅ式１１、加曽利Ｂ式５片。Ｐ１８は加曽利Ｂ式１３、安行式２３片。Ｐ２０は加曽利Ｂ式１３、安行式２。Ｐ２１は加曽利Ｅ式３、加曽利Ｂ式３。Ｐ２３は加曽利Ｅ式３、加曽利Ｂ式４。Ｐ２４は浮島式１。Ｐ２５は加曽利Ｂ式２３。Ｐ２６は加曽利Ｂ式７。Ｐ２７は阿玉台式６、加曽利Ｅ式５、称名寺式５、加曽利Ｂ式１０等が出土。Ｐ２８は堀ノ内式１２、加曽利Ｂ式２０が出土。Ｐ２９は加曽利Ｂ式１２。Ｐ３０は加曽利Ｂ式８。Ｐ３１は加曽利Ｂ式１４、安行式８。第３８図２２～２４。Ｐ３３は加曽利Ｅ式３、安行式２。Ｐ３４は加曽利Ｅ式１０、加曽利Ｂ式６。第３８図２５。Ｐ３５は加曽利Ｅ式５。Ｐ３６は加曽利Ｅ式６、加曽利Ｂ式４。Ｐ３７は加曽利Ｂ式２８、第３８図２６。Ｐ３８は加曽利Ｅ式９、第３８図２７、２８。Ｐ３９は関山２、加曽利Ｅ式５、第３８図２９、Ｐ４０加曽利Ｂ式７、安行式２１。４２は堀ノ内式１２、加曽利Ｂ式３０、安行式２７。第３８図３０。Ｐ５９は加曽利Ｅ式１。Ｐ４８は堀ノ内式２。Ｐ６０は阿玉台式２、加曽利Ｂ式２。Ｐ６１は加曽利Ｅ式３。Ｐ４９は加曽利Ｅ式２、堀ノ内式２。Ｐ５０は加曽利Ｅ式１。Ｐ５１は加曽利Ｅ式３、加曽利Ｂ式５。Ｐ５２は関山式１。Ｐ５６は加曽利Ｅ式３。



第３７図　Ｐ－1～27号実測図



第３８図 P－2、4、6、7、8、10、11、12、13、15、31、34、37、38、39、44、82、96、99号、SK－15号出土遺物実測図



第３９図Ｐ－35、36、37、38、39、40、40′、63、65、73、74、75、76、88、89、90、94、95、96、97、98、101号実測図

Ｐ５９は加曽利Ｅ式１。Ｐ６７は堀ノ内式４。Ｐ６８は阿玉台式３。Ｐ７０は阿玉台式４。Ｐ７８は堀ノ内式４、加曽利Ｂ式５。Ｐ８１は加曽利Ｅ式４、堀ノ内式１４、加曽利Ｂ式１０、安行式１１、須恵器１。Ｐ８２は加曽利Ｅ式１１、加曽利Ｂ式１６、安行式４。Ｐ８３は加曽利Ｅ式２０、堀ノ内式１８、加曽利Ｂ式３０、安行式６。Ｐ９４は中峠式２、堀ノ内式７。Ｐ９６は堀ノ内式２、加曽利Ｂ式７。Ｐ９７は加曽利Ｅ式１３、堀ノ内式４が出土遺物の概略でせある。大筋では少ないが中には投げ込み的に多量に出土した遺構も見ら、土坑扱いしても良いものも見られる。又鳥類の骨の埋設されるものもみられ、各ピットの性格を考察する余地がある。

4　1号溝？　（第４１図）

本遺構は、調査区中央部の西側からエリア外に位置し認められたもので溝として調査したが溝とは断定出来ず整理の段階で遺物、覆土等から掘立遺構の掘り下げの一部の可能性が考えられた。覆土は単純であったが東側は（上部は赤土採取の為撹乱）のため不明。北側は鋭角に切れており長屋状形態の掘り込み式の建屋の可能性が強い。西側の部分がエリア外になるために不明な点が多い為断定は出来ないが長さ１５ｍ前後で幅は推定５～６ｍ前後の可能性がある。

遺物は多量に出土している。阿玉台式１００片、加曽利Ｅ式３５０片、中峠式５０片、称名寺式１００片、堀ノ内式　３００片、加曽利Ｂ式６００片、安行式３００片、安行Ⅲ式１１０片、姥山式５０片、石器７、土器片錘８、土偶１、石棒２と多様な遺物が見られる。後期から晩期にかけての遺物が多く安行系の晩期の土器が大半で東北の大洞系の土器は見られなかった。再検討し吟味すれば何点かは異系統の土器が見られる可能性はある。土偶は顔を抽象化したもので無いと言えば言えない事も無い。

石棒は折れた部分のみで肝心の部分は欠失している。その他磨り石、石器が出土している。土器片錘は総じて軽いものが多い。１０～１５グラム。

5　粘土張土坑

本遺跡からは粘土張りの遺構が４基検出されいずれも方形状プランで特別な偏在を示さず多方面から単独で検出され規則性は認められなかった。

１号粘土張土坑　（第４２図）

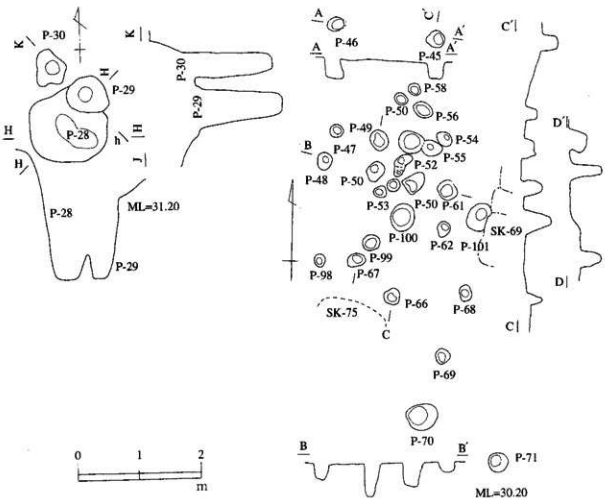
本遺構は、調査区南側西よりに位置し検出された。１号溝とした部分からで長さ１．１ｍ、幅１ｍで方形状プラン。掘り込みは１５ｃｍと浅く底面はゆるくほうろく状形態で覆土は暗褐色と砂質粘土の交じる褐色で締りは弱い。底面、壁面は５ｃｍ程の厚さで粘土が張られている。

遺物は皆無で時期を特定出来るものは無いが遺構プラン、形態から内耳土器の時期、江戸時代前後が推察される。

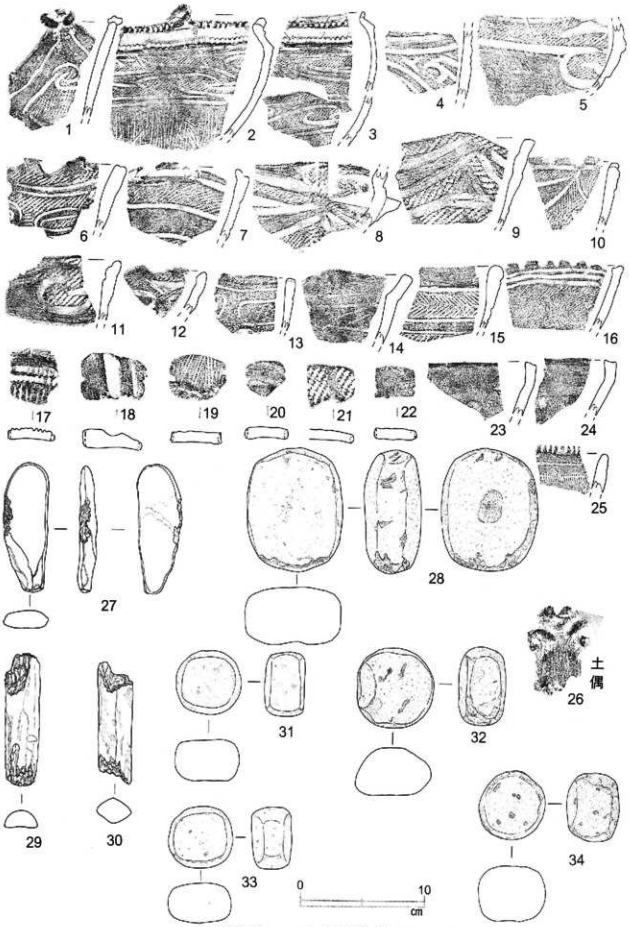
２号粘土張土坑（第４２図）

本遺構は、調査区の南側の１号溝との境部分に位置し検出された。長さ１．１５ｍ、幅７．５ｍの長方形プランを呈する。掘り込みは皆無に近く粘土部分のみで立ち上がりは無い。したがって遺物も覆土も存在しなかった。青白色の粘土を用いている。

時期は前述のものと同様と考える。



第４０図Ｐ－28～30、45～72、98～100号実測図



第41図SD－1号出土遺物実測図

７号、粘土張土坑　（第４２図）

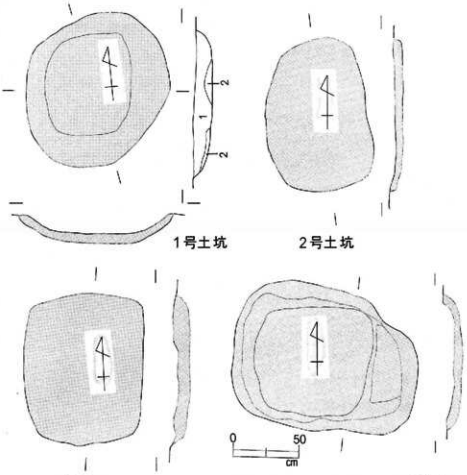
本遺構は、調査区の北側やや傾斜を示す位置に検出された。貝塚の至近である。本遺構も底面の粘土部分のみで立ち上がりは無い。粘土は１３ｃｍ程を測りやや厚い。長さ１．１５ｍ、幅６０ｃｍの長方形プランと推察される。

本遺構も覆土は皆無のため遺物も皆無である。

７１号粘土張土坑（第４２図）

本遺構は調査区の南側、東よりに位置し検出された。（上部は赤土採取の為撹乱）で撹乱層を除去し確認された遺構で東西に長いプランである。長さ１．４ｍ、幅１．１ｍでわずかに覆土をもつが大半は撹乱土で遺物は皆無で底面のみと言っても過言では無い。

遺構プランから４基とも差程の時間差をもたない土坑群と推察する。江戸期のものか？



No.	色 調	含 有 物	粘性	締り
1	黒褐色	粘土粒.ローム粒を極少量	やや有り	弱 い
2	黒褐色	粘土粒子を少量含む	やや有り	やや有り

第４2図　ＳＫ－1、2、7、71号実測図

第5節　貝　塚

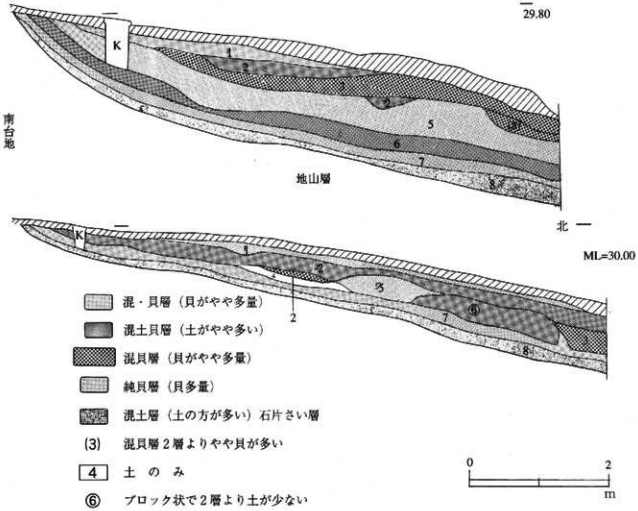
本遺跡北側には遺跡を囲むように谷津が入り込み、この斜面部に約２０ｍ×３０ｍ程の規模をもつ若海貝塚Ｂ地点が所在している。本調査ではＢ地点の一部がバイパス部分にかかり、この部分の切り土になる部分のみの調査で、貝塚全体の１０分１前後と推察する。（地主の談話）

なお、本地点は盗掘や、慶應義塾高校考古学会の調査（注１）がなされたと言われる。以下、貝層層序、出土遺物、貝種、人骨、魚骨、哺乳類の順に後述する。

（注１）1952. 茨城県行方郡現原村. 若海貝塚発掘調査報告書

1　貝層層序　（第４３図）

本貝塚の調査地点は東側部分で西及び北側に傾斜を示し西側に従って角度は強くなる。西側エリア境界部分での層序は４３図の上で傾斜角度は弱い。上部は以前畑として利用されており撹乱、耕作土下側から貝層が確認された。８層の地山層の上は混土貝層で貝は摩滅、磨耗し原型を留め個体数が計測出来るものは少ない。上端から全体に５ｃｍ～２０ｃｍ程で下位部分に向かって厚さ増し推移。上図部分は３０ｃｍと厚い貝層。



第４３図　貝　塚　層　序

7層は、純貝層に近い層が西東共見られ厚さは最高で２０ｃｍを計測し、比較的流れはスムーズに推移し下層に添って見られる。土、土器、獣骨等の混入は少ない。

6層は、やや土の混入は多いが貝は多量で西側では最高３０ｃｍの厚さをもち凹凸はあるがほぼ調査区全区で見られる。東では下部に見られ純貝層下に埋積する。

5層は、純貝層で僅かに土が混入する。下部程厚さをもち５０ｃｍ前後を測る。下層にそってかなり圧巻な層で推移し、東側では中程に（あんこ状）に３０ｃｍ程の厚でブロック状に埋積する。

4層は、土が多量な層で貝が少量混入する。これもあんこ状で厚さ１０ｃｍ、長さ１．６ｍと薄く短い。東側では貝がやや多くなる。

3層は、混土貝層で土がやや多い。上図では途中から始まり最高３０ｃｍを測り、下図では中程、下部に厚さ３０ｃｍ程の厚さで埋積する。（3）は撹乱埋積状態で変則的。

2層は、混貝土層でやや土が多い層で上図では中程部分にブロック状に見られる。3層下にも小ブロックが存在する。東側では厚さは不規則ながら上端から下位に推移し厚さは２０ｃｍ程を測る。

1層は、混貝層で貝がやや多量で西側では南側中央よりに２０ｃｍ前後の厚さをもち中葉で欠失する。東側では途中から入り調査区手前で消滅する厚さは５～１０ｃｍで推移している。

調査区域は総じて撹乱の無い良好な貝塚と理解したい。（一部に撹乱気味の部分が存在する）

2　出土土器

本貝塚からは総数約４，３８０点の土器が出土した。以下各層毎に出土土器について述べる。
Ⅰ群の土器を阿玉台式、Ⅱ群土器を中峠式、Ⅲ群土器を加曽利Ｅ式、後期の称名寺式をⅣ群、加曽利Ｂ式をⅤ群とする。その他は貝塚からは検出されない。
なお本土器群については断面図のみ実測で予算、時間等から写真図版と断面図番号と同一とした。

1　層

本層では遺物は少なく写真図版にすべき良好な土器は検出出来なかった。魚骨、獣骨等は他層に比べて少なく僅かに魚、獣、鳥骨が見られたに過ぎない。貝はハマグリ主体の層であった。

2　層

本層でも遺物は少なく深鉢の底部、加曽利Ｅ式の口縁部キャリパーの土器が見られたが割に少なく後期Ⅳ群土器の胴部沈線区画の充鎮縄文、磨消の破片が２割程見られた。総数１００片程で細片が多かった。本層は後期に形成を見た可能性が高い。

3　層　（第４４図）　写真図版　１０、１１

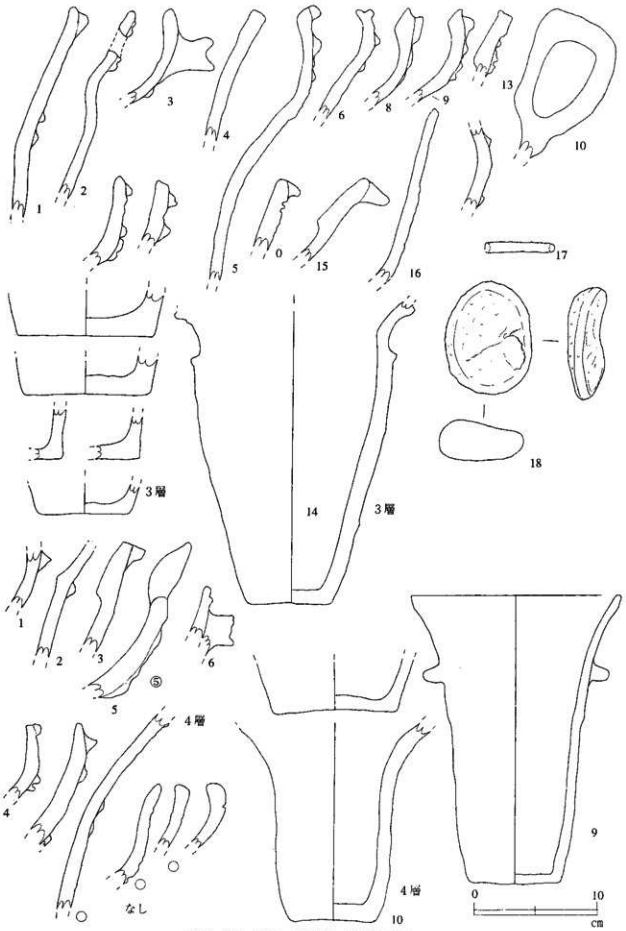
本層では約５００片程の土器が見られた。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群土器が主であった。

Ⅰ群土器

本群は非常に少なく１割程で図示する程のものは無い。口縁部はやや外反気味で胴部は円筒形状、底部はやや張り出す感じで角押文や有節線文がみられる。また、無文の浅鉢がある。

Ⅱ群土器は多く口縁部が弱いキャリパー状で隆起線を主体に波状や指頭押圧状の文様構成が見られ胴部、底部は不明で約１割程出土している。

Ⅲ群土器は口縁部が大型の環状吊り手をもつものと、口縁部が平縁で隆起線文で区画するものと渦巻状文を配するものがあり、胴部は円筒形からやや胴下位で弱く張る形態に変化している。



第４４図　3層、4層出土土器断面図

これらは１、２、３式への変化で、本層では口縁部が磨消、微隆起線文の土器は皆無に近く平坦部の土坑の中でも本類は皆無に近い。口縁部が外反状で有節線文のものと沈線で胴部上半部が張り底部に向かって三角形状の後期に近い器形もみられる。その他底部欠矢の大型の環状吊り手を持つ１０があり隆起線文で区画、器面磨消の浅鉢１５もある　底部は、直立気味のものとやや外反気味のもの、器肉の薄い小型で開き気味のものが見られ雲母を含む。加曾利ＥⅡ式が主体の貝層である。

Ⅳ群土器　以下の土器群からは後期の土器でほぼ皆無であった。

４　層　（第４４図）　写真図版　１１、１２

本層では約６４０片程の土器が出土している。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ群土器が主であった。

Ⅰ群土器

本土器群は総数１５０片程見られ頸部が開く器形で隆起線文、角押文を主とした文様構成で雲母を含む。（１、２）無文の浅鉢（３）も見られる。阿玉台Ⅱ式末の土器である。

Ⅱ群土器

本土器群は総数６０片程で図示できる良好な遺物は無い。隆帯に縄をもつものが多い。

Ⅲ群土器　（第４５図）　写真図版　１２

本土器群は総数４１０片程で隆起線文、山形状突起、波状口縁部を持つ深鉢の器形が主で口縁部は弱いキャリパー形態である。その他本群に付随すると思われる粗製の口縁部が外反し頸部に隆帯を持つ土器９が存在し、器形は小型の深鉢形態であり雲母は含まない。

Ⅳ群土器

本群の土器は総数２０片程でⅤ、Ⅵ群土器を含む。総じて小破片で図示出来る遺物はなかった。本貝層の形成は中期が推察出来る。

５　層　（第４５図）　写真図版　（１３、１４、１５、１６）

総数１，０００片とかなり多量であり貝類も同様であった。

Ⅰ群土器

本土器群は約２００片とやや多く阿玉台Ⅱ式が主である。１、１０、１２、１３で口縁部は隆起線に添って有節線文、角押文等が施文されるものが圧倒的で器形は頸部から弱く開き、または外反する。胴部は円筒状形態が多い。雲母をかなり含み色調は淡い赤褐色、黒褐色である。浅鉢で器面を磨消するものも５片程見られた。

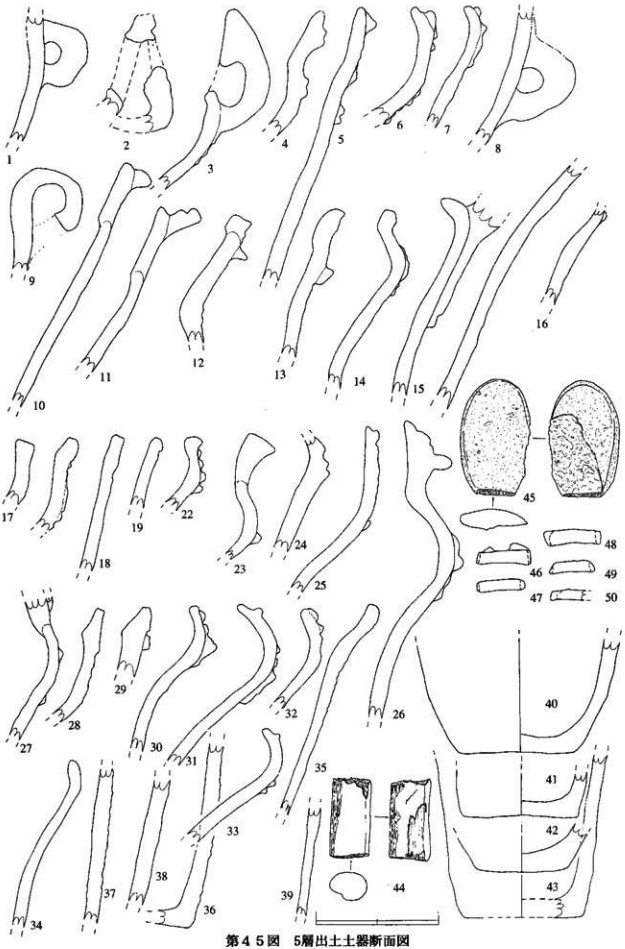
Ⅱ群土器

本土器群は約２０片程出土しているが図示出来る遺物は無い。

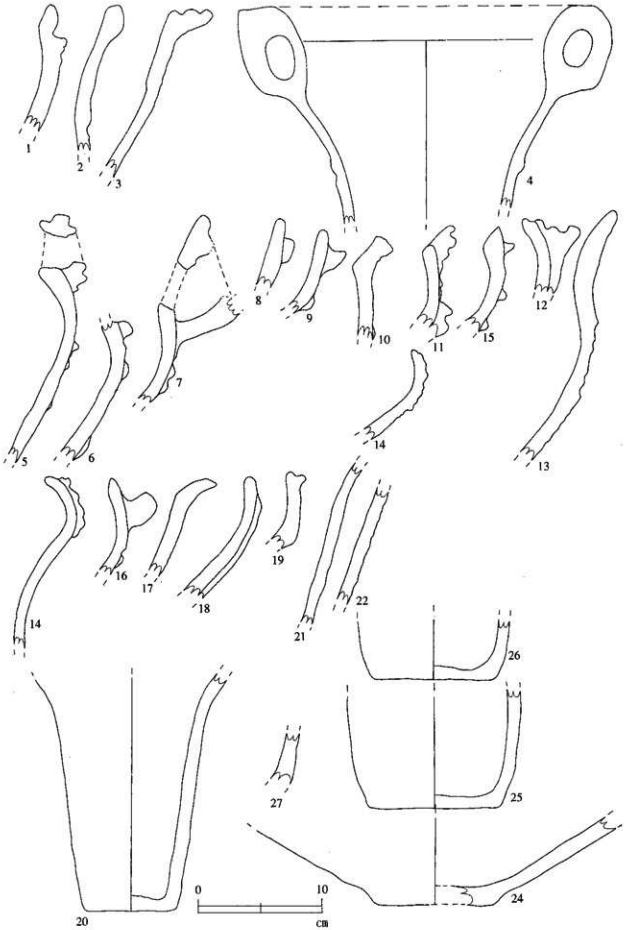
Ⅲ群土器

本土器群は約７７０片程出土し口縁部がキャリパー状形態で山形突起に大型の吊り手を持つ２、３、８、９と波状口縁の４、２６があり口唇部は開き隆起線で波状、渦巻きで文様を構成する一群が１割程見られた。又隆起線に指頭状押圧を加える中峠式に近い５が有り胴部は円筒形に近い。数量的には２０片程である。同様な器形を呈し隆起線を２本配列し区画する大木系の土器も１割程見られた。

口縁部キャリパーで突起部に渦巻、隆起線で窓枠状区画する１４と平縁の６、７、３０、３１が多数で３割程を占め本土器群が主体的土器と推察される。（加曾利Ｅ式）



第４５図　5層出土土器断面図



第４６図　6層出土土器断面図

底部は、円筒形でやや直立気味とやや開き気味のものが見られるがいずれも器形的には円筒形態である。（３６、３７、３８）

その他小型の深鉢で口縁部が外反する３５や磨消部を持つ３４は口縁部は強く内傾し沈線で文様を構成する（３３、３５）と口縁部に隆起線を貼付する１８、１９がみられる。胴下半部はほぼ円筒形で３６、３７、３８が有り３本単位の沈線、ワラビ状沈線、縄のみの３系統がある。その他土器片錘、石器、石棒等が出土している。

Ⅳ群土器

本土器群は少なく図示したのは３９のみで称名寺式の胴下半部で総数８片程である。沈線区画で磨消、底部は三角形状に近くなる器形である。

各群を相対的にみて胴部の占める割合が５割に近く、底部が２割、口縁部が２割でその他頸部や特定不能（細片の為）が２割を占める。

６　層　（第４６図）　写真図版（１４、１７、１８）

本層土器群は総数７６０片程出土した。大きく３群に分けられる。

Ⅰ群土器

本土器群は少なく１２０片程である。隆起線と角押文、有節線文、又は山形突起と沈線よる施文の１と２、３がある。雲母を含み黒褐色に近い色調。相対的には前者の隆起線系の土器が圧倒的に多い。後者は１割前後と少ない。底部は浅鉢の２２がある。器面は磨消し雲母を含み黒褐色。阿玉台Ⅱ式末。阿玉台式は本層の主体的土器ではない。

Ⅱ群土器

本土器群は総数３２片と少なく図示出来る遺物はなく辛うじて本土器群は土器が存在することが確認出来たに過ぎない。

Ⅲ群土器

本土器群は総数４２５片と多く本層の土器群の中で主体を占める。口縁部に大型の吊り手を持つ４、５、７がある。５、６は大木系の土器で隆起線を主体にした渦巻、窓枠状区画をもつ、本例は５０片前後と少ない。７は加曽利ＥⅡ式の口縁部で大型の吊り手には隆起線による区画が主文様で本例は２０片と少ない。１３も同様で口縁部は弱く開く形態で大型の山形突起をもつ。主文様は沈線区画の渦巻文と窓枠状文で縄文を充填する。本例は少なく１５片程であった。その他胴部上から遺存する４は口縁部は開き気味で一対の吊り手をもち他方には平縁の横位に孔をもつ。隆起線が４単位で窓枠状に巡る。加曽利ＥⅠ式に当たるものである。

口縁部キャリパーで隆起線で文様を構成する８～１８は典型的な加曽利ＥⅡ式の土器群で本土器群の大半を占め、口縁部は弱い波状で胴部は円筒形形態。底部は２４～２７が見られた円筒形で同下半部でやや括れ気味。逆に言えば下半部が弱くつぼむ。

本土器群が本貝層の主体的な時期と思考する。Ⅳ群土器は検出されない。

７　層　（第４７図）　写真図版　１９

本層土器群は総数５７０片が出土している。大きく２群に分けられる。

Ⅰ群土器

本土器群は４０片程確認された。図示出来る土器１のみ。前述の６層の土器と大差は無く胴部破片が大半で口縁部は少なかった。隆起線、有節線文、角押文をもつ。

Ⅱ群土器

本土器群は３０片と少なく細片で図示出来る遺物は無い。

Ⅲ群土器

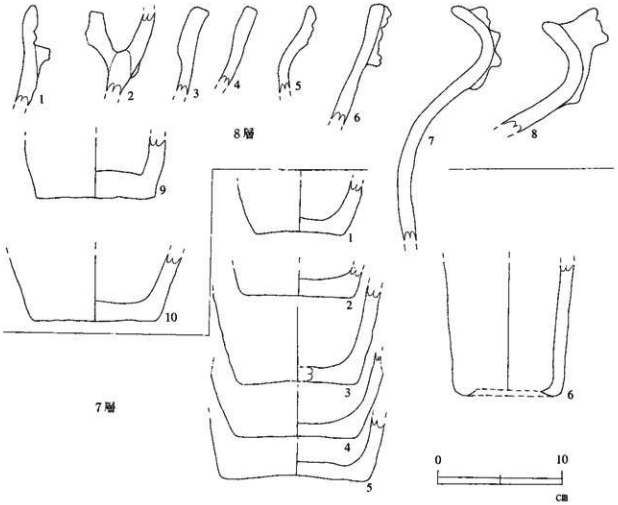
本土器群は５００片と多く本層の主体的土器である。口縁部は大型で山形の吊り手を持つ一群の土器で口縁部は弱いキャリパー状で隆起線で区画する大型の深鉢群。全体の１割前後を占める。（写真図版１９）

口縁部キャリパーで隆起線で窓枠状区画、渦巻文で頸部から上部に主文様帯が構成されるものが大半で平縁、弱い波状等バラエテーに富んでいる。胴部は円筒形器形。

Ⅳ群土器

本土器群は３０片と少なくいずれも細片で図示したのは１４の口縁部で磨消部に沈線区画で縄文を充填し弱い波状形態である。

本土器群は本層では少なく皆無に近い。一部撹乱気味の部分からの出土であった。



第４７図　7、8層出土土器断面図

8　層　（第４７図）　写真図版　２０

本層土器群は総数３５０片程が出土している。大きく２群に分けられる。

Ⅰ群土器

本土器群は１５０片程出土している。図示した１～５が本類で山形の突起を持つものと隆起線に爪形文を配する１、２が見られ本土器群がやや多い。浅鉢の器形と推察される５は磨消され無文。口縁部は外反する。本類は１割前後と少ない。全体の４割前後を占める。

Ⅱ群土器

本土器群は口縁部外反気味の６が見られる加曾利ＥⅠ式で隆起線で渦巻文、又間に爪形文が見られる大型の深鉢であり本例は１割前後見られた。７も同様で隆起線で渦巻状、爪形文等が見られ口縁部は弱く内傾する。本例も２割前後の出土で図示しなかったが口縁部キャリパーが大半を占める。相対的には阿玉台Ⅱ式が全体の４割前後を占め本貝塚の初現は出土土器から前述の時期が想定されほぼ加曾利Ｅ式期に形成されたと推察される。底部は図示したように円筒形、又はやや開き気味の器肉の厚いものが大半を占めた。以上が本貝塚から出土した土器群の様相である。

小　結

１割前後の調査範囲で多くは語るべく資料は少ないが、本調査で見られた貝塚の性格の一端を簡単に述べてみたい。本貝塚の土器群は阿玉台Ⅱ式から確認され終末は後期の称名寺式である。主体は加曾利ＥⅠ～Ⅱ式で各層の大部分を占めている。

８層の最下層ではⅢ群土器の加曾利Ｅ式が主体、僅かにⅠ群土器の阿玉台Ⅱ式、Ⅱ群土器の中峠式が５％前後で混入し大木系の土器が見られる。中期の土器のみで後期の土器は皆無である。

７層では攪乱？かと思われる部分から後期称名寺式が小量出土しているが本土器群は、主体的な土器では無い。本層でも主体は加曾利Ⅰ～Ⅱ式でありⅢ、Ⅳ式は皆無で８層も同様な土器の様相が見られる。阿玉台式、中峠式も同様な様相を呈している。

６層でも同様な土器の出土状態であるが貝層の堆積状態で数量に変化が見られ本土器群は東側では貝層が少ない。したがって土器の出土も少ない。本層の土器群も７層と大差が無い。後期の称名寺式が僅かに見られた。Ⅰ群土器もやや多く認められる。

５層は、Ⅲ群土器が主体でⅡ式が７７０片と大半を占める。本土器群は口縁部キャリパー状で隆起線による区画、波状文が施文され口縁部は大型の吊り手、弱い波状を呈するものが見られる。６層とは量的にやや差が見られる。

４層は、土器が６４０片で全体的に各群共少ない。Ⅰ群土器は１５０片程出土している。いずれもⅡ式土器、Ⅲ群土器は４１０片と少ない中でも多い。本土器群に小型の深鉢で外反する土器が３個体分程認められた。Ⅳ群土器は２０片程見られたが図示出来る程のものは無い。

３層ではⅢ群土器が主体で４層に近い土器群構成で器形的にも大差が無い。Ⅳ群土器はほぼ皆無に近く細片が極小量認められたに過ぎない。２層は、土器総数１００片と少なく貝層主体の層である。加曾利ＥⅡ式が中心の土器構成でⅠ、Ⅲ群土器が極小量見られた。

１層は純貝層に近く土器の出土は少なく図示する程の遺物は少ない。Ⅲ群土器のⅡ式が大半で後期のⅢ群土器が小量見られた。以上が概略である。平坦部にはⅠ群、Ⅱ群土器、Ⅳ群土器もかなりの遺構と遺物が見られたが貝塚部分では皆無であった。これらの状況から遺構と貝塚は時期

に差がある事が理解される。つまり貝塚は加曽利E式の一時期、期間に形成を見たと理解される。
3層からは人骨がほぼ完全に近い状態で検出されている。子細は人骨の項で述べる。

3 土 製 品 （表1）写真図版 21

本土製品は遺跡からは土偶2、土器片錘61点が検出された。いずれも特別な出土位置、状態は無い。部分的に土坑の中で5点、9点とまとまって出土する例もあるが特徴は見いだせない。溝状？遺構から土偶が出土している。（2表参考）

遺 構	重 さ	備 考	遺 構	重 さ	備 考	遺 構	重 さ	備 考
SK- 3	18 g	完 加E	SK-30	14.8 g	完	SK-51	7 g	半 欠
SK- 3	14 g	完 加E	SK-30	13.8 g	完	SK-51	9 g	一 部 欠
SK- 3	22 g	完 加E	SK-30	9 g	一 部 欠	SK-51	10 g	一 部 欠
SK- 3	11 g	やや小型	SK-31	13.8 g	完	SK-54	15 g	完
SK- 3	16 g	半分欠失	SK-32	15 g	完	SK-55	22 g	完
SK- 4	39 g	完	SK-33	11 g	一 部 欠	SK-62	34 g	完
SK- 4	19 g	完	SK-34	18 g	完	SK-62	10 g	完
SK- 4	12 g	一 部 欠	SK-35	11 g	一 部 欠	SK-62	9 g	一 部 欠
SK- 4	13 g	完	SK-36	15 g	完	SD- 1	15 g	一 部 欠
SK- 5	27 g	完	SK-38	20 g	完	SD- 1	35 g	完
SK- 5	19 g	完	SK-43	10 g	半 欠	SD- 1	20 g	完
SK-10	35 g	完	SK-43	21 g		SD- 1	10 g	一 部 欠
SK-12	33 g	完	SK-50	20 g	完	SD- 1	20 g	完
SK-12	19 g	半分欠失	SK-50	15 g	一 部 欠	SD- 1	11 g	完
SK-16	19 g		SK-51	20 g	完	貝塚		
SK-20	9 g	完	SK-51	20 g	一 部 欠	5層	29 g	完
SK-21	19 g	完	SK-51	14 g	一 部 欠	5層	30 g	完
SK-22	30 g	完	SK-51	20 g	完	5層	11 g	完
SK-23	11 g	一 部 欠	SK-51	12 g	半 欠	5層	13 g	完
SK-29	25 g	完	SK-51	18 g	一 部 欠	5層	11 g	半 欠

第1表 土器片錘一覧

第6節　貝　類　遺　体

本貝塚の調査によって得られた貝類は、土嚢袋で１，１５０袋であった。これを水洗い、選別、数量確認、貝種の同定作業をすすめた。

現場では５mmメッシュの篩で選別し、下に落ちた土をさらに２mmメッシュの篩によって選別した。層位は上から堆積順に番号を付けた。また、特別な場合は大きな番号を付した。

貝類の同定には、標準原色図鑑全集３貝を用いた。その他、麻生町於下貝塚発掘報告書、上高津貝塚Ａ地点発掘調査報告書、鳥浜貝塚（福井県教育委員会）を参考にした。

本貝塚については、川崎純徳氏の茨城における貝塚調査の現状、県史研究３７がある。

玉造町若海貝塚は、梶無川東岸の支谷最奥地の谷頭部に大規模な貝殻の散布が６ヶ所見られる。貝塚の規模は大きく、遺跡の領域は広大である。時期的には中期阿玉台期から後期、晩期初等におよんでいる。時間的には、相当長い期間生活の場として利用された台地である。

1　種名の同定

本貝塚の貝種については、筆者の知る限り特別な貝種の出土類はない。

今回の発掘調査によって、出土した貝類を同定し次に示した。腹足類網１６種、堀足網２種、斧足網２０種で合計３０種である。２枚貝は左右の殻頂、殻長、重さの計測を行い、それぞれの数量を数えた。破損は個体として数を数え欠とした。巻貝では殻軸の遺存しているものはすべて数に数えた。（図版２１）

若海貝塚出土貝類種名一覧

腹　足　類	Class GASTROPODA
ニシキウズガイ科	Family Frochidae
１．ダンベイキサゴ	Umbonium (Suchium) giganteum (Lesson, 1831)
２．イボキサゴ	Umdonium (Suchium) moniliferum (Lamarck)
リュウテン科	Family furdinidae
３．スガイ	Lunella coronate coreensis (Rrecluz, 1853)
カワニナ科	Family Pleuroceridae
４．カワニナ	Semisulospira lidertina (GMELIN)
ウミニナ科	Family potamididae
５．フトヘナタリガイ	Cerithidae rhizophorarum (A. Adams, 1855)
６．ヘナタリガイ	Cerithideopsilla cingulata (GmeLin, 1791)
７．カワアイガイ	Cerithideopsilla djadjariensis (Martin, 1899)
８．イボウミニナ	Batillaria zonalis (Brugriere, 1792)
９．ウミニナ	Batillaria multiformis (Lischke, 1869)
10．ホソウミニナ	Batillaris cumininginii
タカラガイ科	Family Cypraeidae
11．ホシキヌタ	Ponda (Mystapionda) vitellus (Linne, 1758)

タマガイ科　Family Naticidae

12. ツメタガイ　Glosssaulax didyma (Rodig, 1798)

アクキガイ科　Family Muricideae

13. アカニシ　Rapana venosa (Vaienciennes, 1846)

14. イボニシ　Reishia clavigera (Kuster, 1860)

オリイレヨフバイ科　Family Nassariidae

15. アラムシロガイ　Reticunassaa festiva, Powys, 1835)

掘足網　Class SCAPHOPODA

ツノガイ科　Family Dentaliidae

16. ヤカドツノガイ　Antalis weinrauffi (Dunker, 1877)

17. ツノガイ　Antalis weinrauffi (Dunker, 1877)

斧足網　Class PELECYPODA

フネガイ科　Family Arcidae

18. アカガイ　Scapharca buoughtonii (Sshrenck, 1867)

19. サルボウガイ　Scapharca subcrenata (Lischke, 1869)

20. ハイガイ　Tegillarca granosa (Linnaeus, 1758)

イガイ科　Family Mytilidae

21. イガイ　Mytilus coruscus (Gould, 1861)

イタヤガイ科　Family Pectinidae

22. イタヤガイ　Recten (Notovola) aldicans (Schroter, 1802)

ナミマガシワガイ科　Family Anomiidae

23. ナミマガシワガイ　Anomia chinensis (Philippi, 1849)

イタボガキ科　Family Ostreidae

24. マガキ　Crassostrea gigas (Thznberg, 1793)

イシガイ科　Fmily Unionidae

25. イシガイ　Unio douglasiae (Griffith & Pidgeno, 1834)

シジミ科　Family Cordiculidae

26. ヤマトシジミ　Cordicula japonica (Prime, 1864)

マルスダレガイ科　Family Veneridae

27. ハマグリ　Meretrix lusoria (Roding, 1798)

28. カガミガイ　Desinordis (Phacosoma) japonicus (Reece, 1850)

29. オキシジミ　Cyclina sinensis (Gmelin, 1791)

30. アサリ　Ruditapes philippinarum (Adams & Reeve, 1850)

バカガイ科　Family Mactridae

31. バカガイ　Mactra chinensis (Pcilippi, 1904)

32. シオフキガイ　Mactea veneriformi (Reece, 1854)

33. ミルクイガイ　　Tresus keenae (Kurouda & Hade, 1952)

アシガイ科　　Family Psammobiidae

34. ムラサキガイ　　Hiatula diphos (Linnaeus, 1771)

ニッコウガイ科　　Family Tellinidae

35. ヒメシラトリガイ　　Macoma incongrrna (V. Martens, 1865)

マテガイ科　　Family Solenidae

36. マテガイ　　Solen strcus (Gould, 1861)

オオノガイ科　　Family Myidae

37. オオノガイ　　Mya (Arenomya) renaria oonogai (Makiyama, 1935)

本貝塚の出土貝類をその生態的特徴から検討すると、大部分が内湾性であるが、一部外洋性と淡水性のものを含んでいる。それぞれの群衆に属する貝類とその生息環境を地理的位置で考えると、次表のようになる。貝塚出土貝類は、主として内湾中央部の砂底に生息する内湾砂底群衆と内湾の湾奥部の砂泥質の干潟に生息する干潟群衆に分類できる。そして、ハマグリが全体の4割を占め、小型である。当時の若海地域の生活環境の様相が推定されよう。

水域	沿岸水			内湾水						淡水
位置	湾の外側			湾口部	湾中央部		湾奥部		河口	潮沼・河川
低質	岩礁	砂泥質	砂質	岩礁	砂質	シルト～砂質	砂泥質		砂泥質	砂泥質
	外洋岩礁性群生 スガイ イボニシ イボイ	松岸砂泥群生 ツノガイ セコボ ツノガイ イチヤガイ ムラサキガイ	松岸砂泥群衆 ダンベイキサゴ ハマガイ	内湾砂礁性群生 スガイ イボニシ ナミマガシワガイ	内湾砂底群衆 イボキサゴ ツノミガイ チルボ ガイ ハマグリ カガミガイ アサリ シオフキガイ ミルクイガイ ヒメシラトリガイ マテガイ オオノガイ	内湾泥底群生 アカニシ アゴガイ	干潟群衆 ヘナタリガイ カワアイガイ イボウミニナ クニナ ホソウラミニナ フラムシロ マガキ オキシジミ アサリ	干潟域群衆 フトヘナトリガイ ヤマトシジミ	淡水域群生 カワニナ イシガイ

第2表　貝の生育環境

貝　類　（第３、４表）

本貝塚では各層を通じ卓越するものはハマグリで全貝類の７０％を占める。以下各貝種の概要を述べる。貝層の堆積状態では時間的経過は短いと考えられる。

二枚貝

ハマグリを代表とする二枚貝はシオフキ、サルボウ、アカガイ、カカミガイ、バカガイ、オキシジミ、アサリはかなりの出土を見た。特に層によってサルボウがかなりのウエートを占める層も存在した。又オキシジミの卓越する層も見られる。オオノガイも僅かずつ検出されている。ヤマトシジミはかなり多量に出土している。マガキは小型であるが各層からまんべんなく見られた。大型のものも４点程検出され搬入品か？。

各貝種共小型で特にハマグリは相対的に２～８㌘が圧倒的である。

巻　貝

巻貝ではアカニシが圧倒的であるが、小型で数量的にも少ない。各層から不変的に見られた。その他イボウミニナ、アラムシロがやや多く出土し特にウミニナ、ホソウミニナ、ウミニナ科はかなり多量である。ダンベイキサゴ、イボニシ、カワニナ、ホシキヌタ等は少なく１割以下の量である。食生活の関係では無くこれら干潟群集に属するものは、可食部分の関係から価値的に採集しなかった可能性もある。

その他カワニナは小量ながら大型のものが多く各層からまんべんなく出土している。マシジミは皆無に近い。

小　結

本貝塚の貝類は内湾の砂質性の砂底群生するハマグリが当時の生活環境の中で特に採集可能で利用価値の高いものであった事が裏づけられよう。又当時の自然環境がハマグリの生育に適していた事がうかがえる。裏がえせばその他の貝は時期によりサルボウ、オキシジミのように一部の層で高率の出現を見ることが出来る。

これらは梶無川の水位の変化により淡水化の率が変化している事が窺われ環境に応じて適時に自然を利用した生活が読み取れる。そして可食性の悪いウミニナ、カワニナ、アラムシロ等は採集は控え目と思われる。又カキ類の出現率も同様と理解される。

ハマグリの出現率は物流の観点からも吟味検討の余地がありほぼ同一時期に形成された本貝塚形成過程も更に検討分析が必要であるが時間と予算面で現調査報告に終わったことは調査者として残念である。

２　牙、貝製品

本貝塚からは貝、牙、骨製品が出土した。特に貝刃が多量で各層から相当数検出された。

貝刃は２層から２０点、３層から２３点、４層から４５点、５層から４３点、６層から３２点、７層から１０点、８層では３点の検出でハマグリの出現率とは直接相関関係は見られなかった。左右から見るとほぼ同数でさほどの差は無い。重量的には１０～２１㌘でさも多いものは１５．６㌘のものが圧倒的であった。

刃部の加工は主に貝殻の内側、内面からの押圧によって行なわれる剥離面は表面側の腹縁が多数を占める。刃部は腹縁前面にわたる前背縁、後背縁に偏るものも見られ割合は相半ばであった。素材は殻長が４０～５０ｍｍ前後の個体が多数であった。これらは使用時にもっと利用に適して

いたと理解される。

その他スレ貝と称するものも見られたが本貝殻は、使用目的等不明な点が多くこれらの位置づけ、分析は不可能であった。

3　貝　輪　（第２８回）

本貝塚では貝輪は３点のみで一部欠失したベンケイ貝の小型のものであった。これは人骨の上２層の貝層中から出土している。その他７層から２点出土している。いずれも欠失品。

その他貝製品は少なく貝の殻頂部に穿孔しているものが見られるがこれは生存中の孔の可能性が多く製品として利用したとは断定しかねるものが大多数であった。

アカニシの図版２１は貝輪としての未製品の可能性が強い。本例は総数３０個体程であった。

4　石　器

本遺跡、貝塚では石器の出土は少ない。遺構でも破損した粗製、磨製の石器が１０点前後出土しているがもっとも多いものは粗製の敲石が多数を占める。又擂石が石器のなかでは数量的に３割前後を占めている。本遺跡の特徴であろう。その他分銅形の石器が１点出土し、石錘で数量の少なさには理解しがたい面がある。各々出土遺構の遺物の中に図示した。

石質は安山岩、砂岩、緑閃紋岩、緑泥片岩等が見られいずれも川原石を加工し使用している。又雲母片岩が貝塚の中から３点出土している。いずれも施く原型は把握出来ない。石器の非常に少ない遺跡、貝塚である。その他黒曜石の細片が２片出土している。

特に注目すべき石器は無い。石族は貝塚から５点しているに過ぎない。

5　微小貝類　（第３表）

本例は数量、貝種とも相対的に少ない。陸産、海産共１５種程検出された。いずれも１mm～１ｃm前後のもので取り扱いにはピンセット等を用いた。貝種，数量を表にして数を示した。

番号	貝　種　名	１層	２層	３層	４層	５層	６層	７層	８層	計
1	シワボウタラシ	1	5	2	3	5	8	2	1	27
2	ヒカリギセルガイ	2	3	5	5	9	10	30	5	69
3	ヒメギセルガイ	5	15	40	32	80	155	13	8	348
4	オカチヨジガイ	3	2	7	3	2	5	12	3	37
5	オオコハクガイ		2			1		3		6
6	ヒメコハクガイ		12			7				19
7	ヤマグルマガイ		1	2			3		2	8
8	ヒタチマイマイ		1	4	4	23	35	80	20	157
9	カノコガイ	1	2	8	19			42	12	74
１０	ヒロクチカノコガイ		1	10	55	18	30	20	15	149
１１	イシマキガイ	10	12	36	28	15	81	35	18	205
１２	ウラベッコウガイ			3						3
１３	シマハマツボ		5	6	2	3	12	5		33
１４	ムギガイ		5	4	20	10	20		1	60

第３表　微小貝類一覧

陸産貝類種名一覧

腹足網　Class GASTROPODA

前鰓亜網　Subslass PPROSOBRANCHIA

中腹足目　Order Mesogastropoda

1．ヒダマキゴマガイ　Palaina (Cylindropaina) pusilla (MARTENS, 1877)

有肺亜網　Subclass PULMONATA

基眼目　Order Basommatophora

1．スジケシガイ　Carychium nodulsiferum REINHARDT, 1877

柄眼目　Order Styiommatophora

1．キセルガイモドキ	Mirus rjjnianus (KOBELT, 1875)
2．ヒカリギセル	Zaptychopsis buschi (KUSTER, 1853)
3．ツムガタモドキギセル	Pinguiphaedusa Platyauchen (MARTENS, 1877)
4．ヒメギセル	Vitriphaeadusa misrokeas (MOELLENDORFF, 1882)
5．オオタキコグセル	Euphaedya digonoptyx (BOETTGER, 1878)
6．オカチョウジガイ	Allopeas clavulinum kyotoense (PILSBRY et HIRASE, 1904)
7．ホソオカチョウジガイ	Allopeas pyrgula (SCHMACKER et BOETTGER, 1891)
8．ヒメコハクガイ	Hawaiia minuuscula (BINNEY, 1840)
9．オオコハクガイ	Zonitoides yessoensis (REINHARDT, 1877)
10．ヒメベコウガイ	Discosonuius sinapidium (REINHARDT, 1877)
11．ナミヒメベッコウ	Yamatochlamys vaga (PILSBRY et HIRASE, 1904)
	Satuma japodica (PFEIFFER, 19847)
12．ヒタチマイマイ	Euhadra brandtii (KOBELT, 1875)
13．ヒダリマキマイマイ	Euhadra quaesita (DESHAYES, 1840)

微小海産貝類種名一覧

	Family Neritidae
カノコガイ	Clithon faba (SOWERBY, 1936)
タモトガイ科	Family Pyrenidae
ムキガイ	Mitrella bicincta (GOULD, 1860)

層位		1 層		
種	名	左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			10
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			15
	ｶﾜﾆﾅ			20
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			78
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			38
	ｶﾜｱｲｶﾞｲ			105
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			52
	ｳﾐﾆﾅ			282
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			195
	ｳﾐﾆﾅ科			785
	ﾎｼｷｽﾀ			
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			1
	ｱｶﾆｼ			44
	ｱﾗﾑｼﾛ			
	ｲﾎﾞﾆｼ			18
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			2
	ﾂﾉｶﾞｲ			
斧足網	ｱｶｶﾞｲ			
	ｻﾙﾎﾞｳ	1165	1274	2, 439
	ｵｷｼｼﾞﾐ	46	46	92
	ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾂﾀﾞｲ			
	ﾏｶﾞｷ			
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	433	439	872
	ﾊﾏｸﾞﾘ	3556	3460	7, 016
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	20	28	48
	ｱｻﾘ	50	51	101
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	2	2	4
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ			
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	1	2	3
	ｵｵﾉｶﾞｲ	10	15	25
	ﾊｲｶﾞｲ			

層位		2 層		
種	名	左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			18
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			29
	ｶﾜﾆﾅ			26
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			97
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			44
	ｶﾜｱｲｶﾞｲ			112
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			63
	ｳﾐﾆﾅ			321
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			217
	ｳﾐﾆﾅ科			749
	ﾎｼｷｽﾀ			
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			2
	ｱｶﾆｼ			120
	ｱﾗﾑｼﾛ			99
	ｲﾎﾞﾆｼ			15
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			15
	ﾂﾉｶﾞｲ			1
斧足網	ｱｶｶﾞｲ			
	ｻﾙﾎﾞｳ	7034	7384	14, 418
	ｵｷｼｼﾞﾐ	4647	4051	8, 698
	ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾂﾀﾞｲ			719
	ﾏｶﾞｷ			1
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	3, 828	3, 524	7, 352
	ﾊﾏｸﾞﾘ	15871	13290	29, 161
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ			
	ｱｻﾘ	299	447	746
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	64	61	125
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ	902	928	1, 830
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	4		4
	ｵｵﾉｶﾞｲ	19	22	41
	ﾊｲｶﾞｲ			

第４表　貝類遺体一覧　１、２層

層位		3層			層位		4層		
種名		左	右	個体総数	種名		左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			22	腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			29
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			85		ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			55
	ｶﾜﾆﾅ			84		ｶﾜﾆﾅ			63
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			40		ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			120
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			30		ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			50
	ｶﾜｱｲｶﾞｲ			121		ｶﾜｱｲｶﾞｲ			86
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			956		ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			110
	ｳﾐﾆﾅ			72		ｳﾐﾆﾅ			374
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			95		ﾎｿｳﾐﾆﾅ			141
	ｳﾐﾆﾅ科			1,837		ｳﾐﾆﾅ科			2,262
	ﾎｼｷｽﾀ			1		ﾎｼｷｽﾀ			
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			33		ﾂﾒﾀｶﾞｲ			43
	ｱｶﾆｼ			41		ｱｶﾆｼ			
	ｱﾗﾑｼﾛ			165		ｱﾗﾑｼﾛ			198
	ｲﾎﾞﾆｼ			85		ｲﾎﾞﾆｼ			55
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			36		ｲｼﾏｷｶﾞｲ			45
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			14	掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			30
	ﾂﾉｶﾞｲ			1		ﾂﾉｶﾞｲ			1
斧足網	ｱｶｶﾞｲ				斧足網	ｱｶｶﾞｲ			
	ｻﾙﾎﾞｳ	6921	7799	14,720		ｻﾙﾎﾞｳ	7254	7182	14,436
	ｵｷｼｼﾞﾐ	6582	6151	12,733		ｵｷｼｼﾞﾐ	5647	5865	11,512
	ｲﾀﾔｶﾞｲ					ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			141		ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			1,382
	ﾏｷｶﾞｲ			2		ﾏｶﾞｷ		2	2
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	4979	5223	10,202		ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	4345	4874	9,219
	ﾊﾏｸﾞﾘ	22795	23518	46,313		ﾊﾏｸﾞﾘ	17640	17895	35,535
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	253	254	507		ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	124	101	225
	ｱｻﾘ					ｱｻﾘ	544	564	1,108
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	34	38	72		ﾊﾞｶｶﾞｲ	37	48	85
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ	2737	2435	5,172		ｼｵﾌｷｶﾞｲ	2644	2464	5,408
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ					ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ			14		ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	33	25	58
	ｵｵﾉｶﾞｲ	213	233	446		ｵｵﾉｶﾞｲ	125	163	288
	ﾊｲｶﾞｲ					ﾊｲｶﾞｲ	1	1	2

第５表　貝類遺体一覧　３、４層

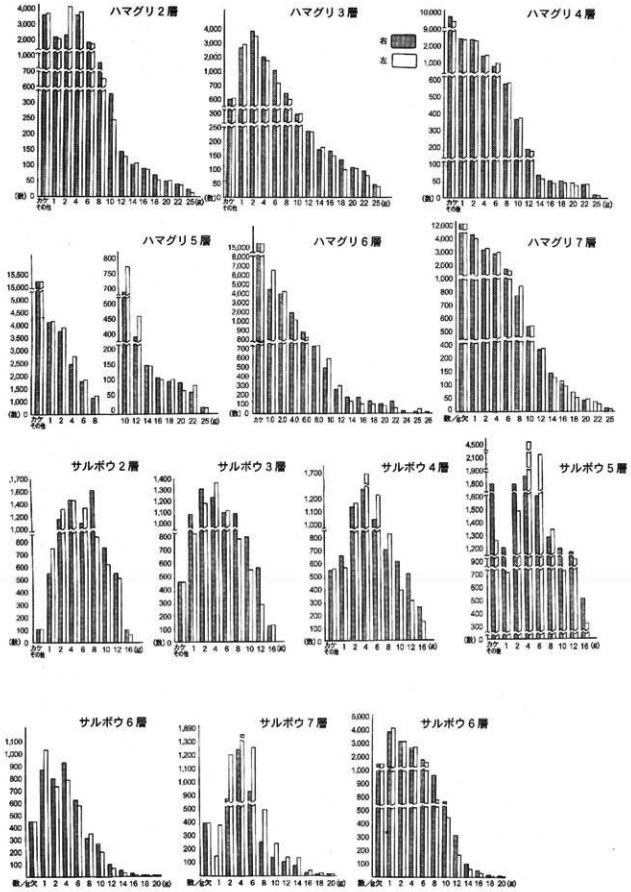
層位		5層		
種	名	左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			47
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			10
	ｶﾜﾆﾅ			29
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			1,144
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			180
	ｶﾘｱｲｶﾞｲ			127
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			183
	ｳﾐﾆﾅ			1,086
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			144
	ｳﾐﾆﾅ科			4,155
	ﾎｼｷｽﾀ			1
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			74
	ｱｶﾆｼ			140
	ｱﾗﾑｼﾛ			345
	ｲﾎﾞﾆｼ			75
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			
	ﾋﾛｸﾁｶﾉｺｶﾞｲ			18
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			68
	ﾂﾉｶﾞｲ			1
斧足網	ｱｶｶﾞｲ	13588	12677	26,265
	ｻﾙﾎﾞｳ			
	ｵｷｼｼﾞﾐ			
	ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			263
	ﾏｶﾞｷ			455
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	1912	1921	3,833
	ﾊﾏｸﾞﾘ			
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	68	65	133
	ｱｻﾘ	1806	1870	3,676
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	137	124	261
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ			
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	5	6	11
	ｵｵﾉｶﾞｲ	326	297	623
	ﾊｲｶﾞｲ			

層位		6層		
種	名	左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			86
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			25
	ｶﾜﾆﾅ			114
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			199
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			120
	ｶﾘｱｲｶﾞｲ			138
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			52
	ｳﾐﾆﾅ			38
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			24
	ｳﾐﾆﾅ科			2,456
	ﾎｼｷｽﾀ			3
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			59
	ｱｶﾆｼ			121
	ｱﾗﾑｼﾛ			402
	ｲﾎﾞﾆｼ			240
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			
	ﾋﾛｸﾁｶﾉｺｶﾞｲ			13
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			50
	ﾂﾉｶﾞｲ			4
斧足網	ｱｶｶﾞｲ			
	ｻﾙﾎﾞｳ	15593	16120	31,713
	ｵｷｼｼﾞﾐ	12159	12467	24,626
	ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			518
	ﾏｶﾞｷ			815
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	9665	10086	19,751
	ﾊﾏｸﾞﾘ	37082	38206	75,288
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ			
	ｱｻﾘ	3403	3426	6,829
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	460	417	877
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ	8612	8293	16,905
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	3	5	8
	ｵｵﾉｶﾞｲ	344	421	765
	ﾊｲｶﾞｲ			

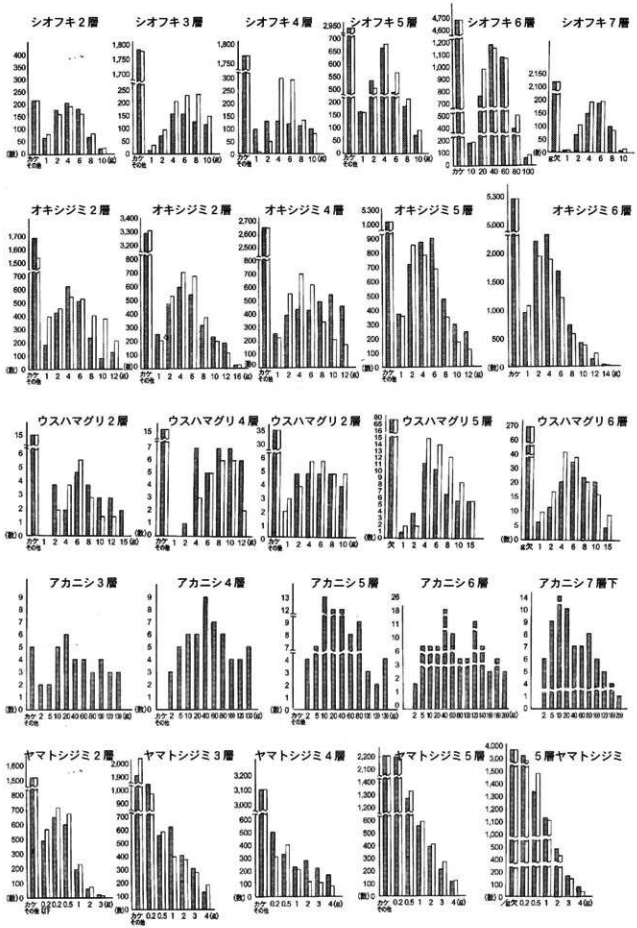
第6表　貝類遺体一覧　5、6層

層位		7 層			層位		8 層		
種名		左	右	個体総数	種名		左	右	個体総数
腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			41	腹足網	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ			30
	ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			5		ｲﾎﾞｷｻｺﾞ			6
	ｶﾜﾆﾅ			30		ｶﾜﾆﾅ			25
	ﾌﾄﾍﾅﾄﾘｶﾞｲ			97		ﾌｸﾄﾅﾄﾘｶﾞｲ			68
	ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			85		ﾍﾅﾀﾘｶﾞｲ			62
	ｶﾜｱｲｶﾞｲ			63		ｶﾜｱｲｶﾞｲ			45
	ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			30		ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ			32
	ｳﾐﾆﾅ			1,255		ｳﾐﾆﾅ			1,120
	ﾎｿｳﾐﾆﾅ			125		ﾎｿｳﾐﾆﾅ			105
	ｳﾐﾆﾅ科			3,008		ｳﾐﾆﾅ科			1,200
	ﾎｼｷｽﾀ			1		ﾎｼｷｽﾀ			2
	ﾂﾒﾀｶﾞｲ			48		ﾂﾒﾀｶﾞｲ			39
	ｱｶﾆｼ			95		ｱｶﾆｼ			101
	ｱﾗﾑｼﾛ			140		ｱﾗﾑｼﾛ			105
	ｲﾎﾞﾆｼ			107		ｲﾎﾞﾆｼ			95
	ｲｼﾏｷｶﾞｲ			38		ｲｼﾏｷｶﾞｲ			20
掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			63	掘足網	ﾏﾃｶﾞｲ			50
	ﾂﾉｶﾞｲ			2		ﾂﾉｶﾞｲ			1
斧足網	ｱｶｶﾞｲ	2	3	5	斧足網	ｱｶｶﾞｲ	1	2	3
	ｻﾙﾎﾞｳ	5907	4276	10,183		ｻﾙﾎﾞｳ	2274	2319	4,593
	ｵｷｼｼﾞﾐ	3246	3159	6,405		ｵｷｼｼﾞﾐ	2118	2100	4,218
	ｲﾀﾔｶﾞｲ					ｲﾀﾔｶﾞｲ			
	ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			165		ﾅﾐﾏｼﾜｶﾞｲ			
	ﾏｶﾞｷ			7		ﾏｶﾞｷ			
	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	2104	2128	4,232		ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	1396	1410	2,806
	ﾊﾏｸﾞﾘ	24662	24688	49,350		ﾊﾏｸﾞﾘ	18659	19174	37,833
	ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	74	75	149		ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	14	9	23
	ｱｻﾘ	1186	1205	2,391		ｱｻﾘ	2431	2485	4,916
	ﾊﾞｶｶﾞｲ	175	157	332		ﾊﾞｶｶﾞｲ	69	75	144
	ｼｵﾌｷｶﾞｲ	2741	2677	5,418		ｼｵﾌｷｶﾞｲ	1809	1773	3,582
	ﾐﾙｸｲｶﾞｲ					ﾐﾙｸｲｶﾞｲ			
	ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	3	5	8		ﾋｼﾒﾗﾄﾘｶﾞｲ	5	8	13
	ﾅﾐｼﾏｶﾞｲﾓﾄﾞｷ					ﾅﾐｼﾏｶﾞｲﾓﾄﾞｷ			
	ｵｵﾉｶﾞｲ	121	69	190		ｵｵﾉｶﾞｲ	115	70	165
	ﾊｲｶﾞｲ					ﾊｲｶﾞｲ			

第7表　貝類遺体一覧　7、8層



第8表　ハマグリ、サルボウ各層出土グラフ



第9表　シオフキ、オキシジミ、ウスハマグリ、アカニシ、ヤマトシジミ各層出土グラフ

6　魚　類

本貝塚からは相当数の魚骨が検出された。しかし魚類数はかならずしも多くは無い。これは調査，整理のミスがあったのかは不明である。貝層の中に存在しなかったのかは定かではない。ここでは確認された魚の一覧を各層毎に表にした。

魚類遺存体種名一覧

軟骨魚網　Chondridhthyes

1．エイ目種不明	Rajiifoymes fam. indet.

軟骨魚網 Osteichthyes　新骨類　Teleotei

1．ニシン科種不明	Ciuoeidae gen. sp. indet.
2．ウナギ	Anguilla japonica
3．マアナゴ	Canger myriaster
4．ダツ科種不明	Belonidae gen. et sp. indet.
5．サヨリ属	Hemiramphus sp.
6．ボラ科種不明	Mugilidae gen. et sp. indet.
7．サバ属	Scomder sp.
8．マアジ	Trachurus japonicus
9．アジ亜科種不明	Caranginae gen. et sp. indet.
10．スズキ属	Lateolabrax sp.
11．クロダイ属	Acanthopagrus sp.
12．マダイ	Pagrus major
13．タイ科種不明	Sparidae gen. et sp. indet.
14．フエフキダイ科種不明	Lethrinidae gen. et sp. indet.
15．ハゼ科種不明	Gobiidae gen et sp. indet.
16．モンガラカワハギ亜目種不明	Balistoidei fam. indet.
17．フグ科種不明	Tetradonitidae gen. et sp. indet.
18．フサカサゴ科種不明	Scorpaenidae gen. et sp. indet.
19．メダル	Sebastes inermis
20．コチ	Platycephalus indicus
21．ヒラメ	Paralichthys olivaceus
22．マコガレイ	Limanda yakohamae
23．イシガレイ	Kareius bicoloratus
24．カレイ科種不明	Pleuronectidae gen. et sp. indet.
25．マイワシ	Sardinops melanostictus
26．コノシロ	Konosirus punstatus
27．トラフグ	Takifugu rubripes
28．サメ類（サメ）	Selachügen et sp. indent

層名		1層		層名		2層	
種族	種一覧	個数片	備考	種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	8	背棘骨	魚類	タイ	242	背棘骨・椎骨
	クロダイ属	2	上顎骨		クロダイ属	6	左歯骨・左右上顎骨
	エイ目	1	椎骨		フグ	3	歯板
	ヒラメ	1	方骨		スズキ属	41	椎骨・上顎骨・歯骨
					エイ目	34	椎骨・尾棘・歯骨
					サメ類	1	椎骨
					ウナギ	181	椎骨
					その他魚骨	2,756	(細片)
獣骨	シカ	5	左肩甲骨・右距骨	獣骨	イノシシ	1	左肩甲骨
	細片(大)				シカ	10	
	(中)	11			細片(大)	4	
	(小)	130			(中)	54	
					(小)	130	
鳥類	ガンカモ類	1		鳥類	ガンカモ類	6	上腕骨・手骨
	細片(小)	6			細片(大)	1	
					(中)	2	
					(小)	10	
爬虫類				爬虫類	ヘビ	8	
				歯類	タイ	12	
歯類	イノシシ	1			イノシシ	6	
					シカ	2	
					タヌキ	5	
					人間の歯	3	
					その他	80	小動物
その他骨・未製品	魚骨	1	針	その他骨・未製品			
	獣骨	1	カケ				

第10表 魚骨一覧

層名		3層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	153	背棘骨・椎骨
	クロダイ属	31	歯骨・左歯・上顎骨
	コチ	1	歯骨
	スズキ属	72	左・右前上顎骨・椎骨
	エイ目	74	歯板・椎骨
	フグ	10	歯板
	サメ	10	椎骨
	魚骨	1,519	
	ウナギ	1,354	椎骨
	トラフグ	1	椎骨
	サヨリ属	39	腹椎
	コノシロ	4	第一背椎骨
	マイワシ	2	第一背椎骨
	その他	572	椎椎骨
	ウロコ	1	
獣骨	イノシシ	1	下顎骨
	(中)	16	
	(小)	1,137	
	シカ	9	
鳥類	ガンカモ類	13	肩甲骨・左骨・右中手骨
	その他(小)	92	鳥類
甲殻類	カニ	1	手
歯類	イノシシ	22	
	シカ	3	左尺骨
	タヌキ	6	
	イヌ	30	
	タイ	27	
	その他	78	
爬虫類	ヘビ	21	
その他骨未製品	針	4	
	つり針?	4	
	貝製品	1	
	シカ	1	
	その他・未製品	5	

層名		4層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	65	背棘骨・椎骨
	クロダイ属	21	左前上顎・歯・関節・上顎骨
	コチ	3	歯骨
	スズキ属	18	椎骨・上顎骨
	エイ目	35	椎骨・尾棘
	アナゴ属	1	上顎骨
	ウナギ	314	椎骨・上顎骨
	サヨリ	3	腹椎
	アジ科	6	腹椎
	マダイ	3	右上顎骨・主鰓蓋
	トラフグ	4	歯板
	その他椎骨	188	
	魚骨	713	
獣骨	イノシシ	3	
	アカネズミ属	2	左下顎骨内側面
	シカ	17	左上腕骨・右距骨
	ネズミ	1	カエル・小動物
	その他(大)	17	
	(中)	125	
	(小)	754	
鳥類	ガンカモ類	2	上腕骨・右中手骨
	キジ	1	左橈骨
	その他(中)	4	
	(小)	66	
歯類	イノシシ	6	
	シカ	4	
	タヌキ	3	
	ウサギ	1	
	タイ	6	
	テン・ネズミ	22	
	その他	4	小動物
その他骨未製品	針	3	
	その他	2	
	ヘビ	8	
	かざり	1	

第11表 魚骨一覧

層名		5層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	6	背棘骨・椎骨
	クロダイ属	3	右前・左前上顎骨、左歯骨
	サメ類	2	椎骨
	スズキ属	26	椎骨・右歯骨
	サヨリ	31	腹椎
	魚骨	23	(細片)
	ウナギ	50	椎骨
	コノシロ	6	第一脊椎骨
	その他	508	
獣骨	イノシシ	3	右距骨・顎骨
	(細片)	11	
	その他(大)	2	
	(中)	26	
	(小)	1,607	
	シカ	17	角
鳥類	ガンカモ類	2	
	その他	24	
哺乳類	人間	5	中骨足
歯類	イノシシ	14	
	シカ	2	
	その他	1	小動物
その他骨・未製品	ヘラ?	1	
	かざり?	2	
	針	1	

層名		6層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	164	背棘骨・椎骨・歯骨
	クロダイ属	13	左前上顎・左歯骨
	トラフグ	1	左歯骨
	ズズキ属	3	右・左前上顎骨
	エイ目	3	歯板
	ヒラメ	6	方骨
獣骨	アシカ	1	
	その他(大)	1	
	(中)	10	
	(小)	456	
	シカ	23	右橈骨
鳥類			
	その他(小)	95	
歯類	イノシシ	11	
	タヌキ	4	
	ﾈｽﾞﾐ・ﾃﾝ	12	
	その他	20	
その他骨・未製品	ヘビ	1	
	針	4	
	その他	4	

第12表 魚骨一覧

層位		7 層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	4	背棘骨・椎骨
	クロダイ属	2	上顎骨
	サメ類	2	椎骨
	スズキ属	1	椎骨
	マダイ	1	左歯骨
	魚骨	7	
獣骨	イノシシ	9	基節骨・その他
	その他（中）	23	
	（小）	115	
	シカ	9	
哺乳類	アシカ	2	
歯類	イノシシ	3	
	タヌキ	1	
	魚骨	1	
	その他	3	
その他骨・未製品	ヘラ？	1	
	首かざり	1	
	未製品？	5	

層位		8 層	
種族	種一覧	個数片	備考
魚類	タイ	29	背棘骨・椎骨
	クロダイ科	6	上顎骨・左歯骨
	サメ類	2	椎骨
	スズキ属	17	椎骨
	エイ目	1	尾棘
	魚骨	16	椎骨
獣骨	シカ	4	
	その他（中）	2	
	（小）	51	
鳥類	ガンカモ類	1	左鳥口骨
	その他（大）	1	
	（中）	2	
	（小）	29	
歯類	イノシシ	10	
	タヌキ	2	
	テン・ネズミ	3	
	その他	8	
その他骨・装飾	針	1	
	かざり？	1	

第13表 魚骨一覧

土坑			
番号	種族・一覧	個数片	備考
SK-4	獣骨	1	歯
SK-13	獣骨	5	細片
SK-15	人骨	2	
	イノシシ	3	
	その他	4	
	タヌキ	1	顎骨
	タヌキ	2	歯
SK-24	獣骨	2	細片
SK-24	獣骨・イノシシ	1	下顎骨
SK-29	人骨	1	頭蓋骨1他2
SK-32	獣骨・シカ	1	顎骨
	獣骨・シカ	2	歯
	獣骨・イノシシ	1	歯

土坑			
SK-33	獣骨	1	
SK-34	獣骨・シカ	3	
	シカ	1	角
	獣骨	3	細片
SK-65	獣骨・イノシシ	1	歯

ピット			
番号	種族・一覧	個数片	備考
P-8	獣骨	2	
P-28	獣骨・シカ	1	角
P-34	獣骨・イノシシ	1	歯

第14図 哺乳類骨一覧

7　哺乳綱

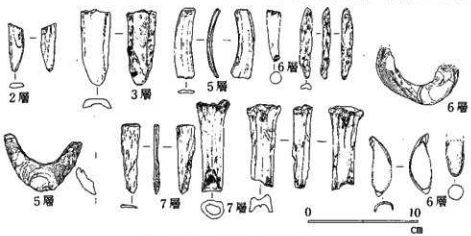
本貝塚からはイノシシ、シカを始めとして６種程同定された。魚類同様必ずしも多くは無く数量的にも少ない。大半の遺物はフルイ資料で調査時取り上げたものは非常に少ない。

哺乳綱　MAMMALIA

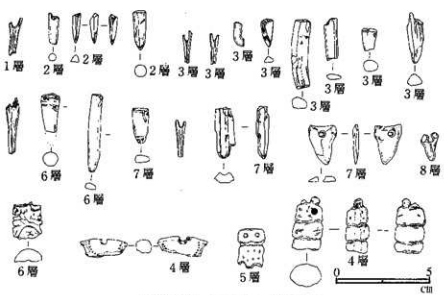
１．ノウサギ	Lepus brachyurus	５．テン	Martes melampus(WAGNER)
	TEMMINCH et SCHLEGEL	６．アナグマ	Meles meles(LINNAEUS)
２．タヌキ	Nyctereutes procyonoides GRAY	７．イノシシ	Sus scrofa(LINNAEUS)
３．キツネ	Vulpes unlpes(LINNAEUS)	８．シカ	Cerus nippon (TEMMINICK)
４．イヌ	Canis familiaris(LINNAEUS)		

人　骨

本貝塚３層から人骨がうつぶせで足を後背に折り曲げた状態でほぼ完全に近い状態で検出された。３層の貝殻によって保存されたと推察され本城では類例のない遺存状態であった。以下国立科学博物館人類研究部、梶ｹ山　真理、馬場　悠男氏の分析結果を掲載し報告にかえたい。



第４８図　貝塚出土骨牙製品



第４９図　貝塚出土骨牙製品

第7節　人　骨

国立科学博物館人類研究部
梶ヶ山　真里・馬場　悠男

1.　はじめに

若海貝塚は茨城県行方郡玉造町若海にあり、平成１０年９月に玉造町教育委員会によって発掘調査された。保存状態が良いほぼ完全な人骨が１体分、そして頭蓋と大腿骨が部分的にしか残っていない人骨、歯と骨粉がわずかに保存されているものの計４体が検出された。ほぼ完全な人骨の時代は、縄文中期と考えられている（１号）。他の人骨の時代は、出土状況や保存状態から縄文時代とは考え難い。

2.　出土人骨

１号人骨

Ａ．保存状態

うつ伏せで、両膝を折り曲げた状態（伏臥半屈葬）で検出されている。保存状態は極めて良好で、頭蓋・体幹体肢骨とともに大部分の骨が残っている。

Ｂ．性・年齢

下顎歯の咬耗はブロカのⅢ，LovejoyではＥに相当する。

脳頭蓋主縫合癒着度は、外板で１～２度である。しかし、恥骨結合面は平坦で、耳状面は辺縁部分に骨棘が形成されている。四肢骨関節面や椎骨の経年性の骨増殖や変形が著しい。以上の特徴を総合すると、年齢は壮年後半から熟年に達していると考えられる。頭蓋全体は大きく、前頭結節は目立たない。眉間付近が強く隆起し、乳様突起も大きい。また、下顎骨は頑丈であるなど、頭蓋の多くの部分において男性的な特徴が認められる。また、四肢長骨体が長く、縄文時代としては極めて長身であった。四肢長骨体は太く、筋付着部もよく発達している。さらに、大坐骨切痕の湾入は鋭角である。つまり、四肢骨も男性的特徴を充分に示している。したがって、この個体は壮年後半から熟年の男性と判定される。

ｃ．頭蓋

脳頭蓋の３主径（最大長、最大幅、バジオン・ブレグマ高）は、三貫地貝塚出土男性人骨平均値と、ほぼ同様の値を示している（表１）。

上面観：輪郭は卵形。最小前頭幅はやや狭い。前頭結節の突出はなく、頭頂結節が中程度に突出している。頭蓋長幅示数は７８．１で、中頭型である。縫合の走向はやや複雑で、ラムダ縫合には左右とも複数の縫合骨がある。

後面観：輪郭は中央部の高い家型。横後頭縫合が２㎝ほど左右にそれぞれ残存している。外後頭隆起は不明瞭で、上項線の発達も弱い。

側面観：眉間は前方に突出し、明瞭な眉間上窩を形成する。前頭鱗はかなり後傾する。頭頂骨は頭頂結節付近で強く湾曲するが、後頭骨は滑らかに湾曲している。頭蓋長高示数は７５．１で、高頭型である。側頭線は、前頭骨では直線的で明瞭に認められるが、頭頂骨においては不明瞭で

ある。鱗状縫合の走向は低い。乳突上稜は、幅広く、明瞭に隆起している。乳突上溝も明瞭である。乳様突起は良く発達し、基底部も大きく、強壮な男性の状態を示している。外耳孔は大きく、楕円形を呈している。

底面観：下顎窩は広く浅い。鼓室骨開裂はない。後頭顆は左が部分的に破損しているが、二分化傾向はない。舌下神経管は左右とも単管である。大後頭孔は円形。蝶形骨は大きいが、翼棘横傾向はない。

顔面：低く幅広いという縄文時代人の特徴を強調した顔面である（表１）。ウィルヒョウ顔示数は１０６．３で過低顔である。眉間の隆起は極めて強く典型的縄文時代人の状態である。眉弓および眼窩上三角は発達しているが、眉弓から眼窩上三角へ連続する肥厚部を形成するほどではない。眼窩上縁は直線的である。前頭平面との間には、まるで頭に紐を巻いて圧迫されたような、浅い溝が形成されている。これは、南坪１号人と同様の傾向である。前頭縫合の痕跡はない。眼窩口は高さが低く、細長い長方形を呈し、眼窩示数７１．４は低眼窩である。鼻骨は広く、「つまんだ鼻」ではない。前頭鼻骨縫合は陥没し、鼻背への隆起は強い。梨状口はやや狭く、高い。鼻示数５１は広鼻型であるが、縄文時代としては狭い。梨状口下縁および上顎骨正中部分やその周辺には、細かい小孔が認められる。そのため、梨状口下縁は不明瞭で、なだらかに上顎骨鼻歯槽斜台へと連続し、境界が不明瞭である。前鼻棘は極めて低い。頬骨は頑丈である。左右とも後裂はない。咬筋の起始部は深くえぐられており、頬上顎結節は下方よりむしろ外側方向に突出する。頬骨下稜は陥入せず、上顎体外側面で第１大臼歯歯槽縁へ続く隆起を形成している。現代人によく見られる犬歯窩はない。歯槽性突顎の傾向は弱い。咬合は鉗子状で、残っている歯に関しては、歯列の乱れはない。口蓋隆起や上顎隆起はない。

下顎骨は、大きさは普通であるが頑丈である。特に、下顎関節突起幅が極めて広い。歯槽部の退縮は認められない。下顎体と歯列弓は、どちらとも半楕円形であり、幅の差がほとんどない。下顎歯槽縁と下顎底はほぼ平行で、側面観の下顎体全体は長方形に近い。角前切痕もない。オトガイ隆起は目立たないが、オトガイ結節は良く発達している。オトガイ下切痕も広い。顎二腹筋窩は深く、良く発達している。オトガイ孔は第２小臼歯の下に位置する。下顎角はあまり外反しないが、咬筋窩が明瞭に形成されている。内面においても内側翼突筋のレリーフが深い。右側に下顎隆起がある。下顎枝は広く（最小枝幅：右36㎜、左34㎜）頑丈である。外面の枝外側隆起や内面の三角隆起は良く発達している。筋突起も厚い。

歯：歯の保存状態は悪く、歯冠の残っている歯は上顎では全くなく、下顎でもわずかに９本である。詳しくは以下の歯式の通りである。

×７６５４３２×	×２３４５×××
$\boxed{8}$ $\underline{7}$ × $\underline{5}$ ４３ $\underline{2}$ $\underline{1}$	○ $\boxed{2}$ $\underline{3}$ $\underline{4}$ $\underline{5}$ $\boxed{6}$ $\boxed{7}$ $\boxed{8}$

×は、歯が生前に抜け落ち、歯槽が閉鎖

○は、歯が死後に抜け落ち、歯槽が解放

$\underline{数字}$ は、カリエスや摩耗などのため歯冠がなくなり、歯根しか残っていないもの

$\boxed{数字}$ は、歯頸部にカリエスがあるもの

生前に抜け落ちた歯は、カリエスあるいは歯槽膿漏などによるものであり、抜歯などによる欠落ではないと考えられる。歯冠の計測は下顎歯しかできないが、若海貝塚１号人骨の歯は里浜貝塚男性平均および現代人男性と比較しても大きい。歯冠の残っている下顎歯の咬耗は、象牙質が大きく露出し、ブロカのⅣに相当する。歯冠が残っている歯のほとんどにカリエスが認められる。

D．体幹・体肢骨

椎骨：椎骨は、部分的に破損している箇所があるが、大部分が残っている。腰椎の椎体辺縁には骨増殖があり、椎体は上下に圧迫され変形している。

肋骨：肋骨は、左右とも破損している箇所があるが、比較的良く保存されている。全体として厚く、筋のレリーフも強い。

鎖骨：左右とも骨端が破損している。最大長は不明であるが、骨体は幅広く頑丈である。津雲貝塚人より太く、南坪貝塚１号人と近い。肋鎖靭帯圧痕、円錐靭帯、菱形靭帯線が良く発達している。特に、三角筋付着部は、親指で強く押しつけたように深く窪んでいる。大胸筋起始部は独立した平面となっている。

肩甲骨：大きく、頑丈である。肩甲棘も太く、しっかりしている。関節窩の辺縁には骨棘の形成が認められる。

上腕骨：骨体の太さは津雲人に近く、南坪貝塚１号人より細い。しかし、長さは比較資料のなかで最も長い。骨体は中央部で外側方向に凸に屈曲している。大結節稜や小結節稜そして三角筋粗面が発達している。滑車上孔はない。

橈骨：他の縄文時代人と比べ、最大長が長い。骨体は扁平ではない（体横断示数：８２）。橈骨粗面は良く発達している。

尺骨：骨間縁が良く発達し、骨体が太く、長さも長い。尺骨粗面、回外筋稜は良く発達している。滑車切痕は大きい。

手骨：骨端が破損しているものが多いが、比較的良く残っている。特に異常は見当たらない。

寛骨：寛骨は左右とも坐骨枝および恥骨結合部が破損している。全体として筋肉の付着部は良く発達している。腸骨溝も深い。腸骨稜結節、臼上窩は明瞭である。腸骨稜や寛骨臼縁は強く隆起している。大坐骨切痕は鋭角で、深く湾入しており、明らかに男性的特徴である。左右とも耳状面や恥骨結合粗面はかなり平坦であり、腸骨面に経年性の骨増殖がある。

大腿骨：保存状態は良好である。骨体は、南坪貝塚１号人、津雲貝塚人、三貫地貝塚人あるいは現代人と比べても、はるかに太く、長い。右大腿骨から推定される身長は、藤井法で１６８㌢である。骨体の前方への湾曲は普通である。大腿骨骨頭は大きく、骨頭窩は広く深い。小転子も内側に突出し、転子間稜も明瞭である。骨体上部は扁平（体上断面示数：右７５）である。殿筋粗面および恥骨筋線が明瞭である。骨体中央部の粗線は発達し、付柱を形成している。下関節下端は大きく、顆間窩はかなり広い。右大腿骨の内外側顆関節面や膝蓋面周辺縁には著しい骨棘が見られる。また、関節面の一部には、関節軟骨が摩耗し、脛骨関節面との間で、骨表面が直接すれた痕が見られる。進行した関節炎であったと思われる。

膝蓋骨：左右とも残っている。右膝蓋骨は、関節炎のために辺縁部に骨増殖がある。

脛骨：保存は良好である。三貫地貝塚人や津雲貝塚人と比べ、極めて長く、骨体の扁平性が強い（扁平示数：右65.1）。右脛骨から推定される身長は、藤井法によると170.3㌢となり、現代人の平均身長を上回る。骨体断面は菱形である。前脛骨筋起始部か大きく凹んでいる。ヒラメ筋線は明瞭でないが、骨体後面には明瞭な縦稜が認められる。右脛骨上関節面の辺縁には極端な骨増殖が認められる。また、左脛骨骨体の遠位部（遠位端から５㌢上）には、生前に骨折し、治癒した痕跡が認められる。骨折箇所は肥厚している。通常の骨体より太くなっている。骨表面はやや多孔である。

腓骨：左右とも骨端部が破損している。骨体は太く扁平で、筋のレリーフが明瞭である。左腓骨には骨折の痕跡は認められない。

足骨：左右とも足根骨・中足骨・指骨が比較的良く残っている。距骨や踵骨は全体として大きい。それぞれの長母指屈筋腱溝は広い。関節面は平滑で炎症などの痕跡は認められない。習慣的な蹲踞姿勢に関連すると言われる距骨滑車関節面延長は、内果面の前方延長は認められるが、滑車面の外側部の延長はほとんど認められない。頸結節も発達していない。それに対応する脛骨の下端前下窩のくぼみも弱い。右母指末節骨関節には炎症が認められる。それ以外には炎症などの所見は認められない。

２号人骨（ＳＫ－７３）

Ａ．保存招待

骨質は脆く、風化による傷みが激しい。残っているのは、脳頭蓋では頭頂骨と右側骨錐体および歯、四肢骨では右大腿骨近位部１０センチ程度である。

Ｂ．年齢性別

右乳様突起の付根が華奢で、錐体が小さい。大腿骨の骨体も細く、全体的に華奢であるため、性別は女性と思われる。歯の咬耗程度からブロカのⅠ～Ⅱに相当する。したがって、年齢は壮年初期と思われる。

Ｃ．頭蓋

頭蓋の三主縫合のうち、矢状縫合は開いている。その他の縫合の癒合状態は保存状態が悪くわからない。骨断面は薄く、もっとも薄いところでは２㎜ほどしかない。

歯の保存状態は以下の通りである。

７６５４３２１	１２３４５６７８
６５４３２	２　４５６７

上顎切歯や上顎犬歯は強度のシャベル形である。上顎左第３大臼歯に軽度のカリエスがある。歯の咬耗は、大臼歯では象牙質が部分的に露出している。したがって、ブロカのⅠ～Ⅱに相当する。

右大腿骨は、骨体の近位部の骨体が１０センチ程残っているが、骨頭は大きく破損している。骨体は細く（上骨体矢状径１６／骨体横径２２）、華奢である。骨表面の風化による傷みが激しく、後面の粗線の隆起は不明である。

３号人骨（ＳＫ－２９）

骨片が数点残っているだけである。

4号人骨（SK－15）

歯が3点と下顎骨と思われる骨粉が残っている。歯の保存状態は次の通りである。

$\overline{7\ 6\quad\ 3}|$

咬耗は象牙質が露出しているので、ブロカのⅡ程度に相当する。

この人骨の性別は不明であるが、年齢は壮年半ばと思われる。

3. 考察

若海貝塚から4体の人骨が出土した。しかし、2・3・4号人骨は縄文時代人ではないと思われ、ここでは明らかに縄文時代人である1号人骨についてのみ考察する。

縄文時代人の脳頭蓋は、一般に現代日本人と比べ、全体的に大きいがその割に高さが低いことが知られている。若海貝塚1号人骨の脳頭蓋についても同様で、比較資料の津雲貝塚人より高く、三貫地貝塚人あるいは関東縄文集団に近い。顔面についても、縄文時代人は現代日本人と比べ、やや突顎で、前からみると広く低いのが特徴である。全体的に骨質が厚く、部分的にも眼窩上方の突出、頬骨の張り出し、頬骨下稜の隆起、下顎筋突起の厚みなどが著しい。若海貝塚1号人骨もその特徴を持ち、一般的な縄文時代人と大差はない。しかしね特に顔面が広く（頬骨の張り出しが強い）低く（顔面が上下につぶれた状態）、したがって、眼窩口の形は横に細長い長方形で、比較資料のどの集団より広低顔である。これらの顔面の特徴は南坪貝塚2号人と良く似ているが、より立体的で、鼻高が高く鼻幅が狭い。

四肢骨は、大腿骨から推定される推定身長が藤井法によると168センチで、脛骨から推定される推定身長は171センチである。どちらにしても、縄文時代男性平均身長159.1と比べはるかに高い。縄文時代人は一般に、現代日本人と比べ、四肢の遠位分節が長い傾向にあるが、若海貝塚1号人骨でもその傾向は伺える。また、上肢骨に比べ、下肢骨の発達していることは、他の縄文時代人同様で、縄文中後晩期人の特徴を備えているといえる。縄文時代人としてはめずらしい高身長は、南坪貝塚人ではなく加曽利貝塚人と類似性を持っている。すなわち、顔面や体格の特徴は、近隣に位置する貝塚出土人骨の特徴をそれぞれ具備しているといえよう。ちなみに、同時期ではあるが環境的に異なる山間部出土の北村遺跡人や、同じく山間部の妙音寺洞穴出土人骨（縄文早期）に見られるような、顔面の幅が小さい傾向とはかなり異なっている。

さらに、若海貝塚1号人骨の生活様式を推測する上で特徴的なこととして、保存されている歯（歯根のみ保存も含む）のほとんどがカリエス（虫歯）に侵されていることである。歯冠が残っているほとんどの下顎歯にはカリエスがあり、下顎左第2切歯には歯頸部が近遠心方向に穿孔されたかのようなカリエスが認められ、歯冠と歯根がわずかな部分で接合しているにすぎない（写真図版5）。それに隣接する下顎左犬歯、下顎左第1小臼歯、下顎左第2小臼歯の歯頸部にあたかも穿孔途中のようなカリエスの痕跡がある。これらのことから、多くの歯が歯根しか残っていない原因については、著しい咬耗によるものではなく、歯頸部のカリエスの拡大で歯冠が破断した可能性が高いと思われる。さらに、その破断面あるいはカリエスの浸食面の大部分では歯髄腔に二次象牙質が形成されていることから、カリエスが極めてゆっくりと進行し、その結果歯髄腔に二次象牙質が充填され細菌感染を起こさずに済んだのであろう。もちろん、細菌感染を起こし

たこともあったようで、脱落したあるいは脱落しかかっている歯根が何本かあり、そこでは歯槽骨の吸収や歯根の石灰化あるいは真珠化などによる慢性の化膿性病変の痕跡が認められる。一般に、若海貝塚のような海岸部の縄文時代人は、山間部縄文時代人よりカリエスが多いことは知られている。海岸部の縄文時代人は、山間部のそれより植物性の食料が少ないため、歯が磨かれることが少ないことによりカリエスが多い可能性が考えられる。とはいえ、海岸部の縄文時代人でもこれほど多くのカリエスが発生した例は、著者の知る限り報告されていない。また、縄文時代には、革をなめしたりするような作業によって歯が斜めに異常に摩耗する例は良く知られているが、本例では上顎の数本の歯根では斜めの咬耗が見られるが、歯冠が残っている歯はすべて平坦な通常の咬耗をしているので、そのような可能性は少ないと思われる。

また、本例の右膝関節には極度の関節炎や骨折の治癒痕が認められ、生前は膝を曲げたり、蹲踞姿勢はできなかったようで、距骨の滑車面外側部の前方延長や頸部結節がほとんど認められないことから推測できる。

さらに、注目すべきことは、この人骨は伏臥（俯臥位）半屈葬で検出された点である。その埋葬位が里浜貝塚成人男性（9号）や城ノ台南貝塚（2号）、北海道の続縄文時代の例（山口、私信）などの全国的にみても数例しかないことを考慮すると、特異な埋葬であることは否めない。林謙作氏は伏臥埋葬について、「他に比べ際だって劣位にたつ、あるいは何らかの基準に照らして欠けるところのあるものと考えられる。（中略）普遍性をもった組織・区分原理に基づくものではなく、偶発的な事件を反映していると考えられる。…… この埋葬態位は、遺体の属性を反映している。」としている。

若海貝塚1号人骨は、葬制が確立したと考えられる中期に、墓城ではなく貝塚から出土した。伏臥位がもつ希有な姿勢は、集落全体での貝塚の位置、あるいはその性格、集落本来の墓城とこの貝塚との位置関係、そこに埋葬された被葬者の埋葬状態が明確ではないため、林氏の見解にみられる、伏臥半屈葬位から生前の属性を割り出すにはいたらない。ともあれ、関東地方における縄文期の葬制を考えるうえで『伏臥半屈葬位』は興味深い一例である。

参考文献

馬場悠男　1970「蹲踞その他坐法の影響による日本人下肢骨の特徴について」人類学雑誌,78:(3) 213-234

平本嘉助　1972「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代変化」　人類学雑誌,80：221-236

林　謙作　1977「縄文期の葬制」考古学雑誌,第62巻4号

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治　1986「根古屋遺跡出土人骨・動物骨」『霊山根古屋遺跡』霊山根古屋遺跡調査団

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治　1988「南坪貝塚出土人骨」『小川町史』

鈴木隆雄　1988「三貫地貝塚・頭蓋骨」『三貫地貝塚』

馬場悠男　1988「三貫地貝塚・四肢骨」『三貫地貝塚』

茂原信生　1994「北村遺跡出土の人骨形質」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11『北村遺跡』259-265

茂原信生　1996「城ノ台南貝塚出土の縄文時代早期人骨」『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学考古学研究室

地土井健太郎　1997「蛇王洞縄文早期人骨の人類学的研究」人類学雑誌　105(5) 293-317

馬場悠男・坂上和弘・河野礼子・加藤久雄 1999「妙音寺洞穴遺跡出土の縄文時代早期人骨」埼玉県埋蔵文化財事業団報告書　第209集『妙音寺／妙音寺洞穴』

第15表　若海貝塚1号人骨頭蓋計測値と比較資料

計測項目	若海1号	南坪1号	南坪2号	三貫地	関東集団	東北集団	津雲	現代
1　最大長	183	181	188	180.8	183	184	186.4	178.9
5　頭蓋底長	105	–	–	104.3	103.8	104.0	–	–
8　最大幅	143	139	136	145.8	142.6	143	144.4	140.3
8：1　長幅示数	78.1	77	72	81.0	77.7	77.7	77.7	78.5
9　最小前幅	90.5	–	–	100	97.7	97.7	–	–
9：8	63.2	–	–	68.2	68.1	68.0	–	–
17　バジオン・ブレグマ高	137.5	141	141	139.8	138.5	140.5	134.0	138.1
17：1　長高示数	75.1	78	75	76.1	75.4	76.7	71.6	77.3
17：8　幅高示数	96.2	101	104	96.7	94.6	98.3	92.2	98.6
40　顔長	98	102	(114)	103.7	111.5	100.7	102.7	97.6
43　上顔幅	105	108	112	108.6	111.5	110.6	109.0	102.9
45　頬骨弓幅	146	–	–	138.0	137.4	141.4	–	–
46　中顔幅	103	104	106	102.6	108.1	105.0	103.6	98.6
46：45	70.4	–	–	76.2	77.4	74.6	–	–
47　顔高	109.5	119	110	–	–	–	115.8	123.8
48　上顔高	(64)	67	64	67.5	67.9	65.8	67.0	70.7
47：45	78.4	–	–	–	–	–	–	–
48：45	43.7	–	–	48.2	48.5	46.3	–	–
47：46	106.3	114	104	–	–	–	114	125.4
48：17	46.5	47.5	45.3	48.2	49.8	46.9	–	–
48：46	62.1	64	60	66.0	64.3	61.7	67.7	71.8
51　眼窩幅	42	41	41	41.8	42.4	43.7	43.7	42.7
52　眼窩高	30	32	27	33.4	33.0	33.1	33.6	34.3
52：51	71.4	78	76.6	54.0	52.6	55.9	70.6	80.4
54　鼻幅	25.5	27	30	26.9	26.2	27.3	26.6	25.0
55　鼻高	50	49	44	49.8	50.2	49.2	48.6	52.0
54：55	51	55	68	78.5	79.0	78.5	54.5	48.4
65　下顎突起幅	134.5	119	115	–	–	–	129.6	122.0
66　下顎角幅	100	100	99	–	–	–	105.4	96.9
68　下顎長	72.5	72	71	–	–	–	75.0	–
70　枝高	65	65	63	–	–	–	61.8	62.6
69　オトガイ高	31.5	34	32	–	–	–	33.5	36.1
71　枝幅	36(R)	37	34	–	–	–	34	33.1
71：70	55.3	57	54	–	–	–	55.1	53.1

第16表　若海貝塚出土人骨四肢骨計測値と比較資料

計測項目			若海 右	若海 左	南坪貝塚 1号	南坪貝塚 2号	三貫地	津雲	現代
鎖骨	4	中央垂直径	-	148	150	-	149.9	152.1	139.6
	5	中央矢状径	-	12.5	10	10	10.6	10.1	10
			-	14.5	15	15	12.7	13.2	12.2
	4:5	中央断面示数	-	86.2	71	67	83.6	76.6	83.4
上腕骨	1	最大長	313	310	293	300	291.2	292.0	295.9
	5	中央最大径	26	23	27	24	23.4	23.9	22.4
	6	中央最小径	18	17.5	18	17	17.2	17.5	17.7
	6:5	中央横断示数	69.2	76.0	67	71	73.7	72.7	79.6
橈骨	1	最大長	244	-	262	232	231.3	235.2	225.1
	4	体横径	16	16	19	15	16.5	17.2	16.5
	5	体矢状径	13.2	13.5	12	13	11.9	11.8	11.8
	5:4	体断面示数	82.5	84.3	63	87	72.4	69.2	71.8
尺骨	1	最大長	262	(260)	250	-	250.5	252.5	241.5
	11	体矢状径	14	13	15	13	14.1	14.2	13.2
	12	体横径	19	19	17	16	15.5	16.3	16.3
	11:12	体横断示数	73.6	68.4	88	81	91.2	87.3	80.9
大腿骨	1	最大長	461	454	409	421	423.7	418.2	412.1
	6	体中央矢状径	33	35	31	27	29.6	29.3	27.6
	7	体中央横径	27.5	28.5	26	26	25.4	25.5	26.3
	6:7	体中央断面示数	120	122.8	119	104	116.7	114.6	105.4
	8	中央周	95	98	88	85	-	86.8	83.7
	9	体上横径	33.2	33.2	30	29	30.3	30.5	31.0
	10	体上矢状径	25	26	24	25	24.5	24.2	25.6
	10:9	上体断面示数	75.3	78.3	80	86	67.6	79.5	82.2
脛骨	1	最大長	386	386	342	336	343	349.5	320.4
	8	中央最大径	33	34	30	29	31.1	32.0	28.7
	9	中央横径	21.5	22.5	22	19	21.0	19.6	22.8
	9:8	中央断面示数	65.1	66.2	73	66	67.6	61.5	78.7
腓骨	2	中央中央最大径	-	18.5	18	16	18.9	17.7	14.8
	3	中央最小径	-	11.2	10	14	12.5	12.1	10.9
	3:2	中央断面示数	-	60.5	56	88	66.7	69.0	73.4
距骨	1	距骨長	-	50	50	52	-	49.7	51.0
	2	距骨幅	-	42	43	44	-	40.8	41.0
	3	中央高	-	30	29	30	-	28.5	30.3
	2:1	長幅示数	-	84	86	85	-	82.2	79.0
	3:1	長高示数	-	60	58	58	-	57.6	58.0
踵骨	1	最大長	-	71	76	78	-	76.4	74.3
	2	中幅	-	45	41	41	-	41.8	41.0
	4	高	-	31	38	40	-	40.0	39.3
	2:1	長幅示数	-	63.4	54	53	-	55.4	54.7

第 17 表　若海貝塚出土人骨歯冠計測値と比較資料

時代	資料	計測項目	右 1	右 2	右 3	右 4	右 5	右 6	右 7	右 8	左 1	左 2	左 3	左 4	左 5	左 6	左 7	左 8
下顎歯 縄文	若海	MD	(根)	(根)	7.0	7.5	(根)	(脱)	(根)	10.5	(失)	5.0	7.0	6.9	7.0	(根)	11.3	10.9
		BL			8.0	8.2				11.5		7.0	8.0	8.3	8.9		11.7	11.4
	南1号	MD	-	(失)	(失)	(根)	7.6	-	-	11.2	(根)	-	-	7.5	7.7	-	-	11.2
		BL	5.9				8.9	-	-	10.6		6.6	8.4	8.3	9.1	-	-	10.8
	坪2号	MD	(失)	-	(失)	-	(失)	(破)	(破)	(失)	(破)	-	(失)	-	-	-	-	8.6
		BL		5.7		7.7						5.7		7.3	7.3	11.4	10.3	9.3
	三貫地(松村)	MD	5.81	6.02	6.8	6.79	6.83	11.63	10.68	10.19								
		BL	6.11	6.21	7.5	7.83	8.38	11.21	10.4	9.78								
	里浜(MIZOGUCHI)	MD	-	5.4	6.3	6.4	7.0	11.7	11.1	10.6								
		BL	5.9	6.2	7.2	7.7	8.1	10.9	10.1	9.7								
現代	日本人(櫃田)	MD	7.35	6.62	8.52	9.59	9.41	11.75	11.85	10.79								
		BL	5.88	6.43	8.14	8.06	8.53	10.89	10.53	10.28								

(MD. 近遠心径　BL. 頬舌径)　(根). 歯根のみ残る　(失). 死後紛失，歯槽開放　(脱). 生前脱落，歯根閉鎖　(破). 破損

第 18 表　若海貝塚人骨頭蓋小変異

	若海貝塚 右	中	左
前頭縫合残存		×	
前頭縫合鼻上痕跡		×	
眼窩上孔	×		×
眼窩上神経孔	×		×
ラムダ骨	○		○
横後頭縫合		×	
アステリオン骨	×		×
顆管開存	○		○
舌下神経管二分	×		×
頬骨後裂			
外耳道骨腫	×		×
翼棘孔	×		×
顎骨神経溝骨橋	×		×
口蓋隆起	×		×
下顎隆起	×		×
第3大臼歯欠如	×		?
左横洞溝優位			
インカ骨		×	

図1

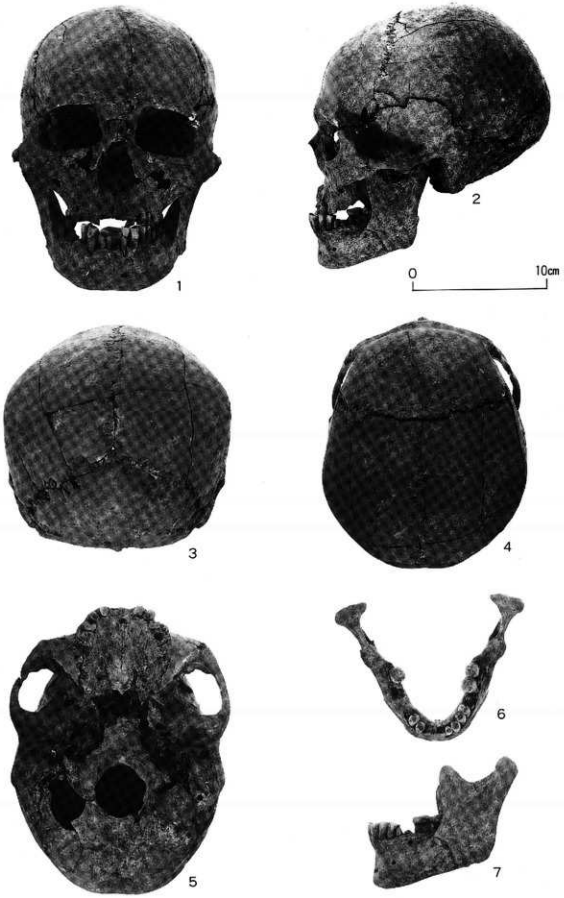


図2

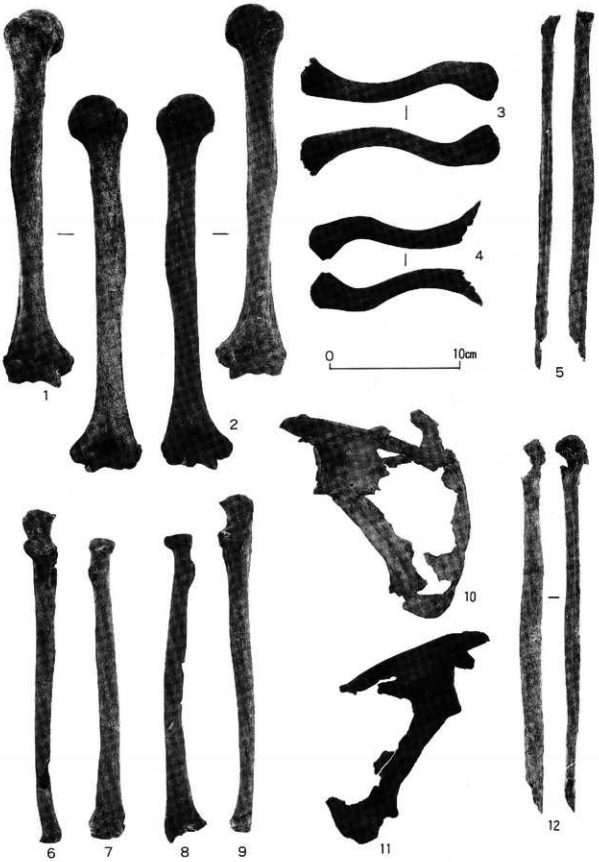


図3

図4

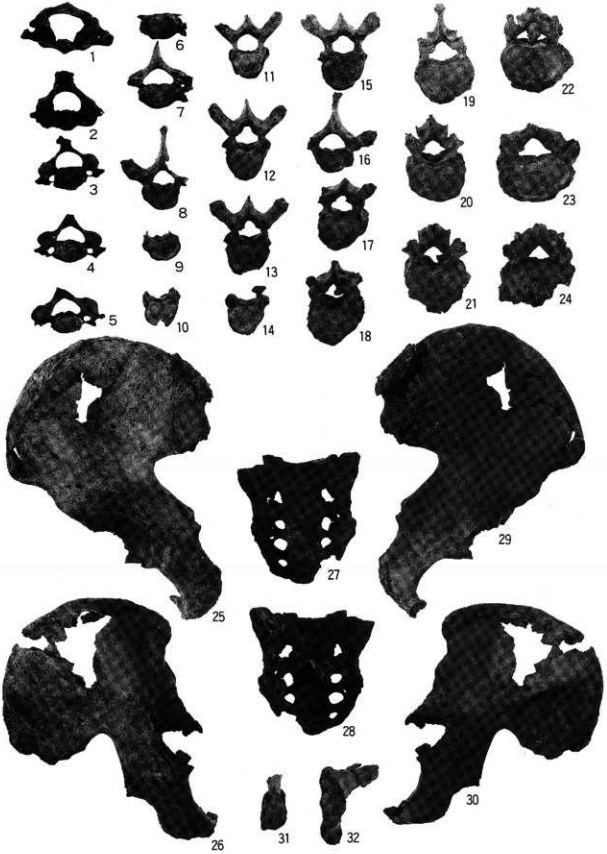

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

図5

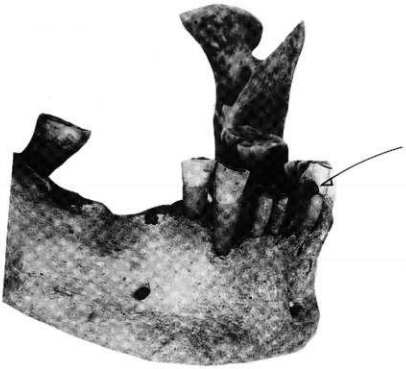


図1　若海貝塚出土頭骨

1．前面観　2．側面観　3．後面観　4．上面観
5．底面観　6．下顎骨上面観　7．下顎骨側面観

図2　1．右上腕骨　2．左上腕骨　3．左鎖骨　4．右鎖骨
5．左腓骨　6．右尺骨　7．右橈骨　8．左橈骨
9．左尺骨　10．左肩甲骨　11．右肩甲骨　12．右腓骨

図3　1．右大腿骨前面　2．右大腿骨後面　3．左大腿骨後面
4．左大腿骨前面　5．右膝蓋骨　6．左膝蓋骨
7．右脛骨前面　8．右脛骨内側面　9．左脛骨前面
10．左脛骨内側面　11．右踵骨・右距骨　12．左踵骨・左距骨

図4　1～7．頸椎　8～19．胸椎　20～24．腰椎

図5　下顎歯穿孔状写真

第8節　結　語

本遺跡を調査した結果を箇条書に述べ結びにかえたい。住居跡、土坑、貝塚の順に後述する。

住居跡は都合４軒検出されたが、縄文時代のものは５、９、１０の３軒で、いずれも調査区域の関係で全掘できず全容を把握できなかった。又切り合いが激しく検出された部分でも撹乱等が存在、明確に捉えられた遺構は無い。いずれも縄文時代の遺構と推察されるが明確に断定出来る遺構は１０号住居跡のみで他は時期が断定は出来ない。１０号住居跡もかなり土坑、ピット等に掘込まれプランの把握は明確では無いが出土遺物から中期加曾利Ｅ式期の遺構である事は断定される。５、９は遺物から同様の時期が推察されよう。プラン等は不明。１号住居跡は北側に竈を半円形に外側に掘り込み袖は見られず砂質粘土は皆無に近く竈中からの遺物は底部に糸切り底を持つ坏が見られ平安時代の国分期の遺構と推察される。本地区では住居跡は少なく地区により偏在を示すと推察される。

土坑は、１００基程検出されたが全掘出来た遺構は８割り前後で一部エリア外に伸び全容を把握出来なかった。と同時に上部の大半は昭和５０年代に赤土採取の為撹乱され遺構上部は大半が欠失していた。わずかに底部近くが遺存し遺構として捉えられたに過ぎないものも見られた。

土坑群は大きく北側、北側中央、南側中央、南側の４ブロックに分割が可能である。これらは遺構のプランにも差が見られた。北側では円形のプランが多くフラスコ状遺構は少ない。時期は加曾利ＥⅡ式が主体で僅かに２３号土坑に見られたが時期は加曾利ＥⅠ式後半の大型の遺構が見られた。

北側中央部では検出された土坑の半数はフラスコ状土坑で１０基程が円筒形状、フラスコ状、袋状のプランで時期も加曾利ＥⅠ式から晩期までかなりの幅もつ遺構が検出されている。特に晩期の遺物、製塩土器が多量に出土している。本地区は（上部は赤土採取の為撹乱）が入り遺構検出状態は悪い。

南側中央部も（上部は赤土採取の為撹乱）遺構の遺存状態は悪い。本地区も３号土坑を始め円形状とフラスコ状遺構が相半ばする。２７は撹乱されていたが底部部分は残り加曾利ＥⅠ式期の遺構が遺存していた。又本地区は僅かに撹乱部から外れ１０ｍ程の幅で上部から遺存していた。比較的撹乱、切り合いの少ない地区であった。遺物は少ない。時期は加曾利Ｅ式前半である。本地区北側は比較的遺構の遺存状態は良い。フラスコ状遺構のさも多いブロックである。大型のピット群が検出されている地区でもあり堀立遺構も推察される。

南側では大半が上部は赤土採取の為撹乱され遺構の下部のみが遺存し遺構の数は把握出来たがプランは不明。本地区でも人骨が出土している（２号人骨）その他多量のピット群が検出された。出土遺物から縄文期の掘立遺構が推察出来る。少なくとも調査地区で櫓状の遺構、もしくは大型の建物が推察されるピット群が検出されたが撹乱が入り明確には規模は把握出来なかった。その他張り底の８９号土坑等が見られた。南側の道路寄りの斜面は遺構が検出されず平坦部のみが遺構の構築の範囲である。

その他青白色の粘土張りの遺構が４基検出されたが明確に性格を特定する資料は無い。内耳土器が３０点程出土し本遺跡には近世の遺構も存在することが理解される。

貝塚は、北側の谷津の斜面部に位置し本調査でＢ地点とし調査を進めた。その結果８層に分類

され土嚢１，１５０袋分の貝類が出土した。グラフに示すとうり出現率はハマグリが随一であり小型であった。そのほかのアサリ、オキシジミ、シオフキ等はやや小型である。これらから遺跡周辺の環境は梶無川は当時は海で谷津部分が潮の干満で海か干潟になり前述の貝類採集に適した自然環境にあったと推察される。カキ、アカニシの成長は悪くヤマトシジミ、アサリの成長は良い。その他ヒメギセルガイ等の微小貝類は出現率は低い。

魚骨は相対的には少なくタイ、クロダイ属、コチ、エイ目、フグ、サメ、ウナギ、サヨリ属、マイユワシ等が検出され当時の食生活の一端をかいま見る。

哺乳類は少なくイノシシ、シカが大部分でタヌキ、ウサギ，テン、ネズミ等が見られた。鳥類は、ガンカモ類の出現率が主体で他は極小量である。

各層からの土器の出土は少なく断面図を図示し図版に遺物の写真を掲載した。これ等から本貝塚の時期は縄文時代中期阿玉台式期に始まり後期安行期に終息していると理解される。

その他第３層から人骨がほぼ完全に近い状態で検出され貴重な資料を提供する事となった。分析を国立科学博物館の馬場氏にお願いし、結果を掲載したので参考にされる事をお願いしたい。ほぼ調査時点の観察結果と同一であった事を述べておきたい。また、３月１３日、町中央公民館において、『若海縄文人は何処へ』と題してご講演をいただいた。

最後に本貝塚は１９５２年慶応義塾高等学校考古学会によって調査がなされている。

本調査にあたり若海地区区長、地主各位、関係各位の暖かいご協力に紙上をかりて感謝の意を表し結び背にかえたい。

参考文献

於下貝塚	麻生町教育委員会	１９９２		加藤晋平他
上高津貝塚Ａ地点	土浦市教育委員会	１９９４		慶応大学
鳥浜貝塚	福井県教育委員会	１９７９		
縄文人と貝塚	日本考古学会	１９９５		茨城大会実行委員会 ひたちなか市
学術研究第１５号	早稲田大学教育学部	１９６６		西村　正衛
茨城県史研究３７	茨城における貝塚研究の現状		昭和５５年	川崎　純徳
貝	標準原色図鑑		昭和４６年	渡部　忠重 小菅　貞夫

抄　　録

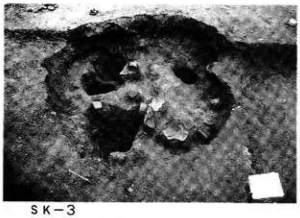
フリガナ	ワカウミカイヅカハックツチョウサホウコクショ
書名	若海貝塚発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著作者名	汀　安衛
編集機関	鹿行文化研究所　／　〒311-221　茨城県鹿嶋市青塚690
発行機関	玉造町教育委員会・玉造町遺跡調査会 ／　〒311-3511　茨城県行方郡玉造町乙1179
発行年月日	西暦1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
若海貝塚（ワカウミカイヅカ）	茨城県行方郡（イバラキケンナメガタグン） 玉造町大字（タマツクリマチオオアザ） 若海457（ワカウミ）	08255	35 1529	36° 7′ 4″	140° 25′ 38″	19980630 19980920	1,550.84 ㎡	町道改良工事に伴う調査

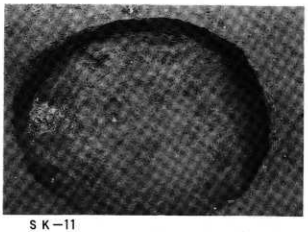
所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若海貝塚	貝　塚	縄文時代 中期・後期 土　　坑	フラスコ状土坑 貝　　層	中期から晩期にかけての土坑群 貝類多量 骨類少量 魚骨類少量 石器類少量 人骨４体分	想像以上の大規模な貝塚で、貝層は良好、貝種多数、骨類は少ない

写　真　図　版

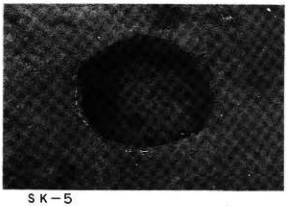
PL－ 1　調査前（上）、調査風景（中）、終了全景（中下）、1号住（下右）、完掘と土坑



ＳＫ－３



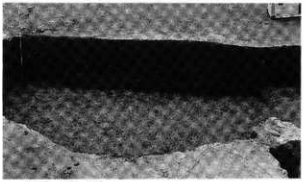
ＳＫ－11



ＳＫ－５

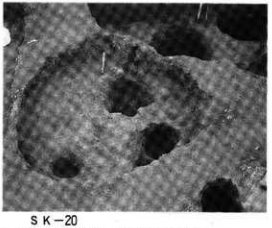
ＳＫ－11，19

ＳＫ－９



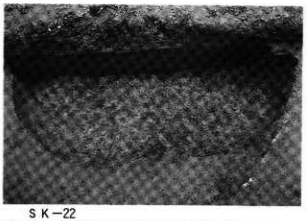
ＳＫ－19，19′

ＳＫ－８



ＳＫ－20

ＰＬ－　２　ＳＫ－３、５、９、８、11、11と19、19と19′、20号完掘、遺物出土状態



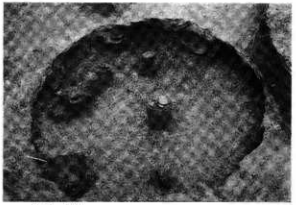
ＳＫ－22

ＳＫ－27

ＳＫ－23

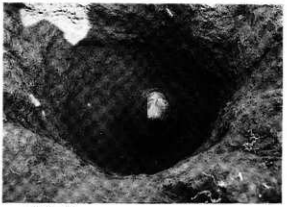
ＳＫ－29（人骨）

ＳＫ－23



ＳＫ－30

ＳＫ－24

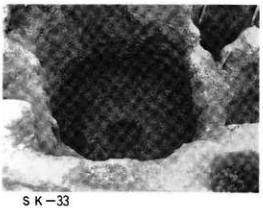


ＳＫ－31

ＰＬ－　３　ＳＫ－22、23、24、27、29、30、31号完掘、遺物出土状態

ＳＫ－33

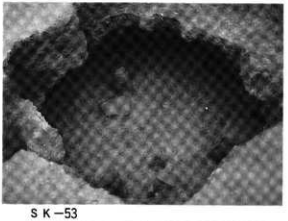
ＳＫ－39



ＳＫ－33

ＳＫ－42

ＳＫ－36



ＳＫ－53

ＳＫ－37

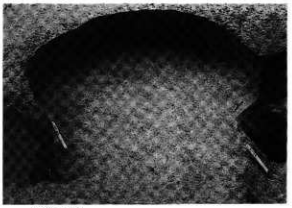
ＳＫ－56

ＰＬ－　４　ＳＫ－33、36、37、39、42、53、56号完掘、遺物出土状態

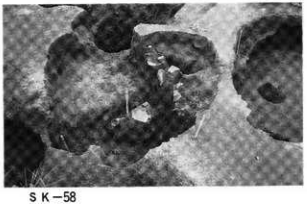
ＳＫ－56

ＳＫ－66

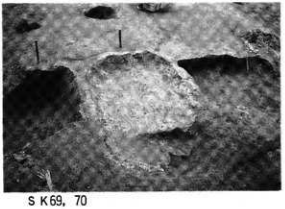
ＳＫ－57



ＳＫ－68

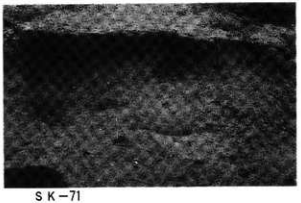


ＳＫ－58



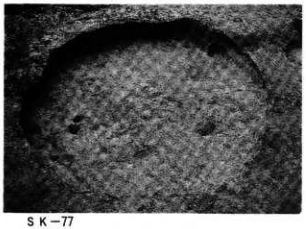
ＳＫ69，70

ＳＫ－61，62

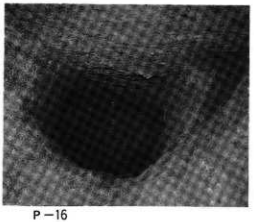


ＳＫ－71

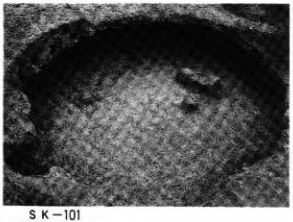
ＰＬ－　５　ＳＫ－56、57、58、61と62、66、68、69と70、71号完掘、遺物出土状態



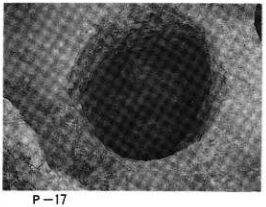
S K－77



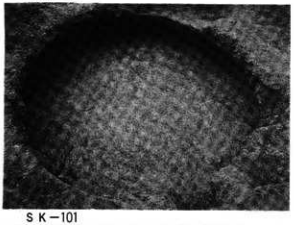
P－16



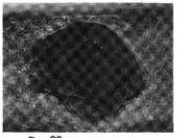
S K－101



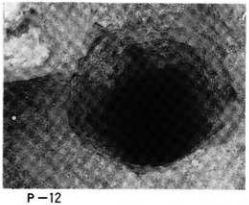
P－17



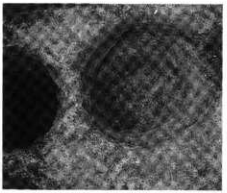
S K－101



P－20



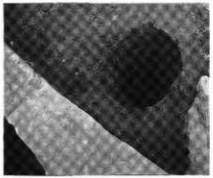
P－12



P－22

P－20～22

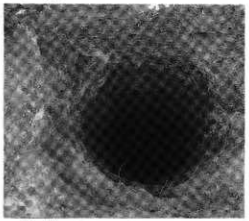
PL－ 6 SK－77、101、P－12、16、17、20、20～22号完掘



P－25

P－39

P－40



P－26

出土土器スナップ

B地点貝塚

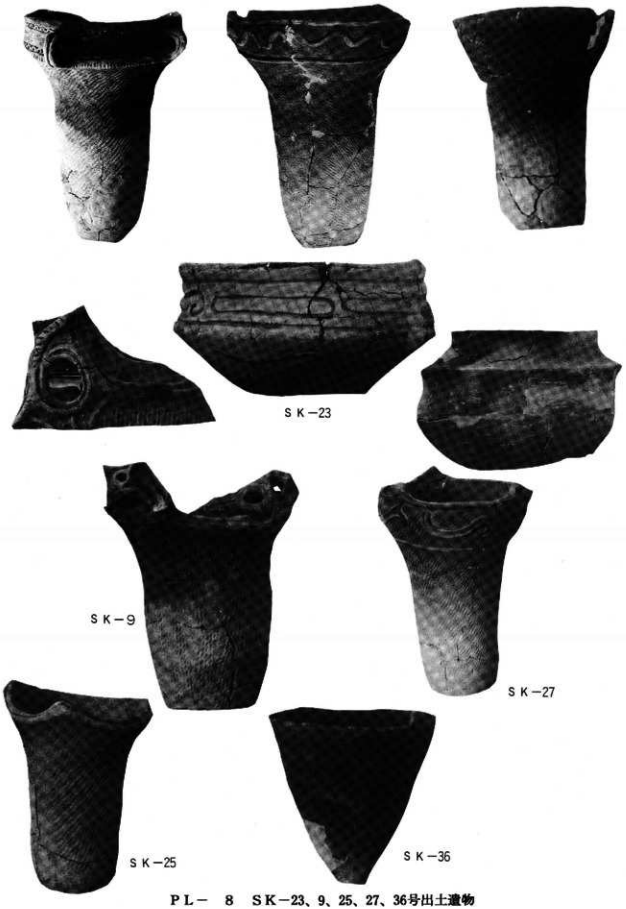
同　貝　層

同細部

遺物出土状態

PL－　7　P－25、26、39、40号出土土器スナップ、B地点貝塚、

同細部（下部）、同貝層、出土遺物状態

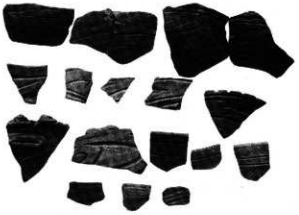


PL－ 8　SK－23、9、25、27、36号出土遺物

SK－36

SK－33

SK－42

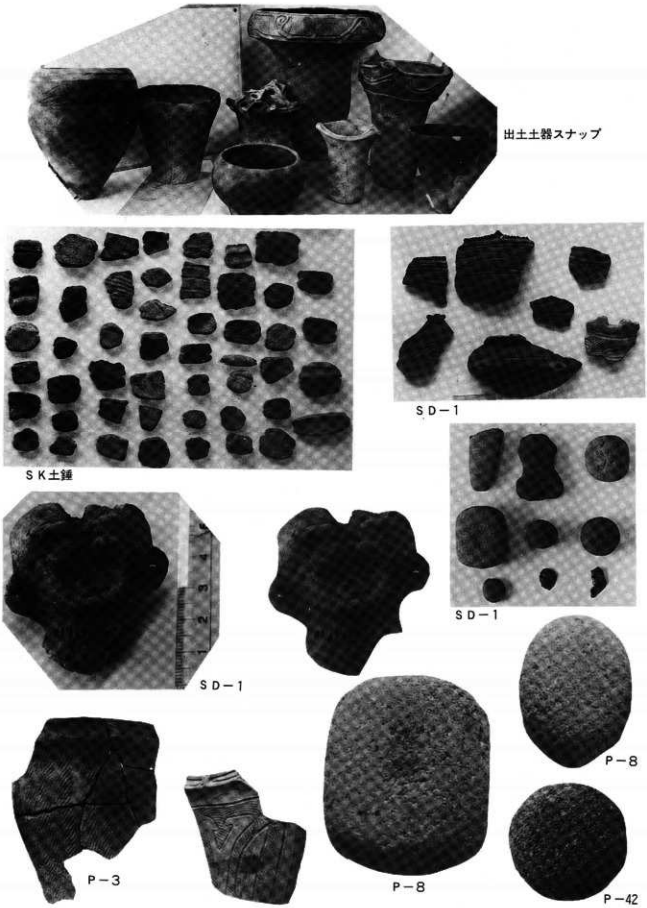


SK－33

SK－42

SK－48

PL－ 9 SK－36、33、42、48号出土遺物



PL－ 10 SK出土の土器片錘、SD－1、P－3、8、42号出土遺物

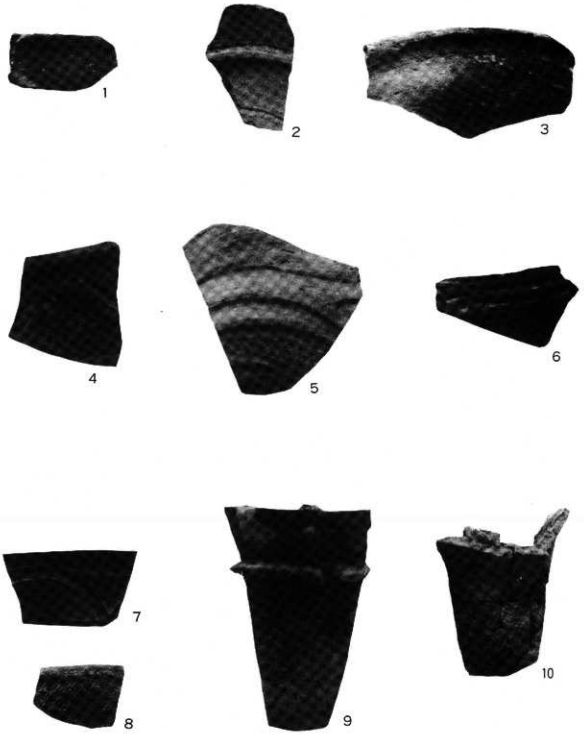
PL－ 11　3層出土土器

3層

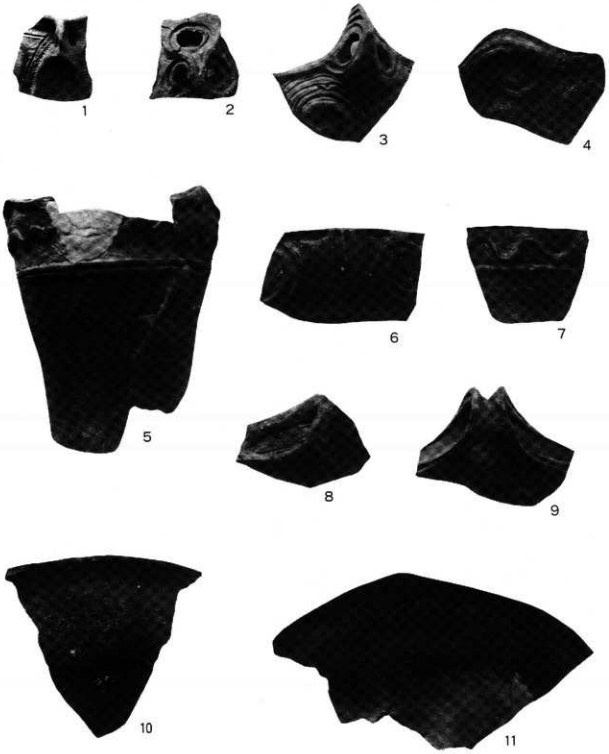
4層

3層

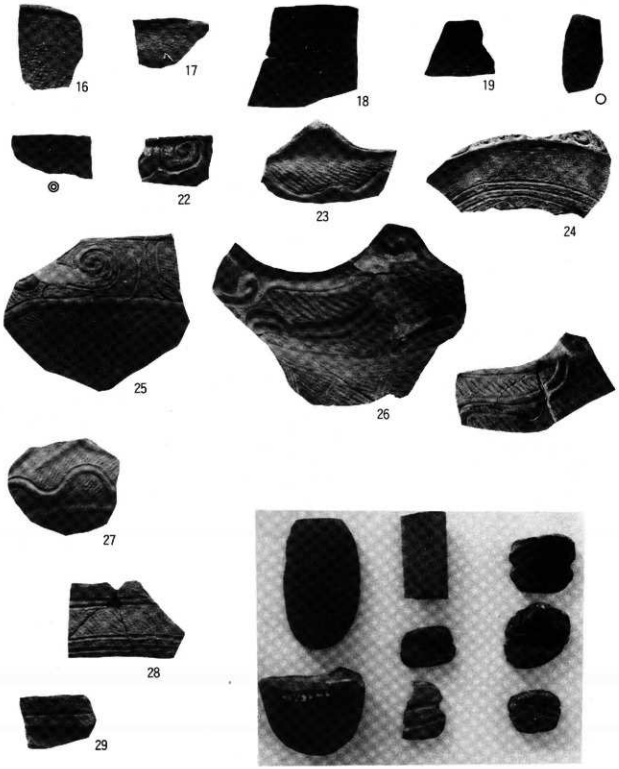
PL－ 12　3層、4層出土土器



PL－ 13　4層出土土器

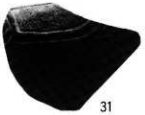


ＰＬ－ 14　5層出土土器



PL－ 15 5層出土土器

30


31

32

33

34

35

◎

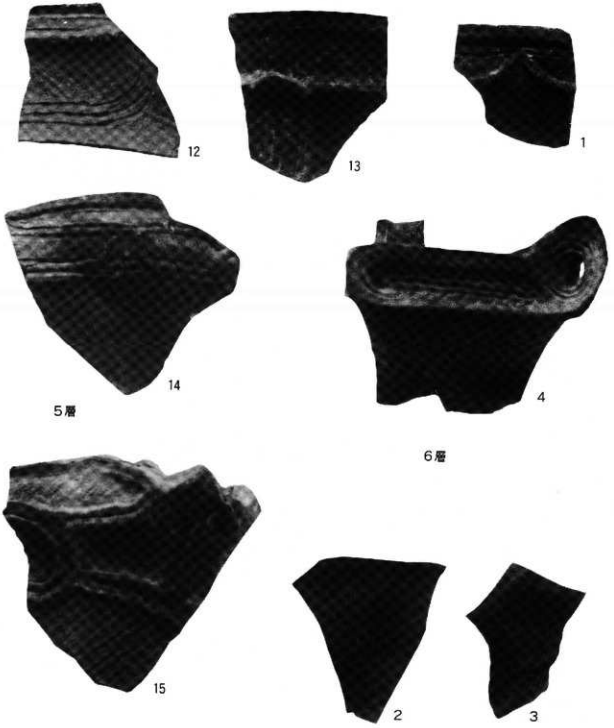
36

37

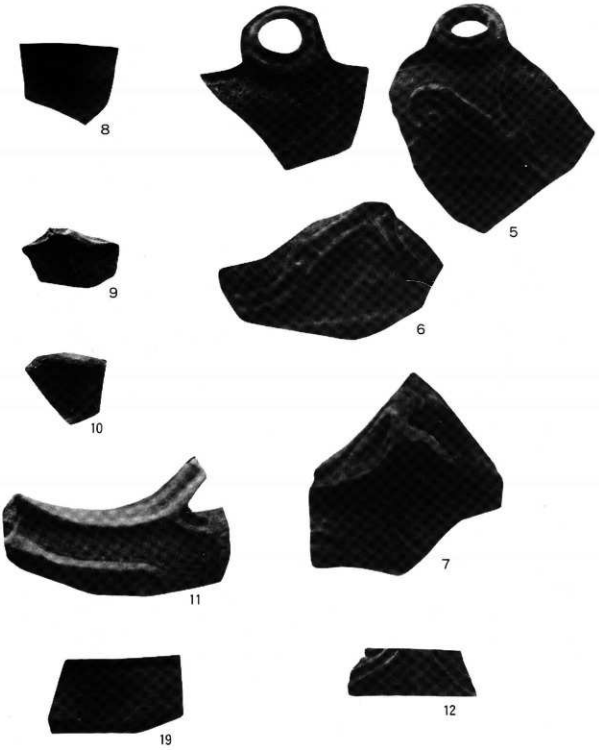
38

39

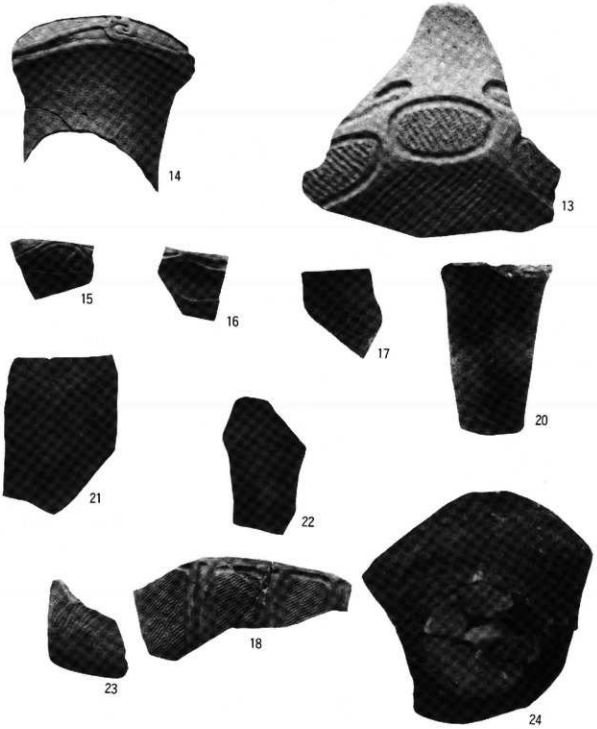
ＰＬ－ 16　５層出土土器



PL－ 17　5層、6層出土土器

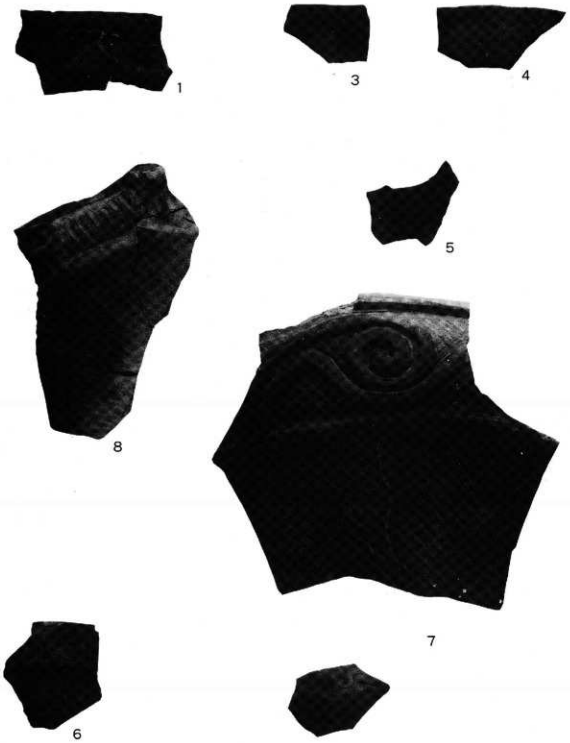


PL－ 18　6層出土土器

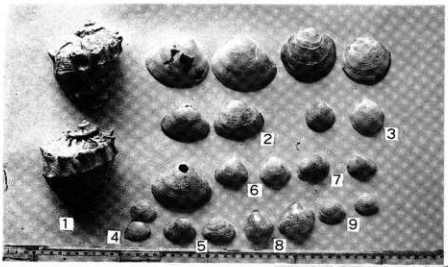


PL－ 19 6層出土土器

PL－ 20　7層出土土器

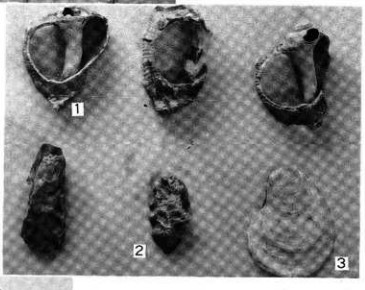


PL－ 21 8層出土土器

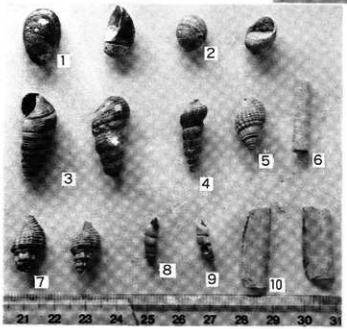


7．サルボウ
8．カ　キ
9．ヤマトシジミ

1．アカニシ
2．ハマグリ
3．オキシジミ
4．ヒメミラトリガイ
5．アサリ
6．シオフキ

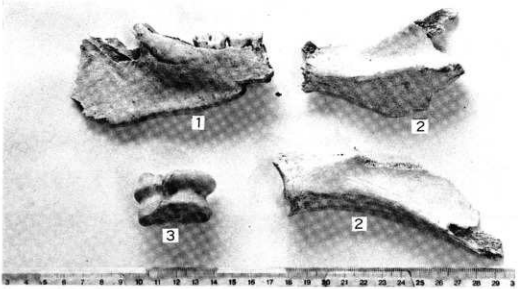


1．アカニシの貝輪未製品
2．ウグイスガイ目
3．マガキ

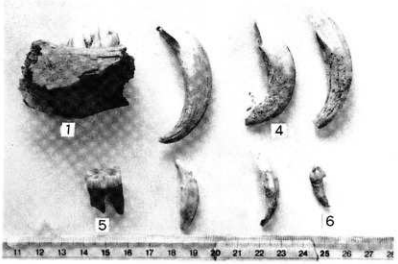


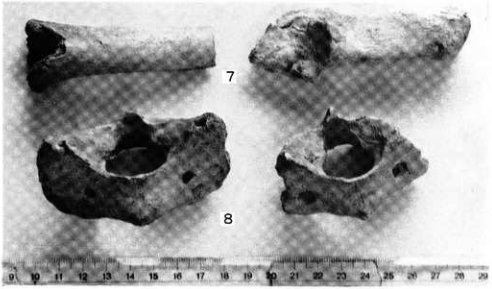
1．カノコガイ
2．カノコガイ属
3．カワアイガイ
4．ウミニナカ
5．ムシロガイ
6．ヤカドツノガイ
7．
8．ヒメギセルガイ
9．ホソオカチョウジガイ
10．マテガイ

PL－ 22 貝　　類



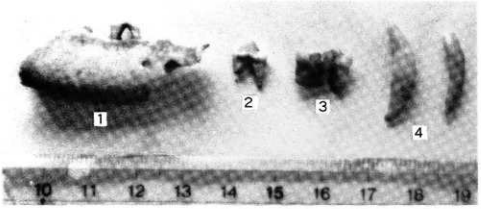
1．イノシシ頸骨
2．肩甲骨
3．シカ距骨
4．犬　歯
5．人間の歯
6．ウサギ？



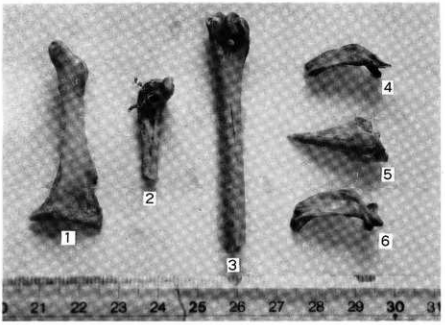


7．中手骨又は
　　中足骨
8．環　椎

PL－ 23 イノシシ、シカ、アシカ類

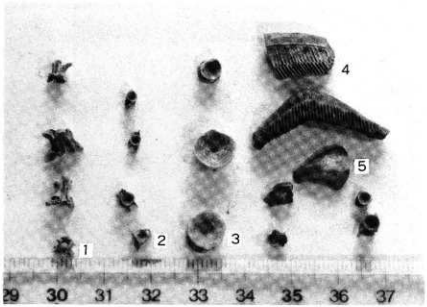


1．犬顎骨
2．　歯
3．人間の歯
4．イノシシ歯

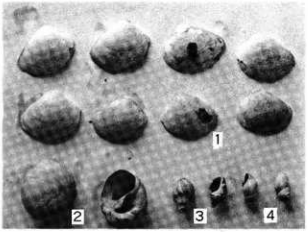


1．ガン，カモ科
2．ガン，カモ尺骨
3．ガン，カモ科
4．クロダイ上顎骨
5．クロダイ属左関節骨
6．クロダイ上顎骨

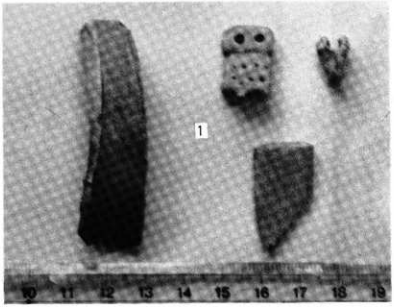
ＰＬ－ 24 哺乳類、鳥類、魚類



1．ヘ　ビ
2．ウナギ椎骨
3．サメ類椎骨
4．エイ目尾棘
5．フグ歯骨

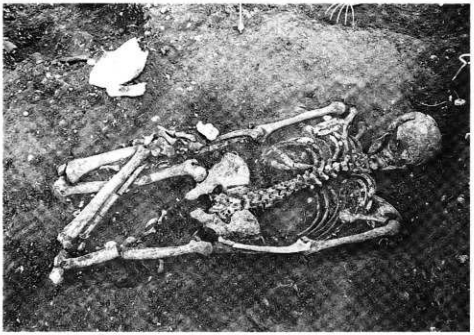


1．ハマグリ貝刃
2．ツメタガイ
3．イボニシ
4．カワニナ



1．各種骨製品

ＰＬ－　25　魚類、貝類、各種骨製品



人 骨 全 景

頭部，胸部

脚　　部

PL－ 26 人骨出土状態

若海貝塚発掘調査報告書

印　刷　平成11年3月31日
発　行　平成11年3月31日

編　集　鹿行文化研究所
発　行　玉造町遺跡調査会
　　玉造町教育委員会

印刷所　(株)さんゆう社印刷